

旧満洲国の多言語環境に関する社会言語学的研究

甲賀 真広

目次

| | |
|-------------------------------|----|
| 第一部 序論..... | 1 |
| 1. 序章..... | 1 |
| 1.1. 研究の目的..... | 1 |
| 1.2. 本研究の意義..... | 2 |
| 1.3. 本研究の構成..... | 2 |
| 2. 用語の定義..... | 4 |
| 2.1. 旧満洲国..... | 4 |
| 2.2. 朝鮮..... | 4 |
| 2.3. 協和語..... | 5 |
| 2.4. 言語ドメイン..... | 5 |
| 2.5. 言語使用..... | 5 |
| 2.6. 言語意識..... | 5 |
| 2.7. アイデンティティ..... | 6 |
| 2.8. 内地..... | 6 |
| 2.9. 引揚げと帰国..... | 6 |
| 3. 先行研究..... | 7 |
| 4. 研究概要..... | 9 |
| 4.1. データ収集方法とインフォーマントの概要..... | 9 |
| 4.1.1. 文字資料を基にした聞き取り調査..... | 9 |
| 4.1.1.1. 文字資料について..... | 9 |
| 4.1.1.2. 聞き取り調査..... | 11 |
| 4.1.1.3. 対象のインフォーマント..... | 12 |

| | | |
|----------|------------------------------|----|
| 4.1.2. | 半構造化インタビュー | 13 |
| 4.1.2.1. | インタビュー方法 | 13 |
| 4.1.2.2. | 対象のインフォーマント | 14 |
| 4.1.3. | 同行調査 | 16 |
| 4.1.3.1. | 調査方法 | 16 |
| 4.1.3.2. | 対象のインフォーマント | 16 |
| 4.1.4. | 引揚者たちの文献調査 | 17 |
| 4.1.5. | NHK アーカイブス | 21 |
| 4.2. | フレーミングとフッティングによる分析 | 23 |
| 5. | 言語環境の予備調査 | 24 |
| 5.1. | はじめに | 24 |
| 5.2. | 文字資料の量的分析 | 24 |
| 5.3. | 接触言語としての「協和語」はどう分類するか? | 27 |
| 5.3.1. | 「協和語」は「ピジン」か? | 28 |
| 5.3.2. | 「協和語」は「混合言語」か? | 28 |
| 5.3.3. | 「協和語」の分類 | 29 |
| 5.4. | 聞き取り調査を通じた文字資料の質的分析 | 29 |
| 5.4.1. | 文字資料に対するインフォーマントのコメント | 29 |
| 5.4.2. | 文字資料の言葉とは異なる言語教育（要検討） | 35 |
| 5.5. | 聞き取り調査から見てきた接触言語への意識 | 37 |
| 5.6. | 本章のまとめ | 38 |
| 第二部 | 各論 | 40 |
| 6. | 言語ドメイン | 40 |
| 6.1. | 市場 | 40 |
| 6.2. | 街中 | 41 |
| 6.3. | 飲食店 | 41 |
| 6.3.1. | 中国料理店 | 42 |
| 6.3.2. | ロシア人のチョコレートのお店とパン屋 | 42 |
| 6.4. | 自宅 | 43 |

| | | |
|--------|--------------------------------|----|
| 6.4.1. | D2 の中国人使用人との会話 | 44 |
| 6.4.2. | D1 の中国人使用人との会話 | 44 |
| 6.4.3. | 訪問販売員との会話 | 45 |
| 6.5. | 学校 | 46 |
| 6.5.1. | 安東の学校 | 46 |
| 6.5.2. | 撫順の学校 | 48 |
| 6.5.3. | 大連の学校 | 50 |
| 6.6. | 教会 | 52 |
| 6.7. | ソ連軍進軍 | 54 |
| 6.8. | 全ドメイン | 55 |
| 7. | 言語使用 | 57 |
| 7.1. | 中国語 | 57 |
| 7.1.1. | 日本人が使用した中国語 | 57 |
| 7.1.2. | 中国人が使用した中国語 | 68 |
| 7.2. | 日本語 | 70 |
| 7.2.1. | 日本人が使用した日本語 | 70 |
| 7.2.2. | 中国人が使用した日本語 | 72 |
| 7.2.3. | 朝鮮人が使用した日本語 | 74 |
| 7.2.4. | 内地から来た日本人が使用した日本語 | 75 |
| 7.2.5. | ソ連兵が使用した日本語 | 76 |
| 7.3. | その他の言語 | 77 |
| 7.3.1. | フランス人が使用した英語 | 78 |
| 7.3.2. | 日本人が使用したドイツ語 | 79 |
| 7.3.3. | 日本人が使用したロシア語 | 80 |
| 7.3.4. | 28 年ぶりに帰国した日本人が使用した「混合型」 | 83 |
| 7.4. | 言語使用のまとめ | 88 |
| 8. | 言語意識 | 90 |
| 8.1. | 各民族が話す日本語に対する意識 | 90 |
| 8.1.1. | 旧満洲国の日本人が話す日本語に対する意識 | 90 |

| | | |
|-----------|--------------------------------------|-----|
| 8.1.2. | 内地の日本人が話す日本語に対する意識 | 96 |
| 8.1.3. | 朝鮮人が話す日本語に対する意識 | 99 |
| 8.1.4. | 中国人が話す日本語に対する意識 | 100 |
| 8.1.4.1. | 安東 | 100 |
| 8.1.4.2. | 撫順 | 101 |
| 8.2. | 各民族が話す中国語に対する意識 | 103 |
| 8.2.1. | 旧満洲国の日本人が話す中国語に対する意識 | 104 |
| 8.2.1.1. | 安東 | 104 |
| 8.2.1.2. | 大連 | 106 |
| 8.2.2. | 内地の日本人が話す中国語に対する意識 | 107 |
| 8.3. | 各民族が話す他言語に対する意識 | 108 |
| 8.3.1. | 旧満洲国の日本人が話す英語に対する意識 | 108 |
| 8.3.2. | フランス人が話す英語に対する意識 | 109 |
| 8.3.3. | 旧満洲国の日本人が話すドイツ語に対する意識 | 111 |
| 8.3.4. | ソ連兵が話すロシア語に対する意識 | 112 |
| 8.4. | 言語意識のまとめ | 113 |
| 9. | 言語とアイデンティティ | 115 |
| 9.1. | 安東におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ | 115 |
| 9.2. | 撫順におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ | 119 |
| 9.3. | 大連におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ | 121 |
| 9.4. | 大連, 奉天におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ | 123 |
| 9.5. | 方正県におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ | 125 |
| 9.6. | 言語とアイデンティティのまとめ | 127 |
| 第三部 | 結論 | 129 |
| 10. | 本研究のまとめ | 129 |
| 10.1. | 各論のまとめ | 129 |
| 10.2. | 今後の課題 | 139 |
| 参考文献 | | 140 |
| 既発表論文との関係 | | 144 |

| | |
|---------|-----|
| 付記..... | 145 |
| 謝辞..... | 146 |

第一部 序論

1. 序章

本章ではまず、研究の目的、研究の意義を述べ、研究の位置づけを明確にし、本研究の構成を示す。

1.1. 研究の目的

戦時下の中国東北部に建国された旧満洲国は、第二次世界大戦の終戦とともに終わりを迎えた（1932.3～1945.8）。日本の国策のもと、その前後の期間を含め旧満洲国には、王道楽土の地を求めた開拓民など、多数の日本人が暮らしていた。しかし、そこにいたのは日本人だけではない。彼らは他民族（満洲民族、漢民族、朝鮮民族、蒙古族）とともに共生していたのである。そのような言語環境において、言語接触が起きていたことは間違いない。本研究では、旧満洲国はどのような言語環境であり、どのような言語使用がなされ、その言語に対してどのような言語意識を形成し、またそれらは彼らのアイデンティティにどのように影響していたかを明らかにすることを目的とする。



図 1-1 旧満洲国地図

1.2. 本研究の意義

本研究のテーマである旧満洲国は、多民族国家であった。さらに特徴的なのは日本人が優位な立場にありながら多言語化が進んだということである。日本人が優位な立場で多言語化が進むというのは現代の日本国内で起こっている状況とまさに一致するといえよう。つまり、旧満洲国と現代日本は共通の問題に直面することは容易に想定できる。したがって、旧満洲国にいた彼らが当時どのように多民族同士でコミュニケーションを行ない、どのように感じていたか、どのような点でうまく共生でき、どのような点で苦勞をしたかを明らかにすることで、今後の日本が直面する多言語社会の問題解決に役立つ基盤となる研究となる。ただし、本研究は調査結果を一般化することは目指していない。目的とするのは、具体的な事例を通して、今後の日本で同様あるいは類似した状況が起こった際、日本人優位国家であった旧満洲国ではどのような対応がなされたか、という過去の事例を参照できるようにすることである。

1.3. 本研究の構成

本研究は3部、10章で構成されている。

第1部は、第1章から第5章からなり「序論」とする。

第1章は前述のとおり、研究の目的、研究の意義を述べ、研究の位置づけを明確にし、本研究の構成を示している。

第2章では、本研究における用語の定義を確認する。

第3章では、旧満洲国に関する先行研究を概観する。

第4章では、本研究の研究概要を述べる。本研究では文字資料を基にした聞き取り調査、あらかじめ質問項目をいくつか決め行なった半構造化インタビュー、旧満洲国で生活経験のある者たちとともに旧満洲国を訪れて調査した同行調査、引揚者を中心とした会が定期的に刊行している会報分析、NHKアーカイブスの映像資料分析を行なっている。これらのデータをどのように収集し、そしてそれらをどのように分析しているかを提示する。

第5章では、文字資料を基にした量的分析と質的分析を行なう。これは予備調査的な位置づけとし、言語環境、言語使用、言語意識についても分析を行なう。

第2部は、第6章から第9章からなり「各論」とする。

第6章では、言語ドメインについて言及されていた部分を取り上げ、それぞれのドメインでの使用言語を明らかにする。

第7章では、言語使用について言及されていた部分を取り上げ、インフォーマントが使用した言語の具体例が正しいものか間違っているものか、それがどのような言葉なのかを明らかにする。

第8章では、言語意識について言及されていた部分を取り上げ、インフォーマントが、各民族が話す各言語に対してどのような意識を構築していたかについて明らかにする。

第9章では、言語とアイデンティティについて言及されていた部分を取り上げ、インフォーマントのアイデンティティに対して旧満洲国という多言語環境がどのように影響を与えていたかを明らかにする。

第3部は第10章からなり「結論」とする。

第10章では、第5章から第9章の結果を踏まえ、地域ごとの言語環境を明らかにする。そのうえで今後の課題を述べる。

2. 用語の定義

本章では、本研究に用いる用語を概説する。用語の中には、一般的に使われる場合に政治的・社会的・差別的な意味合いが含まれるものもあるが、本研究では用語によってそれらの意味を肯定・否定する意図は一切ないことをあらかじめ断っておく。

2.1. 旧満洲国

まずは旧満洲国という用語についてである。旧満洲国は、1932年に中国東北部に建国されたいわゆる傀儡国家である。この旧満洲国と同義で使われる用語はいくつかある。例えば「偽満洲国」がそれだろう。先に建国されたと述べたが、そもそもそれを国として認めないという立場から「偽満洲国」と呼ばれている。

また、「洲」という漢字についても、「州」と表記されることがある。これは「洲」が常用漢字でないため、近年出された本などでは「州」とされるのである。

重複するが本研究では、用語の背景に特段意味を持たせるものではない。それを念頭に置き、「旧満洲国」で統一する。ただし、聞き取り調査の中で「満洲」と言及された箇所もあるが、インフォーマントの言葉を優先し、「旧満洲国」ではなく「満洲」と表記している。

また、同時期、旧満洲国の隣に、日本の租借地として関東州が存在していたが、ほとんどの先行研究でこの関東州と旧満洲国を分けて考察されていない。本研究でも、その方針に則る。そのため、関東州大連の方にも聞き取り調査を行なったが、関東州と旧満洲国をあえて分けて分析することはしなかった。したがって本研究で旧満洲国と言った場合には、大連も含まれている。

2.2. 朝鮮

本研究では現在の大韓民国、朝鮮民主主義共和国を指して、「朝鮮」という。それに伴って朝鮮民族、朝鮮人、朝鮮語という言葉を使うが、差別的な意味は一切ないことを先に述べておきたい。

2.3. 協和語

旧満洲国の言語接触によって生まれた言語に対する名称は、数多くある。例えば、協和語、ピジン中国語、兵隊支那語などである。本研究では、協和語という用語を用いる。しかし、この接触言語の協和語に関しては、未だにどういったものであったか全体像が見えていないのが現状である。そこで本研究では、日本語と中国語が混ざった形で表れているものを協和語とする。

本研究では文字資料を用いての量的分析は行なっているが、聞き取り調査ではこの接触言語に関する言及がほとんどなかったため、それ以上の考察・言及は今後の課題としたい。

2.4. 言語ドメイン

本研究の第6章で言語ドメインという観点から分析を進める。言語ドメインでは、旧満洲国のような多言語社会において、ある場所でどのような言語が使われたかを取り上げる。第6章では、日本語、中国語、あるいはそれ以外の言語といった言語レベルを扱う。

2.5. 言語使用

第7章で述べる言語使用とは、誰がどのような言葉を使ったかを分析していくものである。言語ドメインでは場所ごとにどのような言語が使われたかを見ていくが、言語使用ではその言語のうち、具体的にどのようなものが使われたかを見ていく。

2.6. 言語意識

第8章の言語意識は、それぞれの民族が話す各言語に対する意識を分析するものである。この言語意識という用語は広い意味でとらえていく。例えば、先生ならば正しい日本語を話さなければならないという意識や、大阪方言よりも中国語の方が身近に感じるという意識、東京方言話者の話し方がきれいに聞こえるという意識などを取り上げる。したがって、本研究では言語に対してどのように思っていたかという意味で言語意識を使用する。

2.7. アイデンティティ

アイデンティティは様々な意味で使われる用語の一つである。その中の一つには自己同一性という訳が当てられ、「私はこういう人間である」といったものがある。

本研究では社会言語学的な意味でアイデンティティを使用する。すなわち「帰属意識」という意味である。本研究の事例でいえば、旧満洲国で生まれたインフォーマントは、日本人としての帰属意識を持つのか、それとも旧満洲国人としての帰属意識を持つのか、また別の帰属意識を持つのかを分析していく。日本人としてのアイデンティティ（帰属意識）を持つのであれば日本本土が帰る場所になるだろう。一方で旧満洲国人としてのアイデンティティであれば、日本本土に引揚げて来ても帰ってきたという感覚にならないだろう。

このように本研究では、帰属意識という意味でアイデンティティを用いる。

2.8. 内地

内地とは外地と対比して使われる言葉で、日本国内のことを指す。また、外地とは日本国外において日本の統治下にあった場所である。外地には旧満洲国や台湾、朝鮮などが挙げられる。

2.9. 引揚げと帰国

本研究の聞き取り調査に協力してくださったインフォーマントは、旧満洲国からの引揚者と帰国者である。この二つの意味は似ているが異なる。引揚者は第二次世界大戦終戦後、数年以内に内地へ帰ってきた者を指す。それに対して、帰国者は終戦直前に旧満洲国から帰ってきた場合に用いる。これらに伴って、引揚げは引揚者が帰ってきたこと、帰国は帰国者が帰ってきたことに用いる。

そして帰国は、終戦後数年以内に帰国出来ず残留孤児・残留婦人となってしまった者が内地へ帰ってきた場合にも用いる。NHK アーカイブスによって残留日本人のドキュメンタリー番組が作られており、彼らは「日本へ帰りたい」とは言うが「引揚げたい」とは言わない。このことから、帰国という言葉を用いるに至った。

3. 先行研究

19世紀末から始まった日本の領土拡張に伴い、日本語の使用地域の拡張も図られた。この政策によって当該地では日本語とその土地に住む民族の言語が混在する多言語化が進み、それらの言語の間で言語接触が起こったのである。例えば台湾、サイパン、パラオや、旧満洲国などがその舞台となっている。これらの地域の言語接触の状況を把握するために、文献調査はもちろんのこと、聞き取り調査などを基にした研究が盛んに行なわれてきた。例えば、台湾については簡・真田(2011)、サイパンなどについてはロング・新井(2012)が挙げられる。

そして、本研究のテーマである旧満洲国の研究は言語学に関しても当然のことながら行なわれているが、他にもさまざまな領域で研究がなされている。まずは言語学以外のものを述べておきたい。

教育史の分野では斉(2004)による旧満洲国における中国人に対する教育に対して教育を受けた者はどのように感じていたかを指摘している。

日本語教育学の分野では国策として日本語の教育がなされ、住民に帰属意識を植え付けようとしていたこと、「国家」や「国語」という用語を通して支配者としての日本人の意識を明らかにしようとしたものがある（三谷 1996）。

他に、美術史の分野では、約 3000 枚の軍事郵便絵葉書から、戦争画の意味や制作背景、画家たちの任地に赴く経緯等を検証し、表象の視点から戦時中における「帝国」文化の一端を明らかにしたものがある。

本研究のように言語に関する報告には張(2012)がある。これは当時の街の風景写真から看板にみられる言語形式などを探ったものである。このような言語形式を新聞や雑誌から探った大久保(2017)もある。また、金水（2014）、桜井（2015）などもあるが、これらの研究は、主に言語形式や言語構造を対象にしたものがほとんどであり、他の地域でみられるような言語意識や言語使用、言語とアイデンティティといったことまでは及んでいないのが現状のようである。さらに、旧満洲国の言語教育については祝(2014)が挙げられるが、「日本語教員はいかに日本語を教えていたか」という日本語指導法が主である。聞き取り調査を行なっているものの、インフォーマントの言語とアイデンティティの相関について詳細な分析はしておらず、「戦後、満洲国時代の日本語知識を基礎として、翻訳、通訳、日本語教育などの中国の教育事業に身を投じていた」という言及

にとどまっている。

このように近年盛んに行なわれる旧満洲国に関する研究であるが、体験記や回想録、各引揚者団体の会報を収集し、旧満洲国の「記憶」を保存・共有しようとする一橋大学の大学院生、若手研究者を中心とした団体までも出てきている（「満洲」 2015；飯倉ほか 2016）。

旧満洲国の研究は盛んに行なわれるようになってきているが、社会言語学の分野においてはまだ十分とは言えず、さらに聞き取り調査、映像資料、会報を複合的にデータとして用いた研究は管見の限り見当たらない。そこで、本研究では旧満洲国の言語学の分野において、なされてこなかった聞き取り調査を中心とした複合的なデータの分析を通じて、言語環境をはじめ言語に関することを明らかにしていく。

4. 研究概要

本章では、本研究で用いたデータを誰からどのように収集し、どのように分析を行なうかについて述べていく。

本研究では、各調査の結果を提示するのではなく、言語環境、言語使用などの観点ごとにあてはまるものをデータから抽出し分析を行なうものである。したがって、データがどのように収集されたかは結果に影響することがない。例えば言語使用であれば、それが使われていたということが重要なのであり、言語意識であればどのような意識がその中に言葉の中に現れているかが重要なのである。このように、たとえインタビュアーが異なっても、インタビュアーがいない場合でも本研究では影響が出ないものと判断している。

4.1. データ収集方法とインフォーマントの概要

まずは、データ収集方法を述べ、そのデータ収集方法ごとに協力してくれたインフォーマントが異なるため、各調査方法と合わせて協力してくれたインフォーマントを紹介する。ただし、ここでは調査結果については触れず、結果については各論で扱うものとする。

4.1.1. 文字資料を基にした聞き取り調査

まずは本調査で基にした文字資料について概説する。そして、それを用いてどのような調査を行なったのか、誰に行ったのかということを述べていく。

本節の調査は予備調査的な位置づけである。この聞き取り調査から明らかとなったことを基にして質問票を作成し、他の調査を行なっている。

4.1.1.1. 文字資料について

本調査で用いた文字資料は、張(2011, 2012)で取り上げた軍事郵便絵葉書である。この文字資料について張は次のように説明している。

本研究でデータとして用いた資料はすべて筆者が所持している戦時中の旧日本

軍で流通していた軍事郵便絵葉書の原物であり、作者名は明記されないのがほとんどである。戦後 66 年以上経過しているので、著作権の期限が切れている。これらの絵葉書は「満洲国」時代の言語景観関連データの収集段階で、日本の古本屋、大型絵葉専門店のポケットブックスなどから入手したものである。

軍事郵便とは第二次世界大戦中に戦地にいる軍人が日本へ、或いは日本から戦地の軍人に向けて私信を送るための郵便制度である。通常、無料で枚数の制限はあるが、軍事行動などに係る文書は含まないことになっていた。軍内部の検閲上の理由で、郵便物自体は封筒を使わない検閲可能な葉書が多用され、軍事郵便葉書と呼ばれていた。当時の従軍画家を中心に描かれた軍事郵便絵葉書には、山水画、漫画、戦争画などが取り入れられ、特に軍事教育、言語教育、国威高揚の宣伝手段としてよく用いられていた。

(張 2011 p.55)

ここからわかるように、調査で用いた文字資料は戦地にいる人から日本へ、日本から戦地へ宣伝手段、いわゆるプロパガンダとして送られたものである。また張はこの文字資料についてこうも説明している。

一方、本研究用の絵葉書は「満洲国」時代の軍隊生活、現地人との交流場面(食生活、買物、学習、遊楽、理髪、乗車、交通整備など)を描写しているだけでなく、登場人物の会話内容も文字化記述されているのである。資料の信憑性については確保されていると考えている。

(張 2011 p.55-56)

本研究では、「芸術は天から落ちるものではなく、生活から来るものである。生活原型がなければ、芸術家にも創作のインスピレーションは現われない(張 2012)」とあるように、インフォーマントがかつて住んでいた旧満洲国での生活原型を探るための糸口として文字資料を用いている。さらに、旧満洲国に関する文献や関連データは限られている中、このような文字資料を分析することは非常に有益であると判断した。そのため、これをもって知りうることを提示するために使用する。

4.1.1.2. 聞き取り調査

2015 年から定期的に聞き取り調査を行っており、2015 年 8 月 5 日、2016 年 5 月 29 日および 8 月 7 日の 3 回に渡り、デジタル録音をしながら合計 8 時間程度の半構造化インタビューを実施している。その中で、文字資料を基にした半構造化インタビューは 2016 年 5 月 29 日に行なったものである。

調査の内容として、文字資料である絵葉書を下記（資料 4-1）のように文面のみを見せて、そこに載っている表現や単語を使っていたかどうか、当時の言語環境などについて尋ねている。その結果、言語環境だけにとどまらず、日本人住民として見た旧満洲国での生活の様子、自身の中国語学習、旧満洲国で生まれたことのアイデンティティなどについて聞くことができた。言語環境の一例として、「クワイクワイデー」という語が記載された資料 1 について言及しているのが以下の事例 1 である。

資料 4-1：「記念撮影」

| | |
|-------|-------------------------------------|
| 日本兵 1 | ニデー(お前)一緒に写真撮るからクワイクワイデーライライ(早く来いよ) |
| 日本兵 2 | ミンパイ(解った) |
| 日本兵 3 | いよう一生一代の顔だぞ・・・・・・・・ |

事例 1：資料 4-1 を見た A2 のコメント

| | |
|----|--|
| A2 | 「クワイクワイデー」これは「急いでくれ」って意味だよ「急いでやれ」って |
| R | 「急いで」なんだ |
| A2 | 「急いで」だよ「早くやれ」って「クワイクワイデー」,「早く」「急いでやれ」「のろのろやるな」って意味だよ, 日本兵が使う場合な,「早く持つてこい」とか日本兵が使ってた, 苦力って知ってるだろ? 使用人だよ, 苦力ってというのは家事をしたり土方やったりするんだよ |

本研究で取り上げた文字資料は、日本語の要素はすべてを日本語母語話者の筆者が確認し、それを 4 等分に分けたのちに日本語母語話者 10 名で文法性判断を行なっている。

また、中国語の要素は中国語母語話者 3 名による文法性判断を行なってもらっている。本研究で文字資料について、「正文である」や「非文である」と述べた場合、すべてこのときの文法性判断の結果に依拠している。

4.1.1.3. 対象のインフォーマント

本調査に協力してくれたインフォーマントは 1 名である。便宜的に彼を A2 とする。番号の付け方は、出身地の頭文字＋番号とする。「2」とした理由は、彼の姉にも聞き取り調査を行っており、生まれた順としたほうが分かりやすいと考えたためである。本研究では A=安東、D=大連、F=撫順、X=新京の出身者としている。また、R=調査者、S=息子である。

A2 は 1928 年に生まれ、89 歳の男性である（2018 年 1 月現在）。生まれてから 17 歳まで旧満洲国の安東(現在の丹東市)で暮らしていた。したがって戦後に引揚げてくるまで内地のことは知らない。旧満洲国の地図に、A2 が住んでいた安東の所在を筆者が円で示した（図 4-1）。



図 4-1 旧満洲国の安東

彼の父はアメリカで牧師をしていた経験があり、旧満洲国の安東でも牧師として赴任

していた。A2 は南満洲鉄道株式会社が作った日本人学校に通っていた。この学校は日本人からの人気が高く、日本人であるにもかかわらず入学できない人もいた。その一方で、優秀な朝鮮民族の学生は数名ではあるものの入学を許され、日本人と同じように授業を受けていたという。この学校内では朝鮮民族だからといった差別はなかったようである。終戦直前のソ連軍による旧満洲国への侵攻で、A2 をはじめ多くの日本人は金品を取られ職も失い生活が困窮していたことや、船が接近または接触すると爆発する機雷が海に残存しており引き揚げ船が出港できないといったことから、A2 は 16 歳で終戦を迎えたが、すぐに日本に引き揚げることができなかった。A2 とその家族は、家財道具を中国人に売り歩かなければならず、大変苦勞をした経験を持つ。その時の様子を彼の母親が記していたので、一部紹介したい。終戦後に、「酒気を帯びたソ連兵に、『金と女を出せ。』とピストルをつきつけられた」経験があることや、「菓子、南京豆、ビールをたらふく飲み食いしくばくかの金を手にして帰った兵隊もいました。終戦から一年以上もこのような状態が続き、住民は一日も早く祖国に引揚げたいと話合っていました。(甲賀 1952, 1968)」ということを書いて記している。A2 は、戦時中にも関わらず、戦争が起きていること自体もどこか遠い場所で行なわれていたものであったと話していた。しかし終戦後になって初めて彼らにとって困難が待っていたという。

これまで三度に渡って調査を行なってきたが、A2 は優れた話術と克明な描写で当時の状況について語ってくれた。

4.1.2. 半構造化インタビュー

ここでは A2 を含め 6 名に行なった半構造化インタビューについて述べていく。

4.1.2.1. インタビュー方法

聞き取り調査は D2 を除き、すべてインフォーマントの自宅で、彼らがリラックスして話せる環境で行なった。事前に質問リストを送付しているインフォーマントもいればそうではないインフォーマントがいた。質問リストの中には「家族構成」から「当時の生活の様子」、「使用していた、あるいは聞こえてきた言葉」などを項目として設けていた。ただし、アイデンティティや、言語と自己形成の関連といった直接的な項目は設け

ていない。D1 以外の 3 名もこの質問リストとほぼ同じことを尋ねる半構造化インタビューとして聞き取りを行なった。しかし、すべてのインフォーマントに全く同じ質問でそれぞれの回答を得たのではなく、彼らの伝えたいことを中心に聞き取りを行なった。そのため D1 にも質問リストに対しすべての回答を得ているわけではない。また、調査時にインフォーマントと筆者と一対一で行なったものもあれば、同席者がいた場合もあったが、いずれにしても筆者が中心となって調査を行なっている。

調査に協力してくれたインフォーマントは次々に当時のことを子細に述べてくれた。

4.1.2.2. 対象のインフォーマント

A1 はアメリカで出生(1924)後すぐに日本へ戻り、ほどなくして安東へ引越し、そこで 22 歳まで(1946)生活していた。自身の最初の記憶はすでに安東で生活しているものであるという。A2 は両親が旧満洲国へ引越し後に生まれている(1928)。A1 と A2 の両親はともに千葉県出身の日本人で、安東へ移住した理由は仕事(教会の牧師)である。A1 がアメリカで生まれていることからわかるように、彼らの両親はアメリカでの生活経験がある。アメリカへ行ったのは旧満洲国へ行った理由とは違い、A1、A2 の父親が歯科医を志していたからである。

F1 と F2 は姉妹で、二人とも旧満洲国撫順生まれである。彼女たちの両親は石川県と鹿児島県出身である。彼女たちの父親は明治ごろ（1904 年，日露戦争前後）から大連に渡っており，大連で結婚，そして長男を大正元年（1912 年）に授かっている。その後 F1 と F2 が生まれる前に，一度内地へ帰国。そして旧満洲国へ移住する。移住後の昭和 2 年（1927 年）に F1 が，昭和 11 年（1936）に F2 が生まれた。

F1 は女学校まで卒業しており，18 歳で旧満洲国にて養護教諭を経験している。

一方 F2 は，終戦当時小学生であり，聞き取り調査時には記憶に自信がなさそうにしていたが，かなり多くの旧満洲国のことを思い出してくれた。

日本語を話せる中国人の使用人を雇っていた。その使用人の中国語しか話せない家族とも一緒に同居していたため，中国語を耳にする機会は日常的にあったことが推察される。

筆者とはこのインタビュー時に初めて会っており，こちらが事前に送った質問リストと研究内容に目を通していただいていたという関係性でしかなかった。彼女たちとの出

会いのきっかけは、筆者が学会発表を行なった際に、F1 の息子(S)と話をし、紹介をしていただくに至った。

D1 と D2 は大連出身の女性と男性である。二人に血縁関係はなく、お互いのことも知らない。D1 の両親も日本人であり、13 歳まで（1932～1945 年）大連で生活していた女性である。女学校入学後すぐに終戦を迎えているため、女学校での学習は 4, 5 か月である。

家では使用人を雇っており、中国人が身近にいるという環境で育っている。詳細は後述するが、彼らとは日本語で会話がなされていたようである。

D2 は 1931 年生まれで、1943 年まで大連で生活していた。帰国は小学校 6 年生のころであった。ほかのインフォーマントと同様に両親ともに日本人である。父親は大連で貿易関係の仕事をしており、そのおかげで中国語を話せたという。

D2 の家庭でも使用人がいたが、D1 とは違い中国語で話していたという。こちらも詳細は後述する。

半構造化インタビューに協力していただいたインフォーマントの概要は表 4-1 の通りである。

表 4-1：半構造化インタビューのインフォーマント

| | 性別 | 出生地 | 生活地 | 期間 | 録音時間 |
|----|----|-----|-----|------|--------|
| A1 | 女 | 米国 | 安東 | 22 年 | 1.5 時間 |
| A2 | 男 | 安東 | 安東 | 17 年 | 8 時間 |
| F1 | 女 | 撫順 | 撫順 | 18 年 | 2.5 時間 |
| F2 | 女 | 撫順 | 撫順 | 9 年 | 2.5 時間 |
| D1 | 女 | 大連 | 大連 | 13 年 | 1.5 時間 |
| D2 | 男 | 大連 | 大連 | 12 年 | 1.5 時間 |

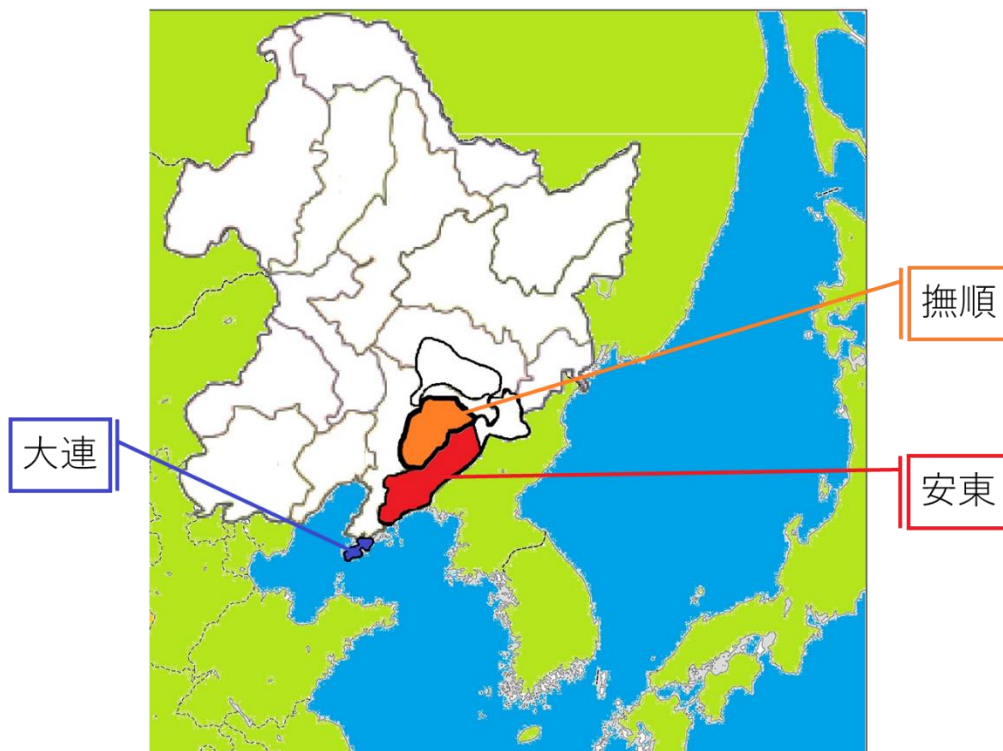


図 4-2：旧満洲国地図 安東・撫順・大連

4.1.3. 同行調査

筆者は 2017 年 6 月 1 日から 6 日にかけて、旧満洲国で生活経験のある者たちとともに旧満洲国を訪れた。同行調査とはその際に行なった調査である。

4.1.3.1. 調査方法

旧満洲国を訪れたのは筆者を含め 6 名である。そのうちの 3 名が引揚者、1 名が同伴者、1 名が今回同行した引揚者の知人である。

訪れた先は、大連、丹東（旧安東）、瀋陽（旧撫順）である。その際に、「この場所はどうな思い出があるか」や「ここに来たときは何をしに来たんですか」などを聞きながらの調査であった。

4.1.3.2. 対象のインフォーマント

A3 は安東生まれの女性である。同行調査が引揚げ以来の旧満洲国であった。しかし、

彼女の記憶の安東とは様変わりしていたようで、少し物憂げであった。それでも今でも残っている、朝鮮まで歩いて渡った橋を前にすると当時を思い出しているような様子うかがえた。

X1 は新京（長春）生まれの男性である。引揚げ後には複数回にわたって旧満洲国を訪れている。同行調査の際にも大連、丹東（旧安東）、瀋陽（旧撫順）に何度も来ており、そこにある建物や店の変化にも気づくほどだった。

同行調査時に中国語使用が若干見られたが、旧満洲国にいた当時のことを思い出して「俺その時、多少は中国語話せたと思うよ、中国人の友達いたから」と言っているように、今はなしているのは引揚げ後に覚えたものということがわかる。

X2 は終戦当時、小学校にも入学していなかった。そのため、旧満洲国の思い出は少なそうであった。しかし、終戦後の引揚げという壮絶な体験は克明に覚えているようであった。

図 4-3 は同行調査に協力してくれた者たちの出身地を示す地図である。

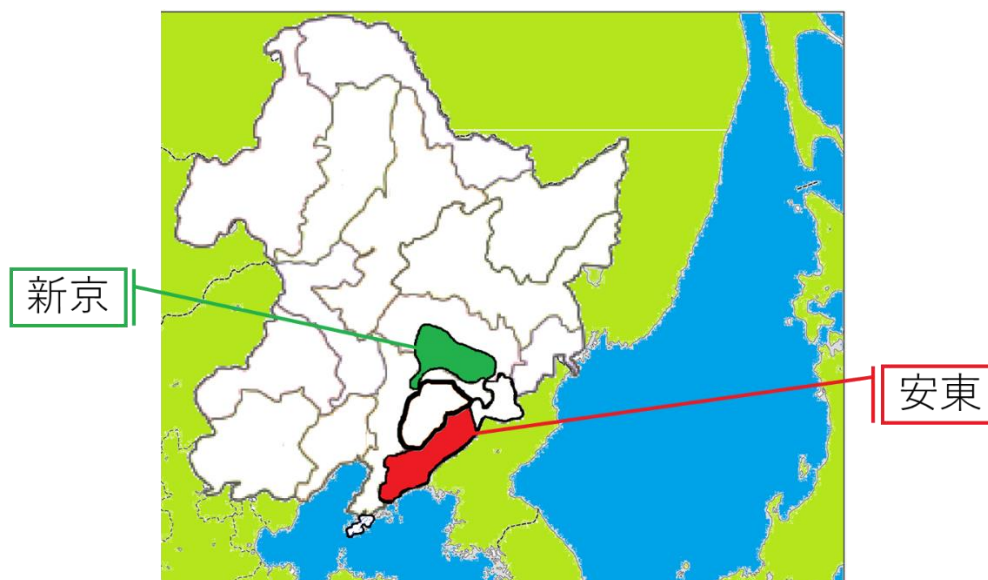


図 4-3：旧満洲国地図 安東・新京

4.1.4. 引揚者たちの文献調査

旧満洲国の安東にゆかりを持つ者たち、例えば、安東で生まれ育った者、内地に生ま

れたが戦時中に安東へ移住した者、引揚げの際に安東を経由した者などが在籍している「安東会」という引揚者たちの会がある。その安東会が定期的に作成している会報『ありなれ』を本研究では調査対象とする。『ありなれ』は会報という性質上、街中の本屋に並ばせるような一般的な書籍ではなく、主には会員たちにより会員向けに作られるものである。そのため、入手が難しく筆者が所有しているものは、2017年12月現在で第61号まで発行されているうちの、11号分のみである（41号、45号、47号、48号、49号、51号、55号、56号、58号、60号、61号）。またその入手経緯としては、現安東会副会長である甲賀和彦氏より提供していただいたものがすべてである。このような貴重な資料を提供くださった甲賀和彦氏に心より御礼申し上げたい。

『ありなれ』とは朝鮮語で、鴨緑江という意味であり、年に1回発行されている。甲賀和彦氏によれば、毎年8月か9月に編集委員から安東会の会員に原稿の募集がかけられ、会員たちもしくはその家族などが執筆しているという。また、一冊の目安として、A5判の原稿で、およそ90ページを目安に作られると教えていただいた。内容としては「戦時下の生活」、「引揚げの様子」、「安東の思い出」、「戦後数十年経過した安東（現丹東市）の訪問記録」などが書かれている。表紙・裏表紙ともに全号異なるが、当時の安東の絵、安東であった場所の現在の風景写真や絵などが飾っており、いずれにしても安東を思い起こさせるものになっている。図4-4、図4-5は2016年11月に発行された60号の表紙と裏表紙である。最新号の61号（2017年11月刊行）は2016年に行なわれた第60回安東会大会の参加者の写真が表紙と裏表紙に使われていたため、ここでの提示は控える。

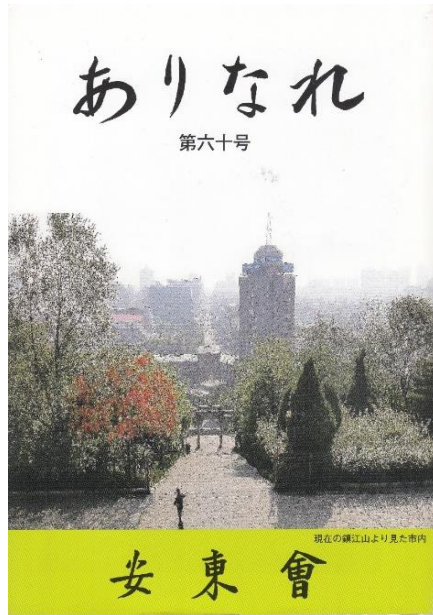


図 4-4 :『ありなれ』第 60 号の表紙

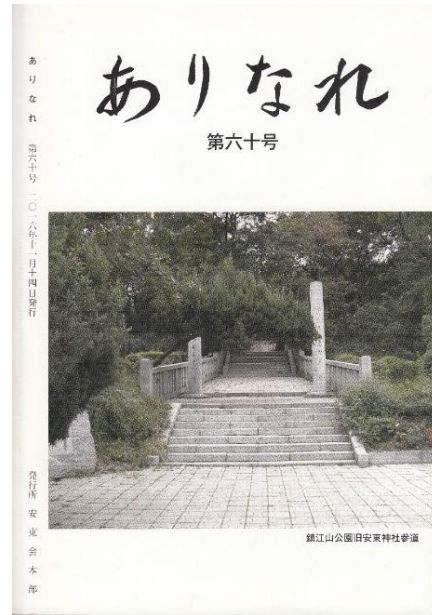


図 4-5 :『ありなれ』第 60 号の裏表紙

『ありなれ』については、松重(2013)によって総目次（第 1～56 号）がまとめられている。また、この『ありなれ』について彼は次のように評価している。

『ありなれ』の特徴を、歴史学研究という領域を特に意識しつつ、次の 2 点にしばって略述し、本総目録の「鏡」としておきたい。

第 1 点は、『ありなれ』の戦前・戦中から敗戦に至る「安東」（現中華人民共和国遼寧省丹東市）に関する歴史資料としての位置付けについてである。『ありなれ』には、現地で生活していた方々の記憶を綴った作品、地図や写真、安東在住時の所在地や職業が記された名簿などの、様々な情報が満載されている。これらの情報には、単に公的な記録や刊行物が示す事実を補填することにとどまらない、それらの記録や刊行物では等閑視されがちな当該期日本人の生活実態を浮かびあがらせる上で必要となる情報が包含されている。このことは、『ありなれ』が現地の歴史像を再構成していく上で貴重な歴史資料の宝庫であるという特徴を端的に示すものとなっていると言えよう。

（松重 2013, pp79）

彼は歴史学者としての立場から、『ありなれ』が現地の歴史像を再構成していく上で

貴重な歴史資料の宝庫である」と述べているが、それは社会言語学の世界においても宝庫であるといえよう。ただし、会報を社会言語学的に分析するにあたって、長所と短所があることを知っておく必要がある。

まず、長所としては、多くの人が書いているということが挙げられるだろう。聞き取り調査を多くの人に協力してもらうには、時間や精神的な負担がかかるという問題があるが、会報は自身の記憶をその時々で思うままに書いている。そのため、時間的な制約にとらわれず、書きたいことを書けるので精神的負担もない。そのうえで、大勢が書いているという点が最大の長所だろう。また、今だから書けることをその時に書いているという点でも大きな意味を持つ。例えば帰国後すぐでは、思い出したくもない引揚げの記憶でも時間が経ってからなら書ける人もいただろうし、当時はわからなかったが周りからの話を聞いてわかったこともあっただろう。戦後から 20 年経ってからの記憶と 70 年経ってからの記憶では同じ出来事でも同じ見方をしないはずで、同じ引揚げに向き合うにしても、書かれる内容が異なる可能性がある。それを毎年掲載しているという点で、『ありなれ』の資料的価値は非常に高くなっている。

そして、会報は一つの集団によって書かれているため、地理的もしくは職業的にその周辺に特化して知見を深められる。今回の場合は、安東会という括りであるため、安東の事例がよくわかる。他の会報でも、満鉄会が刊行している『満鉄会会報』、大連会の『大連会会報』などがあり、これらによって満鉄関係者の職についての記憶、大連関係者の地理的環境に関する記憶を読み解くことができる。

一方、会報の最も大きな短所として、執筆者がどのような人なのかかわからないということが挙げられる。聞き取り調査であれば、経歴、居住歴、年齢などその時に聞くことができるが、会報にはほとんどの場合そこまで書かれていない。

そして、今回の場合では特に気を付けなければならなかったのは、『ありなれ』は安東出身者以外も書いていることがあるということである。前述したように安東会の会員は、安東で生まれ育った者、内地に生まれたが戦時中に安東へ移住した者、引揚げの際に安東を経由した者などである。そのため、引揚げの際に安東を経由した者が書いている場合はほとんど安東で生活したことがない者の記事となる。それも『ありなれ』に掲載されていることがある。当然、その記事を「安東」の事例とすることはできない。『ありなれ』の場合は特にこのことを念頭に置いておく必要がある。

4.1.5. NHK アーカイブス

NHK アーカイブスは、研究者に向けて NHK アーカイブスを学術的に利用するプロジェクトである(<http://www.nhk.or.jp/archives/academic/index.html#01>)。閲覧できるコンテンツは、テレビ草創期から最近のものまで、原則として NHK が過去に放送した様々なジャンルのあらゆるテレビ・ラジオ番組、約 65 万本である（ニュースは除く）。これだけ多くのコンテンツが保存されているが、閲覧するためには NHK アーカイブスを利用した分析を行なう研究かどうかの審査があり、いつでもだれでも閲覧できるわけではない。修士論文執筆のために申請し、採択され閲覧・研究の権利が与えられている。

実際に閲覧したのは旧満洲国に関するドキュメンタリー番組を中心に閲覧していった。実際に閲覧したものは以下の通りである（表 4-2）。

表 4-2：本研究で閲覧した NHK アーカイブス

| 番号 | 放送日 | タイトル |
|----|------------|--|
| 1 | 1965/04/09 | 現代の映像 埋もれた戦後 |
| 2 | 1965/04/11 | ある人生 荒地の記憶 ～元満洲開拓員の記録～ |
| 3 | 1969/11/05 | ある人生 再出発 ～27 年ぶりに帰国した元満蒙開拓民～ |
| 4 | 1970/11/21 | ある人 二つの大地 |
| 5 | 1972/08/15 | 70 年代われらの世界 平和への道標 ～1930 年代の世界～ |
| 6 | 1982/01/13 | 明るい農村 レポート ‘82 「“黒ぼく” の歳月」 —35 年目の香取開拓— 鳥取県大山町 |
| 7 | 1982/09/17 | NHK 特集 農民兵士の声がきこえる ～7 0 0 0 通の軍事郵便から～ |
| 8 | 1984/03/01 | おはよう広場 39 年目の肉親たち 旧満州開拓団の逃避行 |

| 番号 | 放送日 | タイトル |
|----|------------|---|
| 9 | 1987/08/07 | 戦争を知っていますか 子どもたちへのメッセージ 最終列車は燃えた 満州・逃避行の果てに |
| 10 | 1989/09/03 | NHK スペシャル 忘れられた女たち・中国残留婦人の昭和 |
| 11 | 1996/02/28 | 列島リレードキュメント 母たちのまんしゅう地蔵 |
| 12 | 1996/11/11 | 歴史たんけん 「開拓団」の道 |
| 13 | 2000/01/15 | 世界・わが心の旅 中国・ありがとう屋根裏の日々 旅人 漫画家 ちばてつや |
| 14 | 2001/11/21 | その時 歴史が動いた 満州事変・関東軍独走す |
| 15 | 2005/08/13 | 大地の子になった日本人 |
| 16 | 2005/08/19 | 視点・論点 戦後 60 年 「満洲国」と日本人戦争孤児 写真家・江成常夫 |
| 17 | 2006/12/23 | BS フォーラム 「私にとっての満洲～いま語り継ぐこと～」 |
| 18 | 2009/11/08 | 最後の帰郷 ～旧満州開拓団 姉妹の 69 年～ |
| 19 | 2010/04/24 | シリーズ証言記録 兵士たちの戦争 王道楽土を信じた少年たち ～満蒙開拓青少年義勇軍～ |
| 20 | 2015/01/08 | 太平洋戦争 70 年 なぜ戦争へと向かったのか 満洲国成立と世界からの孤立 |

分析は、番組内に引揚者、帰国者、残留孤児が映し出され、映し出された彼らの発言を基に、分析を行なっている。彼らの発言を取り出す際に、便宜的に NHK1 や NHK2 と番号を振っている。この番号は、取り上げた順番以外の意味を持たない。また、中国語で答えている場合には、字幕を書き取っている。

4.2. フレーミングとフットィングによる分析

本研究では分析方法として、フレーム理論を用いた。この分析方法は水島(2009)によれば「人間の言語活動の諸相を説明づけるために、認知心理学、社会学、文化人類学等の幅広い分野で使用されてきた」ものである。多分野での使用に伴い、この概念に関連する用語が各分野でさまざま用いられている。例えば、水島が取り上げている認知心理学的アプローチでは、「シナリオ」、「スクリプト」が用いられると述べている。また社会学的アプローチにおいて、フレームとは『『今、この状況下で、自分たちが何を行っているか』を特定する際の、参加者の認識の枠組みであり、「フレーミングを可能にする言外のメッセージを『メタ・メッセージ』と称』すると述べている。本研究では、Goffman(1974; 1981)の社会学的アプローチをさらに緻密な分析を行なった、「フレーミング」と「フットィング」という概念を用いることにした。Goffman のフレームとは、ある状況の中で起こっていることを意識した時点からフレーミングが始まり、過去の経験を踏まえたうえでそれをカテゴライズ、そうしてひとつの経験としてまとめ上げたものをいう。このフレームは目まぐるしく変化するものであり、それに合わせてコミュニケーションの当事者の相対的な位置取りも変化すると考え、その足取りが「フットィング」である(水島 2009)。以上を踏まえ、ある話題(フレーム)に対して、話者がどのような立場から話しているか(フットィング)を分析し、インフォーマントの言語意識とアイデンティティを明らかにすることを試みる。

まとめると以下のようになる。

本研究で指すフレーミングとは、出来事について話をするとき、その出来事に対してどのように話者は捉えているかということ。

本研究で指すフットィングとは、自分自身がどういう人間として、どういう立場として語っているかということ。

5. 言語環境の予備調査

5.1. はじめに

旧満洲国で使用された接触言語「協和語」の言語環境に育った者に、前述した文字資料を基に聞き取り調査を行ない、日本語の普及について確認するとともに、旧満洲国の言語意識や言語使用に関するオーラルヒストリーを記録としてまとめることを目的とする。

まずは、当時の言語環境の一端を探るために文字資料の量的分析を行ない、接触言語としての立ち位置を明らかにする。また、「協和語」とみられるその文字資料を旧満洲国在住者に文ごとに提示し、含まれている日本語および中国語の表現について以下の3点に焦点を当て分析考察を進め、当時の言語接触の実態を把握する方法をとった。

- ① 当時、文字資料のような言葉を使っていたかどうか
- ② 当時、文字資料のような言葉を聞いていたかどうか
- ③ その表現はどのようなイメージを伴っているか

5.2. 文字資料の量的分析

張(2012)が取り上げた文字資料はその発話部分の特徴を分析したのみにとどまり、量的な分析までは及んでいない。また、後述する「混合型」とは具体的に何を指しているかを考えるため、資料に出てくる文の日本語と中国語の割合を探っていく。

今回確認した資料は漫画風の軍事郵便絵葉書 106 枚で、旧満洲国における日本人と現地の人々との接触を描いたものである。その中には日本人のみが描かれていることもあれば、現地人のみが描かれているものもある。発話者全体をみると 2/3 が日本人であるが、日本人も中国語のみを使用する箇所があり、発話者による形態素の極端な偏りはみられなかった。

それでは旧満洲国では、どのような言語が使用されていたか提示していこう。絵葉書の台詞にある文は、日本語が 194 文、中国語 37 文、日本語と中国語が同一文内で混在している「混合型」が 49 文にのぼる。ここで先に、資料 5-1 を用いて、何が日本語文か、何が中国語文、「混合型」かを明確にしておく。

資料 5-1 : 「洋車」



| 番号 | 発話者 | 吹き出しの発話 | 言語 |
|-----|-------|-------------------------------|------|
| (1) | 現地人 | タイジンナルチュイ (お客さん何処まで行くんですか) | 中国語文 |
| (2) | 日本兵 1 | クワイクワイデー (早くはやく) 走つてくれ後に負けるなよ | 混合型 |
| (3) | 日本兵 2 | 愉快々々 | 日本語文 |
| (4) | 日本兵 3 | 前を追越せばリイランモチエン (二十銭) 奮發するぞ | 混合型 |
| (5) | 日本兵 4 | あまり気ばるなよチアーオ (足) が痛いよ | 混合型 |

(3)が日本語文, (1)が中国語文, (2)(4)(5)が混合型の文として扱っている。吹き出しの発話内の () は日本語訳が書かれている。これは実際に発話されていないとみなし, 今回は量的分析の対象外として扱っていない。

日本語が 194 文, 中国語 37 文, 「混合型」が 49 文であったが, この文をさらに細か

く見るために、一文を節に区切った。これらの文内における節の数は、日本語のみで構成されているのが 312 節、中国語のみで構成されているのが 44 節、混合型で構成されているものが 51 節であった。以上は表 5-1 のようにまとめられる。

表 5-1：絵葉書の台詞における文と節の出現数

| 絵葉書 106 枚中 | 日本語 | 中国語 | 混合型 | 合計 |
|------------|-----------|----------|----------|-----|
| 文数 | 194(69.3) | 37(13.2) | 49(17.5) | 280 |
| 節数 | 312(76.7) | 44(10.8) | 51(12.5) | 407 |

日本人だけでなく中国人による発言があるにもかかわらず、日本語のみで書かれたものが圧倒的に多いということは注目できよう。また、日本語のみによる文・節に次いで、中国語のみで書かれたものが来るのではなく、「混合型」が 2 番目に多いというのも特筆すべきである。これが意味することは、もし我々が文字資料の中の旧満洲国の世界へ行くことができたとするならば、日本語による会話を最も多く耳にし、次いで日本語と中国語が混ざったもの、中国語のみによるものを聞く機会があるということである。裏を返せば、中国語が分からなければ、話の約 2～3 割は意味が分からないということにもなる。これが文字資料の旧満洲国の言語環境である。

文字資料の量的分析から言語環境の一端は見えてきた。この中で、最も特異な形式、「混合型」についてさらに詳しく分析を行ないたい。そのために、さらに細かく、形態素に分けた。混合型の文に含まれる形態素を言語別に見ると、日本語は 72.8%に当たる 268 形態素で、中国語は 27.2%の 100 形態素であった（表 5-2、図 5-1 参照）。

表 5-2：混合型 51 節における日中形態素の出現数

| | 日本語 | 中国語 |
|------|-----------|-----------|
| 形態素数 | 268(72.8) | 100(27.2) |

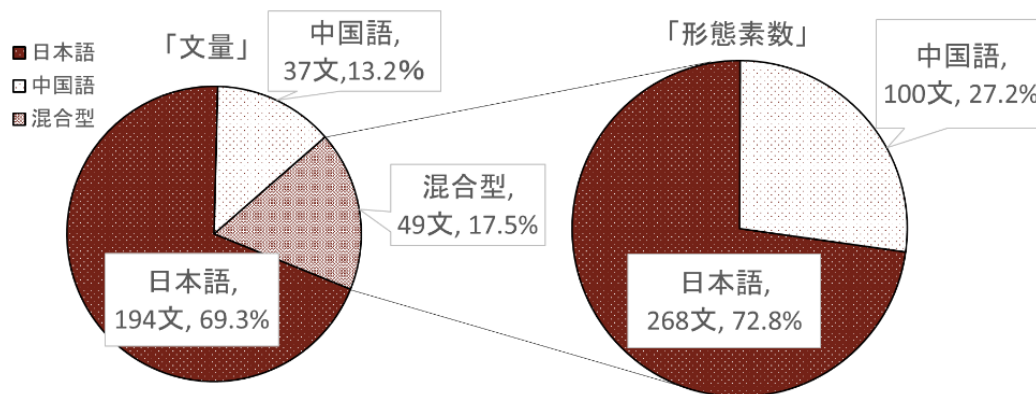


図 5-1：文字資料にみられる文量と形態素数の割合

やはりこの結果から見ても、文字資料の中の旧満洲国という場所では中国語の割合が少なく、日本語の割合がかなり多く占めていることが分かった。言語環境としては日本語が優勢であったということが明らかとなった。

5.3. 接触言語としての「協和語」はどう分類するか？

これまで旧満洲国で用いられた言語に関する研究は数が限られているが、その接触言語には複数の名称が使われている。ここで名称を整理しながら、実態に関する分類を再考察したい。まず桜井(2015)は「ピジン中国語」以外に、「協和語」や「兵隊支那語」などの名称がついた接触言語について分析している。名称には他にも「沿線漢語」や「沿線支那語」という名称もある（中島 2016）。一方、絵葉書から探った張(2012)は「語彙レベルの借用、日本語語順の中国語、日本語助詞の過剰省略、日本語文と中国語文の混合使用など、言語接触は様々なレベルで発生している」とし、これが「絵葉書に見られる言語接触の様々な側面はおそらく、これまでに先行研究に登場した『協和語』という現象であると思われる」と述べ、「協和語」という名称で接触言語を分析している。しかし、張(2012)では、文字資料としての絵葉書の分析はこのような言及にとどまり、接触言語としての分類は試みていない。

本節では「協和語」と「ピジン」、「混合言語」、「クレオール」との関連性を検討する。まず、「クレオール」とは母語化が第一条件になっているが、「協和語」は明らかに使用者にとって母語ではなかったため、これに当たらないことが分かる。さて、「ピジン」と「混合言語」はどうだろうか。

5.3.1. 「協和語」は「ピジン」か？

桜井(2015)は「協和語」を「ピジン中国語」として分類しているが、果たしてこれでいいだろうか。文法面と語彙面に分けてそれぞれを考察していく。

まずは文法面から見ていこう。「協和語」の中には、確かに両言語の中にピジン化された（非文に当たる文法的に単純化された）要素もみられる。例えば、張(2012)で指摘された「デーの拡大使用」がそれにあたる。「ニデー [你的] どこへ行くんだ」という発話があるが、本来所有格である「ニデー」が主格として使用されているので、中国語として文法的に合っていない（非文）のである。日本語の部分にも「二十銭安いあるか」のようなピジンの要素が含まれている。資料全体ではこうしたピジンの中国語の要素は7節で、ピジンの日本語の要素は69節にものぼる。文法面をみると、「ピジン」の特徴である文法の単純化が起きており、「協和語」は「ピジン」の側面を持っているといえる。

次に語彙面をみていく。典型的な「ピジン」の場合、語彙の8割以上は同一の（上層）言語に由来する(Sebba 1997:25)と言われている。では「協和語」はどうだろうか。前節で「協和語」を語彙よりも詳細な単位、形態素で集計を行なった。その結果、日本語が72.8%に当たる268形態素で、中国語が27.2%の100形態素であった。つまり典型的な「ピジン」の定義である8割という条件を満たしていない。したがって語彙面では、「ピジン」の特徴には当てはまらない。

5.3.2. 「協和語」は「混合言語」か？

Trudgill(2002)や Bakker(1994)は「混合言語」を二つの起点言語をもつものとして定義づけている。さらに、混合言語は文法が単純化されずに用いられる(ロング 2012)。これはまさに語彙面のことを言っている。例えば、ロング・甲賀(2017)では小笠原混合言語を分析しており、これは98発話からなる談話を分析した結果、1750語のうち、50.6%にあたる885語は日本語、49.4%にあたる860語は英語であるとしている。つまり、混合言語の語彙は二つの起点言語でほぼ同じ割合でみられるのである。一方、「協和語」は前述したように文法が単純化され、語彙はおおよそ7対3と同じ割合ではない。このこ

とから「協和語」は「混合言語」とは言えない。

5.3.3. 「協和語」の分類

以上のことに鑑みて、「協和語」は文法面では「ピジン」の特徴を持ちながらも語彙面では「ピジン」とは言い切れず、また「混合言語」の特徴は持っていないが二つの起点言語を持つ点では類似している。つまり、「協和語」は両者の中間的な位置づけであると考えられる（表 5-3）。

表 5-3：協和語の分類

| 分類 特徴 | ピジン | 混合言語 | 協和語 |
|----------|-------------------------|---------------------|-----------|
| 文法の単純化 | ○ | × | ○ |
| 起点言語の数 | 3 言語以上 | 2 言語 | 2 言語 |
| 起点言語の割合 | 8 割以上は同一の (上層) 言語に由来 | 2 つの起点言語で ほぼ同じ割合 | およそ 7 対 3 |

5.4. 聞き取り調査を通じた文字資料の質的分析

これまでは、文字資料の量的分析を通じて言語環境を探ってきた。ここからは文字資料を用いた聞き取り調査を通じて、言語使用や言語意識を明らかにしていく。

5.4.1. 文字資料に対するインフォーマントのコメント

文字資料を読んだインフォーマント(A2)は一語一語を丁寧に確認し、イメージや当時の使用の様子を教えてくれた。その確認の際にコメントしたことを、資料ごとに取り上げていく。

まず、日本兵が食事をしている風景が描かれている資料 5-2「食事」を取り上げる。ここで A2 がコメントしてくれたのは日本兵による「今日の飯はとてもハーオチー（美

味い)」である。

資料 5-2 : 「食事」



| | |
|-------|------------------------|
| 日本兵 1 | ウオーチーデータイドーラ (俺は喰ひすぎた) |
| 日本兵 2 | 今日の飯はとてもハーオチー (美味い) |

A2 は「ハーオチー (A2 は「ハオチー」と言っていたと文字で書いて教えてくれた)」を「おいしい」という意味で使用したという。さらにこれに関連して、「とてもおいしい」という強調表現を用いるときには「ヘンハオチー」と言っていたという。当時を思い出して、それぞれ声調をつけて発音することができ、文字にした場合「ヘン」には「変」という漢字を使っていたと紙に書いて教えてくれた。ただしこの「変」という漢字自体は非文あるいは誤用にあたり、正しくは「很」である。

インフォーマントは現地人の出前の人に対して、「ヘンハオチーラ。シェイシェイ。(とてもおいしかったよ。ありがとう。)」という表現も使ったことがあると教えてくれた。しかしこの「ハオチーラ」もまた、中国語では用いることができない非文である。A2 は学校で北京官話を学習していた。しかしそれでも、非文にあたる表現を使用していたのである。先行研究では文献調査によるものが多かったが、これは、旧満洲国における言語使用の貴重な証言である。

次に資料 5-3「靴直シ」について言及してもらった部分を取り上げる。資料 5-3「靴直シ」は日本兵 3 人，現地人 1 人が描かれており，日本兵が現地人に靴を直してもらっている様子が描かれている。A2 は現地人の発話「トントンデーシイエシイエ（解りました有難度う）」という部分についてコメントしてくれた。

資料 5-3：「靴直シ」



| | |
|-------|---------------------------|
| 日本兵 1 | 名誉の負傷だウーチエヌ（五銭）にまけとけハハ・・・ |
| 現地人 | トントンデーシイエシイエ（解りました有難度う） |
| 日本兵 2 | ニデー（お前）のはもう修繕したのか |
| 日本兵 3 | オデー（自分）のはもうお先にワンラー（完了）だよ |

A2 は「トントンデーシイエシイエ」は「トントン」が「本当に」，「デー」が日本語の「で」，「シイエシイエ」が「ありがとう」というように当該表現のことを考えていた。インフォーマントによれば現地人は「デー」を使い日本語のような話し方にしようとしていたと教えてくれた。つまり，「デー」は助詞「で」のような役割であったと話す。しかし「トントンデーシイエシイエ」は，3 人の中国語母語話者によれば，決して日本

語の要素は入っておらず、このままで正文であると判定された。

このように、日本人は「デー」と「で」という似た音声について知覚するときに、日本語として聞き取っている者もいたことが明らかとなった。張(2012)では「デーの拡大使用」を指摘しているが、言語意識の観点からみると、拡大使用にとどまらない「デー」の新たな側面があったことが明らかとなった。

次に資料 5-4「牛の買い入れ」を取り上げる。資料 5-4 では日本兵と現地人が牛の売買をしている様子が描かれている。A2 は現地人の「カンカンよろしいあるか」という発話に対してコメントをしている。

資料 5-4 : 「牛の買い入れ」



| | |
|-------|-----------------------------|
| 日本兵 1 | 牛四頭だな、豚はないか |
| 日本兵 2 | 豚隠してある支那軍へ売る金胡魔化す豚あること知らせない |
| 日本兵 3 | 一緒に買ってしまふ出してくれ |
| 現地人 | カンカンよろしいあるか |

こうした「カンカンよろしいあるか」のようなことばは、戦時中、中国人が物を売り歩くときに日本人客相手に使用していたという。しかし、終戦後には日本人の立場が逆転し、日本人でも布団など家財道具を売り歩かなければいけなくなった。そうしたときに、逆に日本人が「カンカンよろしいあるか」のような言葉を使用しなければならなかったという。

ここで見られる「よろしい」は敬語として使用しているという意識を持っていた。戦時中の中国人は日本人から見たときに、地位が下であった。したがって、彼らは「よろしい」のような敬語表現を日本人相手に使用しなければならない状況であった。しかし終戦後には、日本人の地位が下になり「カンカンよろしいあるか」のようなことばを中国人相手に使用しなければならなくなったのである。

このように、戦時中は「カンカンよろしいあるか」のような言葉を中国人が使用し、戦争が終わり日本人の地位が逆転すると、日本人がこうした言葉を使わなければならなくなったという立場の逆転に伴う言語使用の変化があったことが明らかとなった。

次に資料 5-5「外出」を見ていく。この資料 5-5 は日本兵が外出する様子が描かれている。ここでは日本兵同士による会話を見ることができる。A2 がここで言及しているのは、その日本兵が用いている一人称、二人称名詞である「オデー（自分）」や「ニデー（お前）」についてである。

資料 5-5 : 「外出」



| | |
|-------|-------------------------------|
| 日本兵 1 | ニデー (お前) どこへ行くんだ・・・ |
| 日本兵 2 | オデー (自分) 活動でも (観る) かんかんしようと思ふ |
| 日本兵 3 | シンクシンクなァ (御苦労御苦労)・・・ |
| 日本兵 4 | よしッ!! |

日本兵が用いている一人称、二人称名詞である「オデー (自分)」や「ニデー (お前)」は「間違っていることば」だとはっきり批判して、使っていなかったと答えた。また「自分」を意味する「オデー」も (主格で用いるときは)「間違っていることば」で「我 (ウオー)」が正しい形と修正することさえもしていた。事実、標準中国語ではこのように「デー」が付いた形を主語として使うのは誤用 (非文) になるのでインフォーマントの指摘が正しい。また、インフォーマントは、どちらの用法も、民族を問わず聞いたことがないという。多数の文献 (張 2012, 桜井 2015 など) にはこうした用法がチマタで使われていたことが指摘されているが、学校で北京官話を学習していた A2 のような話者はそれを認めないし、当時聞いていた記憶は特にないということが今回の調査で分かつ

た。

なぜこのような多数の文献と相反する結果となったかは、後章で考察していきたい。

5.4.2. 文字資料の言葉とは異なる言語教育（要検討）

以下、事例 5-1～5-3 で確認できるように、「満洲語」ではなく「北京官話」を学んでいたこと、さらには現在まで使用できるレベルまで教育されたことが分かった。ここで A2 が指摘している「満洲語」とは言語接触によって、話されるようになったチマタの口語である。なぜ学校で北京官話が選ばれて教育されたか回答が得られた。そこから見えてきたものは言語教育に対する A2 の意識である。

事例 5-1：中学の学校教育禁止された「満洲語」

| | |
|----|---|
| A2 | 俺なんか中学校の時に、北京官話って言ってね、いわゆる中国語って言ったってさ、満洲語ではだめだからってな、中国の本場の中国語を教えるってね、向こうの中国の人から 2 年間教わったんだよ |
|----|---|

当時の学校教育では、チマタで話されていた「満洲語」は「だめなもの」として見られていた。そのため、本場の中国語を学ばせるために、学校では中国語を母語とする先生が「本場の中国語」を教えてくれていたという意識があることが分かった。

事例 5-2 はなぜ、言語教育に北京官話が採用されたかについて、どのような考えを持っているかを聞くことができた事例である。

事例 5-2：なぜ学校で北京官話が教育されたか

（筆者が、学校で北京官話が教えられた理由について尋ねた。）

| | |
|----|---|
| A2 | 満洲はさ北京中心だったからさ、言葉の中心が北京だと思ってるから。生活だってだいたい北京が満洲を支配してたんだから、生活全般を。言葉もそうでしょ。北京官話が満洲を、満洲国ができる前までは全部北京語だもん中心は |
|----|---|

事例 5-1 では、「満洲語」をだめなものという話を聞くことができたが、事例 5-2 で

は、言葉だけにととどまらず生活まで北京が中心であったことを話してくれた。その中心であった彼が北京語とも表現する北京官話を学習するのは当然の流れだったと考えているのだろう。

事例 5-3 は、言語教育を通じた言語意識が明らかとなった事例である。

事例 5-3：現在まで使用できる上級レベルの北京官話教育

| | |
|----|---|
| A2 | もともと中国語は漢文から始まったんだから、漢語だよな？満洲ができてから、北京が一番いいだろうって言って、北京官話っていうのを旧製の安東中学の場合、中国の人が教えに来てた、だから、本場だよ、中学1年から2年、北京官話の向こうの中国の先生が来て教わった、それがいまは通用しないからな、字が変わっちゃったろう |
| R | 当時の言葉が分かる人に会えればね |
| A2 | そうだよ、安東会でもみんな北京官話でしゃべってるよ、お互いに、今の中国語知らないから |

安東会（旧満洲国安東にゆかりのある者たちの同窓会）に出席している者たちは、当時チマタで使われていた言葉ではなく、学校で習った「北京官話」を懐かしんで使用しているということを聞くことができた。たとえば、現在の学校教育のカリキュラムでは英語教育があるが、日本で「普通」の学校教育で育った者たちが、同窓会で再会する地元の旧友たちと、そもそもの能力の問題や英語への親しみがないなどの理由で、わざわざ英語を用いて会話をすることはないだろう。このことから考えると、現在まで使用できるということはかなり高いレベルで教育されていたことが分かる。A2 が引揚げ後にも旧満洲国への関心があり、中国語学習を継続していることも考えられるが、「今の中国語知らない」と発言していることから中国語学習を継続していなかったこともうかがえる。したがって、A2 は、当時の北京官話を現在までも使用できるほど高いレベルで教育を受けていたのである。

このように言語教育によって育まれた言語意識が明らかとなった。

5.5. 聞き取り調査から見てきた接触言語への意識

A2 の言語意識にも興味深い点が見られる。資料の「協和語」に含まれているピジン的な日本語は当時、中国人を馬鹿にするものとして認識されていた。すなわち、当時の旧満洲国は五族協和を謳っていたものの、「協和語」の使用によって差別が行なわれていたという。資料 5-6 では日本人同士が使っているが、「マンマンデープーシンだぞ（ゆっくり的だめだぞ）」の文を取り上げてどのような言語意識をもっているかを教えてくれた。

資料 5-6 : 「内務班掃除」

| | |
|-------|---------------------------|
| 日本兵 1 | マンマンデープーシンだぞ（ゆっくりやっちはいかん） |
| 日本兵 2 | はツ・・・・・クワイクワイデー（早く）やります |

「マンマンデープーシンだぞ」は、「ちゃんとした中国語が話せないくせに」、文末詞「だぞ」を用いることによって中国人を見下していたという印象を持っていると話してくれた。ここでのコメントはあくまで上の立場であった日本人が下の立場である中国人に向かって使ったことに対してだが、この資料 5-6 を見ても明らかに上の立場の日本兵が下の立場の日本兵に対して使っていることが分かる。ここから連想され、日本人、中国人の話で具体的に話してくれている。つまり、日本人同士であろうが、日本人と中国人であろうが関係がなく、目上から目下に使われていたのである。こうした目下の人に対して使う言葉は民族という枠組みだけで適用されるのではなく、むしろ「日本兵（上官＞部下）＞日本人住民＞中国人」のような社会的な階級に準じて使用されていたことが明らかとなった。ただし、これは戦時中の話である。この社会的な階級は敗戦後には逆転する。アジア大陸に取り残された日本人は立場が最も低くなり、家財道具などを売り歩かなければならなかった。そして皮肉にも、今まで使用していたようなピジン的な中国語を使わなければならなくなったという。このことからわかることは、「協和語」には立場が上の者が使えば見下すことになり、立場が下の者が使えば、へりくだった印象を与えることができるものとして使用されていたのである。こう言いかえることもできるだろう。目上の者の意識は「見下し」、下の者の意識は立場が上の人に対する「歩み寄り」である。このような、A2 の接触言語に対する言語意識が明らかとなった。

5.6. 本章のまとめ

これまで文字資料のみによって行なわれてきた「協和語」の研究に加えて、本章では生きた証言者の体験談や具体的表現の使用意識を分析し、日本語の言語接触史の新たな資料を提示することができた。

本章で分かったことをまとめると以下の通りである。

(1)協和語の分類

- ①文字資料における接触言語について量的分析を行なった結果、日本語の割合が大きいことが分かった
- ②「協和語」は「ピジン」と「混合言語」の両方の特徴を持ち合わせながら、相違点もあり、両者の中間的位置づけである

(2)言語使用

- ①当時使われていた口語は「満洲語」と呼ばれることがあった
- ②学校教育ではチマタの口語の「満洲語」ではなく、標準語（本場）の「北京官話」を学習させていたと考える人もいた
- ③当時の学校で教えられた北京官話は、現在まで用いることができるほど、レベルの高いものであった
- ④文献調査からしかピジンのような中国語が収集されてこなかったが、聞き取り調査によって新たな使用例（ヘン（変）ハオチーラ）を提示することができた

(3)言語意識

- ①戦時中と終戦後では日本人の地位の変化があり、日本人が協和語を使用する意味・目的も変わった
- ②張（2012）で「デーの拡大使用」を指摘しているが、拡大使用にとどまらない言語意識に関する新たな側面があった
- ④「協和語」は、立場が上の者が使えば見下すことになり、立場が下の者が使えば、へりくだった印象を与えることができるものとして使用されていた

本章では軍事郵便絵葉書という文字資料を用いて、当時の様子をインフォーマントに尋ねていった。こうした文字資料によるオーラルヒストリーの聞き取り調査は記憶をたどる手段として有効であり、次章からの半構造化インタビューに向けた基盤として大きな役割を果たす結果となった。

第二部 各論

6. 言語ドメイン

第5章では、いわば架空の世界である文字資料の中の旧満洲国を見てきた。本章以降では、その文字資料を手掛かりにし、聞き取り調査や会報の分析、NHK アーカイブスによる生の証言を通じて、実在した世界の旧満洲国の分析を進めていく。

6.1. 市場

事例 6-1 は買い出しに行った出かけた A1 が、周りで聞いていた言語について言及した部分である。ここでは、日本人に対しては、民族を問わず日本語が話されていたことが分かる。

事例 6-1：民族を問わない日本語の使用

| | |
|----|---|
| R | 買い出しに行った（先で）、満人の人が、たとえば韓国の人とかもいたみたいですけど |
| A1 | 韓国もいましたけどね |
| R | そういう方々も、日本語ですか？ |
| A1 | そうです、そうです、日本人に対しては全部日本語 |
| R | 日本人ってわかるんですか見たら |
| A1 | わかるんですよ、すぐわかります |
| R | 服装とか？顔？ |
| A1 | 服装なんかは全部変わらないですけど、お話が日本語でやりますからもうすぐにね、支那語使いません、日本語で全部 |
| R | 日本語で |
| A1 | それだけね結局あの日本人がその時代は日本人がレベルはちょっと上で、満人のほうがみんな下仕事は全部してたんですよ、道路掃除とかね |

※（ ）内は、内容を分かりやすくするために筆者が挿入したもの。

A2 は安東出身の女性である。A2 が訪れた市場では、「日本人に対しては全部日本語」と教えてくれたように、彼女のような日本人には日本語でしか会話がされなかったことがわかる。ただし、日本語で話したとはいえ、日本語が母語である日本人のそれとは違いがあったことも「お話が日本語でやりますからもうすぐにね」うかがい知ることができる。

市場での言語ドメインをまとめると、日本人が買い出しに出かけたとき、満人や韓国人などすべての人が、日本語を話していたということになる。

6.2. 街中

事例 6-2 は北京官話の学習経験があった A1 に対して、街中で使うことはなかったかという質問をした際のコメントである。

事例 6-2：なんでも通じた日本語

| | |
|----|---|
| R | 北京官話を街中で使うことはあったんですか？ |
| A1 | 日本語がなんでも通じるから |
| R | じゃあほとんど使わない |
| A1 | 使わなくても済んだわけ |
| R | 結局じゃあ勉強したものの |
| A1 | そうそう勉強したものの、使う、使う必要なかったね、それだけ日本語覚えてくれたわけね |

A1 は北京官話を学習したものの実際には「使わなくても済んだ」という表現で北京官話ではなく日本語を使用していた様子を話してくれた。やはり、市場のみならず街中でも日本語のみであったということが明らかとなった。

6.3. 飲食店

市場や街中では日本語がメインであったことが分かった。市場や街中では隣のお店や周りの空気から独自性を出すことは難しく、日本人の地位の高さから日本語が主流にな

れば一様に日本語しか聞こえなくなることは想像できる。それならば、飲食店のような独自性の出しやすい場所ではどうだろうか。本節では飲食店について言及している事例を取り上げる。

6.3.1. 中国料理店

次の事例 6-3 は A2 が中国料理店へ電話で餃子の出前を頼んだときのことを話してくれた事例である。

事例 6-3：中国料理店への日本語

| | |
|----|---|
| A2 | 中国飯店つつう鴨緑飯店っていう有名なね、中国料理店があるんだよ |
| R | なにをその |
| A2 | 向こうはね。日本語知ってる、わかるから、「餃子頼むよー」っていうと持ってくるの |
| R | 「餃子頼むよー」って言っちゃうの？ |
| A2 | そうだよ、「十皿持ってきてくれー」っていうと持ってきてちゃうの日本語通じるんだもん |

A2 が出前の餃子を電話で日本語を使って頼んでいる。電話相手の中国料理店の店員は中国人であったという。中国人が相手であったにもかかわらず、日本語の使用をしている。たしかに、ここでは双方向の会話ではなく一方向的な A2 による発言を理解していたことしかわからない。だが、この事例について考えておきたいことは、電話ではなくお店に行った場合のことである。出前ではなく、日本人が直接お店に行くこともあっただろう。その時にもやはり同じように「餃子を十皿頼むよ」のような会話がされていたことが予測される。つまり、そこのお店の中では、日本語による注文がなされ、日本語を聞くことができたことが示唆される。

6.3.2. ロシア人のチョコレートのお店とパン屋

飲食店を営んでいたのは中国人だけではない。大連ではロシア人もパン屋を営んでい

た。そこではどんな言語によってコミュニケーションがなされていたのだろうか。事例 6-4 で確認していこう。

事例 6-4：ロシア人のお店について

| | |
|----|---|
| D2 | この中にロシアのことが書いてありましたよね？ロシア人はよくパンを売っていました，そしてあのチョコレートをよく売っていました |
| R | パンとチョコを |
| D2 | はい，チョコはねお店です，パンはね立ち食いが多かったね |
| R | 彼らはどんな言葉で売ってるんですか？ |
| D2 | あの，ロシア語です |
| R | ロシア語 |
| D2 | こちらの言うことは，わかるみたいですけど，向こうが日本語とか中国語で話すことはなかったような気がしますね |

これまでは多くの場所で日本語が話されていたということが明らかとなったが，ロシア人が経営するお店では，ロシア語であったことが明らかとなった。また，日本語と中国語は使用しなかったようである。一方，甲賀(2017b)で，安東のロシア人が経営するでは指さしによるコミュニケーションであったことを明らかにしている。ロシア人のお店では地域差，あるいは店舗差，個人差があることがわかった。

ここではロシア語の具体例までは聞くことができなかったが，ロシア語が使われていたということだけは確認することができた。

6.4. 自宅

聞き取り調査のインフォーマントとなっていた人たちは，すべて両親が日本人であった。それゆえに，家庭内では，特に家族と話すときには日本語が使われていたようである。

6.4.1. D2 の中国人使用人との会話

しかし、D2 は両親ともに日本人であるにもかかわらず、他の家庭とは状況が異なっていた。なぜなら、D2 の家庭には中国人の使用人がいたからである。ここでは、その使用人との会話について言及してもらっている。

事例 6-5 : D2 の使用人との会話

| | |
|----|---|
| D2 | 両親が日本人ですからね、うちでは日本語なんですよ、けども、お手伝いさん雇ってましたね |
| R | いらっしゃったんですか |
| D2 | はい、だから中国人の女の人と男の人が一人いて、だからそれと話をするときには、うん、それこそ、たどたどしい |
| R | 日本語のほうで？ |
| D2 | 中国語で、やらないと、「持ってけ」って言ったって向こうが変な顔するだけです、ね、ナーチャーラーと言わないと |

両親が日本人であったことで彼らとは日本語で話していたようである。しかし、雇っていた使用人と話すときには日本語ではなく中国語が用いられていたという。つまり、D2 は 6.3.2 と合わせて考えると日本語、ロシア語、中国語という言語を耳にする環境で育ったことになる。

6.4.2. D1 の中国人使用人との会話

当時の旧満洲国では使用人を雇うことはよくあることだった。インフォーマントの中で、使用人を雇っていた家庭は D2 だけではなく、D1 の家庭でも使用人を雇っていた。しかし、彼らとの会話は D2 の中国語と異なり、日本語であったようである。

事例 6-6 : D1 の使用人との会話

| | |
|----|---|
| R | 中国の人が日本語しゃべるような機会はなかったんですか？向こうの人が |
| D1 | 向こうの人がね、日本語しゃべるっていう人、かなり、お家がいい人ね、お金がかかるでしょ？日本語の学校に行かなきゃならない、でも、それでもね、中国の賢い人はね、お手伝いに来るんだよね、お手伝いとして雇ってもらうの、だから、うちなんかでも兄弟が多いから、中国人、姑娘、姉妹で雇うわけ、お姉ちゃんのほうがお手伝いさん、妹のほうは子守り、姉妹で |

D1 は自分の家に来ていた使用人は「お手伝いに来る」ことで、日本語の学校の代わりをしていたと考えている。彼女たちが D1 と話すときには日本語で話そうとしていた様子を見てのことだろう。だから、学校の代わりが D1 の家庭であるというような考えに至ったと推察される。D1 の家では家族だけでなく使用人とも日本語が用いられていたことがわかった。

このように、同じ大連の日本人家庭とはいえ、使用人との会話に用いる言語が異なっていたことが明らかとなった。

6.4.3. 訪問販売員との会話

A2 の家庭では、使用人は雇っていなかった。そのため前述した通り、家で家族と話すときには日本語を用いていた。しかし、A2 が在宅のときに中国人が品物を売りに来ることがあったという。事例 6-7 はそのときのことを話してくれている事例である。

事例 6-7：家にいたときに来た訪問販売員

| | |
|----|---|
| A2 | 中国語はたまにね，ほらさっきの売りに来んだろ業者，そんなときはね，中国語でしゃべったりした |
| R | そうなの，何？「いない」 |
| A2 | そうそう「要不要」って言うんだよ，「要」っていうのは「欲しい」ってんだ，そういうことば |

品物を売りに来る訪問販売員に対して、「いる」か「いない」か意思表示をする必要があり，そのときには中国語を使っていたという。その訪問販売員に対する言及はこれ以上なく、「いる」か「いない」かという意思表示以上の会話がなされたかはわからない。だが，A2 が生活していた環境の中では，日本語と中国語があったことは間違いない。つまり，家の中では家族と話すときには日本語を話し，必要なときには中国語を使っていたということである。

6.5. 学校

本節では当時の学校内における言語について言及した部分を取り上げる。ここでは、「そこに行くことができれば，ある言語を耳にすることができる」という視点から，学校の中で話されていたものと，学校の中で習っていたものを取り上げる。

6.5.1. 安東の学校

事例 6-8 は A2 が安東の中学校について言及しているもの，事例 6-9 は学校での言語が推察されるものである。同級生に朝鮮民族の学生がいたこと，中国語の学習をしていたことを教えてくれた。

事例 6-8：朝鮮民族の同級生と中国語学習

| | |
|----|--|
| A2 | 日本語学校で、韓国の小学校で、優秀な奴が入って来たんだよ、日本に |
| R | じゃあもう日本語がペラペラの |
| A2 | そう、ペラペラのが入って来たんだよ、俺のクラスに |
| R | すごいねじゃあ日中韓英、中国語喋れたのかな |
| A2 | 中国語いま話してるのは、中国語の先生がカン先生っていうのがやってきてさ |
| R | じゃあ中国語の勉強もあったの？ |
| A2 | あったんだよ、単位とかもあったんだよ、今でいう単位とかもあったんだよ、正規の授業あったんだよ |

事例 6-9：朝鮮語の不使用

| | |
|----|---|
| A2 | しゃべらない、韓国語の人たち全然しゃべらんもん、日本語ばかり使えて言うんだもん |
| R | そうなの、でもどうしようもないときあるじゃん、それこそ料理屋さん行ったときにさ |
| A2 | おれなんか全然韓国語の「か」の字も知らないよ |

安東の日本人向けの中学校は人気が高く、日本人でさえも入学できないことがあったという。そんな中、同級生には朝鮮民族がいたということをピックアップして教えてくれた。彼らは「日本語がペラペラ」であった。そのため、会話は日本語であった。それを裏付けるように「韓国語の『か』の字も知らない」という発言で、やはり「韓国語」での会話はなかったということもわかる。つまり、教室には日本人と朝鮮民族の学生がいたが、聞こえてくる言語は日本語だけということになる。

また、中国語学習もあった。彼は家に来た訪問販売員に対して、中国語で返答をしている。彼がこうした中国語を使えるのも学校という環境の中で、中国語を学んでいた結果かもしれない。

まとめると A2 が通った安東の学校では、同級生たちとの会話では日本語が聞こえ、時折、中国語の授業によって中国語が聞こえるという環境であったことが明らかとなっ

た。

6.5.2. 撫順の学校

安東の学校では、ほとんどの時間で日本語が聞こえてくるような環境であったが、他の地域の学校ではどのような言語になっていたのだろうか。撫順の学校の例からみていこう。

事例 6-10 は撫順の学校ではどのような民族がいたかについて教えてくれたものである。安東の学校は中学校についての言及だったが、事例 6-10 から事例 6-12 では女学校についての話を中心となる。

事例 6-10：多民族の学校

| | |
|----|--|
| F1 | 私は白系ロシアの子はずっといた、女学校卒業するまでいた |
| R | 女学校では一緒に勉強されていたんですか？ |
| F1 | ええ、小学校から |
| R | ということは学校には多国籍だったんですか？ |
| F1 | いや、あの、中国人は入りません、日本人の学校には |
| F2 | 入りません |
| F1 | 入れません |
| R | 入れなかったんですね |
| F1 | 中国人っていうか満人っていうか、それで、小学校も、ええと、朝鮮系の人も、小学校は入ってないんだけど、女学校になったら、お金持ちの人が、学年に3人くらい入ってましたね |

撫順では女学校に日本人、ロシア人、朝鮮系の人が入ったということがわかる。一方、中国人(満人)はいなかったようである。彼らとの会話については言及されなかったが、事例 6-12 でどのような言語の授業があったかについて教えてくれた。

事例 6-11：英語，中国語の授業

| | |
|----|--|
| F1 | 受験クラスなんかに入ってたんですけど，もう女学校の３年くらいから，受験する人は，受験クラスで英語習って，それから，残る人は中国語で，あとはなんか，家庭科みたいなね，その３つに分かれる時間があったんですけど，英語の人は自習で遊んでました，あの，敵性語使っちゃいけないって |
|----|--|

戦争が激化していくにつれ，学校の授業にも影響があったようである。戦争が激しくなる前までは，進学するか否かに合わせて英語の授業を受けるか，中国語の授業を受けるか，家庭科の授業を受けるかに分かれていたという。次第に「敵性語」を使ってはいけなくなると，英語の授業は自習（遊び）となっていた。

事例 6-13 言語の授業ではなく，音楽の授業で使われていたドイツ語について教えてくれたものである。

事例 6-12：ドイツ語の音階使用

| | |
|----|--|
| F1 | 「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」だったのよね |
| S | ドイツ語 |
| F1 | そう，ふっと出るね，何十年も言っていないのに |
| R | ドイツ語，ドイツ語も向こうで使ってたんですか？ |
| F1 | それを使ってたときもある，音楽の先生によって，ぶってる先生が |
| R | 日本人の方なんですか？ぶってる先生 |
| S | 俺は偉いんだぞ，ドイツ語知ってるって |
| F1 | いや，音楽の先生なんて，ほら，出た，師範学校の音楽の先生じゃダメで，本当の |
| R | 本場で習ってきた |
| F1 | 今でいう音大，女学校の先生になんかなると音大出の人が音楽専門の先生だったから |

ここでは，言語の授業ではなく，音楽の授業で使われていたドイツ語の例である。こ

のようなドイツ語は、音楽の先生でしかも音大を出た先生に限った使用である。当然のことながら、「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」は“C D E F G A H C”のことであり、ドイツ語母語話者に確認したところ、日本語の「ドレミ」に当たる正しいものであった。

撫順の言語ドメインについてまとめてみる。

- 民族としては、日本人、ロシア人、朝鮮系の人がいた。
- 言語の授業は選択制ではあるが、英語、中国語があった。だが戦争激化に伴い、英語の授業は、自習の時間となった。
- 音楽の授業で、ドイツ語の音階が用いられていた。

6.5.3. 大連の学校

安東、撫順の学校を見てきた。最後に大連の学校と幼稚園を取り上げたい。

事例 6-13 で取り上げるのは、大連における学校、幼稚園のそれぞれの民族構成と中国人との友達との会話で使った言語についてである。

事例 6-13：中国語が聞こえる幼稚園

| | |
|----|--|
| D2 | あの、学校に中国人がおりましたんでね、あの、学校が日本人学校ですけど、中国人それから今でいう朝鮮人韓国人ですか、いましたから |
| R | みなさん一緒に同じ学校だったんですか？ |
| D2 | 同じクラス、それからあの、幼稚園入ってて幼稚園にも中国人の友達がいきましたよ、その連中が、我々呼びかけるときはパッと日本語が出てこない、中国語でやるんですよ、「小孩来来」っていうんですよ、だから我々もね、ついうっかりっていうか、あの日本人がだいたいそうでしたけど、「お金がない」なんて言うときは「錢没有」っていうんですよ、で、向こうはね、わからんでもないらしいですよ、「没有錢」って言わないと通じないんですよ |
| R | 語順が日本語の語順になっている |
| D2 | はい大概そういうように日本人は言うわけですよ、我々も子供ですからね、大人につられて「没有錢」って言わないで「錢没有」「錢没有」って、それが不思議っていうか、それでも通じるから不思議ですよ |

まず、D2 が通った日本人学校とは、彼が小学校の 6 年生のときに内地へ帰ってきていることから、その学校とは小学校であろう。

その学校では、日本人と中国人、朝鮮人（韓国人）がいた。また、幼稚園では日本人と中国人がいたことが分かる。幼稚園での会話は、「我々呼びかけるときはパッと日本語が出てこない」と言っているように、呼びかけるとき以外は日本語、呼びかけるときは「中国語でやるんですよ、『小孩来来』っていうんです」と言っているように中国語が使われていたことが明らかとなった。

次の事例 6-14 では、小学校の授業についてである。

事例 6-14：小学校における中国語の授業

| | |
|----|--|
| R | 内地から来た人はいなかったんですか？ |
| D2 | おりました。おりました。その人たちが一番困ったのは、授業に支那語、中国語があるのがね。まったくわからんって言ってました。「こんなに簡単なことどうしてわからんのだ」って言ってました。 |

D2 が通った中学校には、中国語の授業があった。彼は幼稚園の時から中国語を使用しているうえに、家では使用人と中国語を使うような環境で育っている。小学校に上がっても、授業があり中国語が周りでよく耳にするような環境に身を置いていたことが分かる。

大連の事例をまとめると、幼稚園、小学校ともに日本人のほかにも民族がおり、とっさに中国語が使われるような環境であったということが明らかとなった。

6.6. 教会

旧満洲国は「五族協和」という言葉が特に有名であろう。しかし、当時の旧満洲国にいた民族はその五族だけではなかった。撫順には西洋人もいたようである。

これは F1 がその西洋人がいた教会へ遊びに行ったときを思い出して話してくれた部分である。

事例 6-15：遊びに行った近所の教会

| | |
|----|---|
| F2 | そこの教会のひとはあのヨーロッパっていうか、ヨーロッパ系の、シスターだったね |
| F1 | シスターだったね、みんなカトリック教会は |
| S | どこから来てるの |
| F1 | フランスからも、アメリカからもいたと思うけども、フランスの人はずっと残っていたけど、アメリカ系の人はすぐに消えた |
| S | フランスの人は昭和 20 年の 5 月までいたんですよ |
| F1 | ああ、ああ |
| S | 日本とフランスが戦争したのは 20 年の 5 月になってからなんですよ |
| F1 | へえ |
| F2 | へえだって |
| F1 | あたしなんか遊びに行って、ピンポンしたりしてた、シスターのもとへ、その時にその、何対何ってこう言うじゃん、それがあたしなんかワン、トゥー、スリーと思っているのが、トゥリーって聞こえるのよ、トゥリーって発音違うなあと思って、その人がフランス人だったんじゃないかなって思うのよ |
| S | フランス人は抑留されてない |
| F1 | あのね、シスターの格好して、ここにロザリオっていうのかな、なんかもうじゃらじゃらぶら下げてね、真っ黒いスカートで、あのうちの前通って、住まいのほうと、教会とは、50 メートルくらいかね、小学校のすぐ横、あとで松井さんの家になって、あそこが薄暗い感じのおうちだったのよ、シスターたちが寝泊まりする、あの人たちとは日本語で話してないような気がする |

教会にいた西洋人とは、アメリカ人とフランス人であったようである。彼らとはどのような言語が使われていたかは直接的な言及はないが、「日本語で話してないような気がする」というコメントはもらうことができた。また、英語が使われることもあった。

「あたしなんかワン，トゥー，スリーと思っているのが，トゥリーって聞こえるのよ，トゥリーって発音違うなあと思って」と言っている。つまり，少なくとも「トゥリー (three)」とは言っていたようである。

まとめると，F1 が遊びに行っていた教会では，日本語ではない言語が話されており，時には英語の使用もあったということである。

6.7. ソ連軍進軍

ここまでのデータは全て聞き取り調査によるものだったが，本節では会報『ありなれ』をデータとして分析をする。

また，ここまでに取り上げてきたものは全て戦時中のものであるが，ここでは敗戦後の話である。

事例 6-16 は，戦争が終わり日本人の立場が逆転した結果，ソ連兵と中国人などが日本人に対し品物を脅して奪うことがあり，そのときに関する女性の回想である。ここにソ連兵が使った日本語が記述されている。

事例 6-16：敗戦後のソ連兵による日本語

| | |
|------|---|
| 会報 1 | <p>前のように両手を上げて迎えていると，ソ連兵は，手を下ろせ，というと，拳銃を手にししながら，ジロジロと私達を見ながら，その間を縫って歩く。</p> <p>一番最後にいた電報局の森さんの奥さんの前で立ち止まると，奥さんの鼻の下へ拳銃をピタリとつきつけた。そして拳銃を持たない方の指で，○印を作って見せ，</p> <p>「奥さん，これありますか，これありますか」と流暢な日本語でいう。森さんの奥さんは青い顔で「ありません」といっている。</p> <p>「ピストルの冷たい感触が身にしむようで，おまけに，銃口を動かすものだから，その気持ちの悪いこと，命が縮むようだった」というのが後での奥さんの述懐であった。</p> <p>『ありなれ』41号，pp.41，上段17行目—中段6行目</p> |
|------|---|

ソ連兵は「o印を作って見せ」て、『奥さん、これありますか、これありますか』と流暢な日本語でい」ったという。旧満洲国において日本は敗戦すると立場が逆転し、品物を奪われるような立場になった。これまで見てきたように、戦時中は中国語が話されることがあっても多くの場合は日本語が優勢であった。そのような環境の中で、終戦直前に入って来たソ連兵も日本語を使用していたということが明らかとなった。つまり、敗戦によって立場が変わっても、他民族によって日本語が話される環境は継続されていたのである。

6.8. 全ドメイン

次の事例はこれまで取り上げてきたものと全く異なる環境を語っているものである。彼は奉天、大連と父親の仕事の関係で戦時中に引っ越しをしている。つまり複数のドメインを経験していることになる。しかし、彼が語ったのは意外にも中国人とかかわったことがないということである。実際に事例を見てみよう。

事例 6-17：敗戦後のソ連兵による日本語

| | |
|------|--|
| NHK1 | <p>外地育ち、ですよ外国、満洲っていう国は日本の全くの傀儡国家であって、僕たちはビザもなしに自由に行ったり来たりなんかして、まるで外国という意識なんか少年の僕にはなかったわけなんだけど、戦後一緒だった人たちに、外地で育ったって言うと、それじゃあ中国語、子供の時からしゃべってたのか、とか、隣近所に中国人なんかいて仲良くしていたのか、なんてイメージでみんな受け止めるけども、実はそういうこと一切なかったんですよ、中国人の親しい友達がいたなんて言うこともなかったしまた、隣に優しい中国人のお婆さんがいたっていうわけじゃないし、うるさい中国人のおじいさんがいて叱られたというわけでもないし、一切そういう形での中国人とのかかわりはなくてそういう中国という土地で育ったって言うことに後々気付いて、驚いたり慄然としたりするわけです</p> |
|------|--|

ここで取り上げたいのは「中国語、子供の時からしゃべってたのか、とか、隣近所に中国人なんかいて仲良くしていたのか、なんてイメージでみんな受け止めるけども、実はそういうこと一切なかったんですよね」という発言である。NHK1 がいた大連では、幼稚園でさえ、とっさの呼びかけなどで中国語が話されていた。しかし、彼は「一切なかった」と言い切っている。この大連における矛盾はどのような解釈ができるのだろうか。この2つの事例が教えてくれる重要なことは、大連ではこうであった、ましてや旧満洲国ではこうであったなどとは捉えられないということである。たしかに、我々が育った日本では、同じ地域であればどの日本人学校でも使われる言葉がほとんど変わらない。しかし、旧満洲国ではそうではなかったのである。言い換えれば、個人によって経験が全く異なっているということである。中国人の使用人がいた家、いなかった家、使用人がいた家庭でも、中国語を使った家庭と日本語を使った家庭など、やはりそれぞれ異なっている。本研究ではこのように個人個人に注目していきたい。

7. 言語使用

第6章の言語環境では、どのような言語が使われたか、どのような言語が聞こえてくるかということに注目して論を進めた。本章では、一語一語あるいは一文一文に焦点を当て、より具体的にみていく。

ここでは、正しい（正文の）中国語、間違った（非文の）中国語を取り扱うが、語順の違いや子音、母音の違い、そもそもそのような言い方ができないものなどを間違った（非文の）中国語として扱う。

7.1. 中国語

中国語の具体的な言語使用に関する言及は、日本人が使用したもの、中国人が使用したものがあつた。

まずは、日本人が使用したものを地域ごとに分けて具体例を提示していく。その後、中国人が使用したものを取り上げる。

7.1.1. 日本人が使用した中国語

日本人が中国語を使用したと言及した例はいくつも見られた。しかし、その具体例の数はインフォーマントごとに大きく異なっている。そのため、言及が多くないものは、どのような状況で使ったかをわかりやすくするために、言及された部分を文字に起こした。一方、言及例が多いものは表にし、それらを概説していく。

撫順のF1とF2は、自身の経験談や、中国語以外にもその他の言語や民族のことなど多くのことを教えてくれたため、中国語を使用したという具体例自体は少ない。そこで、言及してくれた部分をそのまま提示する。

事例7-1は中国語（北京官話）の授業を思い出して話してくれた部分である。中国語の授業では、中国人の先生が来られる時もあつたという。そのときの挨拶が中国語でなされたことを語ってくれた。

事例 7-1：中国語（北京官話）の授業での号令

| | |
|----|--|
| F1 | 北京官話だっていうことで習ってた，学校の授業もあったんです，中国語の時間が，中国の中国人の先生が来られる日もあって，その時に級長が，「チャンチライ」，「シンリ」，「ゾオシャ」って言ってたんです，それは「起立」，「礼」，「着席」，その号令を，その中国人の先生が来られた時には，「チャンチライ」，「シンリ」，「ゾオシャ」思い出したよ |
|----|--|

このように，中国語の先生が，中国人だったときには中国語によって「起立」，「礼」，「着席」という号令がなされていたことが分かった。もちろん，これらの中国語はすべて正しいものである。表 7-1 は，今回の言及例をまとめたものである。

表 7-1：F1 の中国語使用例

| 聞き取り | 漢字 | ピンイン | 意味 |
|--------|-----|------------|-------|
| チャンチライ | 站起来 | Zhàn qǐlái | 起立 |
| シンリ | 敬礼 | Jìnglǐ | (敬) 礼 |
| ゾオシャ | 坐下 | Zuò xià | 着席 |

中国語母語話者によれば，中国の学校でもこういった授業が始まる時に号令をかける。しかし，この中の“站起来”のみ始まる前の号令としては違和感のあるものだという。

このように中国語としては正しくても，使用される場面として不自然なものも使用されていたことが明らかとなった。

次は安東の A2 の中国語使用である。A2 には，文字資料を用いた聞き取り調査の際に，「この語は使用していましたか」ということを一語一語聞いている。そこで本人が使用したとはっきりと答えたものを表 7-2 に示す。

表には語句，中国語母語話者による正文判定，A2 によるコメントもあわせて提示する。語句には，文字資料に示されたものを見てのコメントのため，文字資料の表記に従って提示する。A2 のコメントには意味のみを言及したもの，一部言語意識が垣間見えるものもある。

表 7-2 : A2 の中国語使用例

| 番号 | 語句 | 正誤 | A2 のコメント |
|----|--------------------|----|--|
| 1 | ハオカン | ○ | 意味はきれい。 |
| 2 | 高粱 (コオリヤン) | ○ | 食べ物。白米に混ぜてご飯のかさ増しをした。麦やひえとかのような満洲の雑穀。「食わされた」という思い出がある。 |
| 3 | 實在 (シーツアイ) | ○ | 意味はここにある。実際にある。 |
| 4 | 起来了 (チーライラ) | ○ | 意味は(座るか寝ている状態から)立って来い。こっち来い。立ち上がってこっち来い。という命令。戦前は日本兵がこれを使い、戦後になると現地人がこれを使っていた。 |
| 5 | 聰明的 (ツオンミンテ) | ○ | 意味は頭いいな。：聡明「的」(ツオンミン「テ」)のテが正解というのはわかる。しかし、デとテの使い分けはわからない。聞いたことがあるほうを使っていた。 |
| 6 | 小車 (シアオチエー) | ○ | 意味は小さい車。 |
| 7 | 洋車 (ヤンチエー) | ○ | 意味は人力車。 |
| 8 | 馬車 (マーチエー) | ○ | 意味は馬車。4～5 人乗りであった。 |
| 9 | 明白 (ミンパイ) | ○ | 意味はわかった。 |
| 10 | 不明白 (プーミンパイ) | ○ | 明白不明白 (ミンパイプーミンパイ) でわかったか？という意味。 |
| 11 | 兩毛錢 (リヤンモーチェン) | ○ | 意味は二十銭 |
| 12 | 眞的 (チェンテ) | ○ | 意味はよく、本当のこと。 |
| 13 | 你吃飯了麼 (ニーチーファンラマー) | ○ | 「ご飯食べたか？」という意味。これを挨拶として使った。「ごきげんよう、元気か？」の代わりであった。中国人と会った時に使用し、朝昼晩いつ会っても使っていた。 |

| 番号 | 語句 | 正誤 | A2 のコメント |
|----|-----------------|----|---|
| 14 | クワイクワイデー | ○ | 意味は早く行け。「で」は”的”？戦前に威張っていた日本人が発言 |
| 15 | シンクシンク | ○ | 意味はご苦労ご苦労。上から下に向けて使う言葉で、苦力に向けてしか使わなかった。日本人には絶対使わない。 |
| 16 | ジーゴ | ○ | 意味は何個。 |
| 17 | リイヤンゴ | ○ | 意味は二個。 |
| 18 | シェイシェイ | ○ | 意味はありがとう。 |
| 19 | テンハオー | ○ | よく使う。元気？と聞かれた後でもテンハオーは使える。 |
| 20 | ハオーチー | ○ | (A2 はハオチーと言っていたと話す。) とてもおいしいは「ヘン (変) ハオチー」。出前の人に「ヘンハオチーラ。シェイシェイ。(とてもおいしかったよ。ありがとう。)」と言っていた (ただし、このハオーラは非文)。 |
| 21 | ワンラー (終った) | ○ | 完了という意味 |
| 22 | ホーワイラー (駄目) | ○ | 例文 (ホーワイラー (駄目) にしちやつた) 通りの使い方。 |
| 23 | タアタアデシイエ シイエ | ○ | 漢字は「多多」。 |
| 24 | ミンテン | ○ | 意味は明日。漢字は「明天」である。 |
| 25 | カンカン | ○ | 意味が戦前と戦後で異なる。戦前が「見ろ」, 戦後が「見てください」。 |
| 26 | ライライ | × | (「ライライなア」という例文に対して)「なア」だけでなく「了 (ラー)」も使えた。過去の表現ではないが、ラーを使えた。 |

| 番号 | 語句 | 正誤 | A2 のコメント |
|----|----------|----|---|
| 27 | ヤンホーメーユー | × | ヤンホーはマッチ，メーユーはあるか？という意味。日本人同士では使用せず，中国人相手にしか使わなかった。 |
| 28 | ヤンホーヨー | × | ヨーはあるよという意味。日本人同士では使用せず，中国人相手にしか使わなかった。 |

※（ ）内は筆者による補足である。

表 7-2 を見てわかるように多くの使用例があった。この他にも文字資料を見た A2 は、自分は使っていなかったが、周りは使っていたと答えたものもある（約 30 項目）。

ここでは、非文であったものがなぜ非文であるかということだけ言及しておきたい。

26「ライライ」は漢字にすれば“来来”である。だが、中国語ではこのように“来”を重ねて用いない。よって非文である。しかし、興味深いのは、A2 がコメントである。「ライライなア」という例文を見て、「なア」だけではなく、「了（ラー）」も用いることができたというのだ。そもそも「ライライ」の時点で非文であるのにもかかわらず、このような言語使用が見られるというのは、ピジンの特徴ともいえるだろう。もちろん、彼が使用したものはピジンであるということではなく、ピジンとの類似点があるというだけである。次の非文の例もそれにあたるだろう。

27「ヤンホーメーユー」は「マッチあるかい？」，28「ヤンホーヨー」は「マッチあるよ」という訳が文字資料の中に付記されていた。これらは 2 つとも語順の間違いである。まず、これらを、漢字にしたとすれば“洋火没有”，“洋火有”となる。これを正しい語順にすると，“有没有洋火”と“有洋火”となる。これらを見ても明らかなように、それぞれ語順が異なっている。さらに言えば，“洋火没有”も“洋火有”もどちらも日本語の語順に当てはめられている。言い換えれば、これは語彙を中国語から借用し、それを日本語の語順に当てはめていたのである。結果的に、それは正しい中国語ではなくなり、非文となる。つまり、この例もピジンの特徴を持っているということが言えるだろう。

このように文字資料を使った聞き取り調査から、実際に使用していた語句を確認することができた。

大連の言語使用の具体例は、D2 からかなり多く教えてもらうことができた。ここでは、教えてもらったものを正しい（正文の）中国語と間違った（非文の）中国語に分けて述べていく。

ここでは、中国語母語話者に文字を見て確認してもらったのではなく、全て音声聞きその正誤判定をしてもらっている。

表 7-3 は D2 が当時使用していたと教えてくれたものの中で、正しい中国語であったものである。語句は聞き取った順番で並べてある。ここでは計 18 例が見られた。

表 7-3 : D2 の正しい中国語使用例

| 番号 | 聞き取った語句 | 漢字表記 | D2 が言及した意味 |
|----|----------|-------|------------|
| 1 | ハオーラ | 好了 | いいです |
| 2 | ハオーハオー | 好好 | まあいいよ |
| 3 | プーハオ | 不好 | 悪い |
| 4 | ショートル | 小偷 | 泥棒 |
| 5 | センション | 先生 | 先生 |
| 6 | ナーリ | 哪里 | どこ |
| 7 | ナー | 哪 | どれ |
| 8 | ナーガハオ | 哪个好？ | どれがいい？ |
| 9 | クーリ | 苦力 | クーリ |
| 10 | ティクワ | 地瓜 | さつまいも |
| 11 | シャオレン | 厦門 | 廈門（地名） |
| 12 | チーファンラマー | 吃饭了吗？ | ご飯食べたか？ |
| 13 | ハイメーラー | 还没了 | まだです |
| 14 | リバイ | 礼拝 | 礼拝 |
| 15 | リバイアール | 礼拝二 | 火曜日 |
| 16 | リバイサン | 礼拝三 | 水曜日 |
| 17 | クーニャン | 姑娘 | 娘 |
| 18 | ミンパイラーマ | 明白了吗？ | わかりましたか？ |

この正しい中国語を見ると、日常的に使いそうな簡単なものが多い。例えば、2「ハオーハオー（好好）」や3「プーハオ（不好）」、4「センション（先生）」などはよく使いそうである。また、12「チーフアンラマー（吃饭了吗?）」は「ご飯食べたか?」という意味で、一見すると難しそうであり日常的にもあまり使わないようにも思えるが、「おはよう」などの挨拶の代わりに使っていたと言う。したがって日常的に使用していたことが考えられる。

もちろん日常的に使用していたからこそ記憶に残っているのかもしれないが、教えてくれた正しい中国語は日常的な使用頻度が高いと考えられるものが多かった。

ひとえに非文の中国語とは言っても、中国語母語話者が聞けば理解できる推測できるものと、聞いてもまったく理解できず、どのような言葉からその使用に至ったかということさえも分からないものもあった。ここではそれらを分けて、考察していく。

まずは、言及していた部分を実際に中国語母語話者に聞いてもらい、それが正しいものではないが聞けば理解できるという中国語を取り上げる（表 7-4）。

表 7-4 : D2 の理解可能な間違った中国語使用例

| 番号 | 聞き取った語句 | 推測される D2 の漢字表記 | D2 が言及した 意味 | 正しい中国語 |
|----|-------------------|-------------------|-------------------------|---------|
| 1 | チェンメイユー | 錢没有 | お金がない | 没有錢 |
| 2 | チャンナーライ | 枪拿来 | 銃を持ってきて | 拿来枪 |
| 3 | ショーハー | 说话 | 話す | 说话 |
| 4 | ツォマヤン | 怎么样? | どうですか | 怎么样? |
| 5 | トールチェン | 多■錢 | いくらですか? | 多少錢 |
| 6 | ナーチューラー | 拿去了 | 持って行ってく れ | (給我) 拿去 |
| 7 | トントンデーニー デプーハオ | 統統的你的不好 | (喧嘩の時に) みんなお前が 悪い | 都是你不好 |

※■は漢字の推測ができなかったものである。

中国語母語話者が聞いて理解できる間違った中国語は計7例見られた。さらに、間違いのパターンを4つに分類することができた。①語順の間違い、②発音の間違い、③部分的に合っているため言いたいことが推測可能、④部分で区切れれば意味理解が可能な4つである。以下で、それぞれ説明を加えていく。

①語順の間違い

この語順の間違いは、A2の事例でも見られたものである。ここでは1「チェンメイユー（錢没有）」と2「チャンナーライ（枪拿来）」がそれにあたる。どちらも文頭の名詞を後ろに持って来れば、正しい文となる。1なら“没有錢”，2なら“拿来枪”である。安東の事例でも述べたが、このような例は日本語の語順に当てはめられていると考えられる。

②発音の間違い

発音の間違いは3「ショーハー」と4「ツオマヤン」である。カタカナ表記ではなくIPAで表記してみる。3「ショーハー」は[ʃo:ha:]、4「ツオマヤン」は4[tʃomajan]となるだろう。しかし、中国語のピンインは3が“shuōhuà”，4が“zěnmeyàng”である。3の[ʃo:ha:]と“shuōhuà”は近い音のようにも見えるが、中国語母語話者により間違っていると評価された。また4の[tʃomajan]と“zěnmeyàng”は文頭の子音、母音がそれぞれはっきりと異なっている。

このように、間違っている中国語と判断されたものの中には、発音の間違いというパターンも見られた。

③部分的に合っているため言いたいことが推測可能

これは語順の問題ではなく、非文だが部分的に合っているために意味が推測可能なものである。①の語順の問題でも部分的に合っているということは言えるが、日本語の文法に当てはめられているという側面がある。だが、ここでは文法に当てはめられているというわけではない。5の「トールチェン」が当てはめていない例となる。中国語母語話者によれば「トー」は“多”，「チェン」は“錢”ということが分かるが、「ル」はわからないという。しかし、それでも言われれば、聞いて理解できると教えてくれた。なぜなら，“多”と“錢”があれば意味の予測が可能だからである。「『トールチェン』？“多”と“錢”がある

から、きっと“多少錢”って言いたいんだろうな」と考えられるという。このように語順が関係なく、その他の部分から推測して意味の理解が可能なのである。

6「ナーチャーラー」もこれと同様であるが、これはこのままの形でも正しい文ではある。ここで間違った文としたのは、彼が言及した意味や状況での使用が誤っているからである。この状況というのは、D2 が使用人に物を持って行ってもらうように頼んでいる状況で、その時に D2 が使った言葉が「ナーチャーラー」を用いるのはふさわしくない。「ナーチャーラー」を漢字で表記すると“拿去”である。この意味は「持って行った」である。つまり、完了を意味することになり、彼がこれをもって言いたかった「持って行ってくれ」という依頼は、これでは表せない。見てわかるように、「持って行った」と「持って行ってくれ」では、テンス、授受表現が異なっている。「持って行ってくれ」という意味にするならば“（給我）拿去”が正しい。“給我”は授受表現で、省略することも可能だという。ただし、省略した場合は命令形となる。それではなぜ、この文章を聞いただけで理解可能かという、やはり、“拿去”の存在である。“拿去”は「持って行ってくれ」という意味を、命令形ではあるが表せる。したがって、ここでは“了”さえ無視をすれば、D2 が言いたかったことになる。5「トールチェン」のように、部分的に意味が不明でも、「通じる」というわけである。

このように部分的に合っていることで、言いたいことがわかるというパターンが見られた。

④部分で区切れば意味理解が可能

部分で区切れば意味理解が可能なパターンは、7 の「トントンデーニーデプーハオ」がこれに当たる。これを漢字にすれば“統統的你的不好”となるだろう。まず、この文が非文であるというのは、「トントンデー（統統的）」と「ニーデ（你的）」に原因がある。「トントン（統統）」にはそもそも「デー（的）」を付けることができない。そして、「ニーデ（你的）」はこのような形は場合によっては正文となるが、今回のように「お前が」のような主格で用いられる場合には使えない。よって、ここでは非文となる。

しかし、間違っているものの聞けば理解が可能な文でもある。「トントンデー（統統的）」というのは、母語話者は「言わないけどわかる」し、「ニーデ（你的）」も「言わないけどわかる」というのだ。もちろん、「プーハオ（不好）」は正しい文なので問題ない。ここで、重要なのは区切る位置が違えば、理解ができない可能性があるということ

である。今回の場合、「トントンデー」、「ニーデ」、「プーハオ」でなければならなかったのである。もし必要以上の長音のようなものが挿入される、声調がおかしいなどがあれば通じない可能性もある。D2 は正しい文ではないだけで、理解の妨げになるほどの違和感のある発音ではなかったからこそ、聞いて理解ができたのである。

このように部分で区切れば意味理解が可能ということで、言いたいことがわかるというパターンが見られた。

非文の文章であっても、意味が理解できる 4 つのパターンを取り上げた。このようなパターンであれば、他の語句に代わっても通じた可能性がある。さらに、これらにあてはまらなくても通じるものはあるだろう。中国語語母語話者が聞いて理解できる間違った中国語の具体例を挙げるとともに、その通じる理由を明らかにすることができた。

次に、D2 が言及していた部分を実際に中国語母語話者に聞いてもらい、意味を理解できなかった中国語を取り上げる（表 7-5）。ここで扱うのは、まったく意味が分からないもの(2, 3, 4, 6), D2 の説明を聞いたら理解できたもの(1, 5)である。

意味を聞いてやっと理解できたということは、その語句だけであれば意味が分からず、コミュニケーションができない。それは、まったく意味が分からないものと同じであると判断したため同じように扱う。

表 7-5：中国語母語話者が聞いて理解できない間違った中国語

| 番号 | 聞き取った語句 | D2 が言及した意味 | 意味を聞いて理解できたか |
|----|----------------|------------|--------------|
| 1 | ショーハイライライ | (友達への呼びかけ) | ○ |
| 2 | ニーデショートルカンホージ | 泥棒しただろ | × |
| 3 | ヤーメイショーハサンビーケー | 警察に言うぞ | × |
| 4 | カンホージ | ～する | × |
| 5 | ヤーメイ | 巡査 | ○ |
| 6 | サンビーケー | 殴る | × |

語句を聞いても理解できなかったものは、計 6 例あった。ただし、4, 5, 6 は 2, 3 を単語ごとに分解して教えてくれたものである。したがって実質 3 つの文が理解できなかった。それぞれを解説していこう。

1「ショーハイライライ」は友達を呼ぶときに使ったという。これは一文のかたまり、チャンクのように使っていた。これを中国語母語話者は聞いても理解できなかった。しかし、呼びかける時に使ったという手掛かりによって理解することが出来た。漢字で書けば“小孩来来”だという。これならたしかに、呼びかける時に使用可能だが、“小孩，来”のように“小孩”で区切り、かつ“来来”ではなく“来”としなければならない。つまり、ここで理解ができなかった原因となったのは、「ショーハイライライ」を一つのチャンクのように使用していたためである。

次に、2 から 6 までについてである。2 から 6 は子供(D2)が中国人の大人をからかうときに使った言葉だという。4 から 6 が 2 と 3 の解説だが、中国語母語話者によれば、それらのうち正しいのは 5 の「ヤーメイ」のみで、それ以外はわからないという。そのため 5 の「ヤーメイ」のみ解説する。「ヤーメイ (IPA : [jaːmei])」を漢字にすると、“衙門”で、ピンインは“yámén”である。IPA とピンインを比べればわかるように、母音が異なっている。つまり、前述した②の間違っているが理解できる発音の間違いに近いものである。だが近いものとしているように完全には同じではない。なぜなら、そもそも“衙門”には、D2 が言及したような巡査の意味はなく、役所という意味しかない。したがって、②の間違っているが理解できる発音の間違いとは違い、意味が異なっているため、おそらく“衙門”だろうということしか言えないのである。

このように、意味が分からない間違った中国語もあった。これまで D2 が教えてくれた正しい中国語や間違った中国語を取り上げてきたが、興味深いことに D2 はその中の間違った中国語をほとんど正しく言い直すことができていた。つまり、正しい中国語も知っているのである。もちろん、当時から正しい中国語を使っていたかと言われればそうではないだろう。彼が後になって中国語を学習していたからこそ知っていたのである。しかし、大連という言語環境で育ったことで、彼が中国語を勉強するきっかけになったことは間違いない。その言語環境がその後に影響を与えていたこともここでは付け加えておきたい。

7.1.2. 中国人が使用した中国語

中国人が使用した中国語というのは、彼らの母語であるため、そもそも言及することへの疑問もあるだろう。しかし、ここでは1例だけ見られた単語の発音の間違いと、その文に対する言及も興味深いものがあつたのであわせて取り上げたい。

事例 7-2 は、物売りの中国人が使用した中国語に対する D2 の言及である。

事例 7-2：中国人の間違った中国語使用例

| | |
|----|--|
| D2 | あの、物売りでもね、例えば、「卵いりませんか？」なんて言うときは、「ヤオチーズンプーヤオ」って言ってたようですね、で必ず「ヤオプーヤオ」ですね、その間に単語入れて、その間に様々な日本語が入ったりしましたね |
| R | うちのおじいちゃんもよく言っていました、「ヤオプーヤオ」をよく使ってたって |
| D2 | 「ヤオチーズンプーヤオ」その間に名詞を入れるわけです、例えば「ヤオ」、「卵」、「チーズン」ですか、「ヤオチーズンプーヤオ」とかね、向こうの人は例えば「ヤオ刺身プーヤオ」とかね |
| R | 刺身 |
| D2 | ときどきね、向こうの人も商売人ですから、日本語がパッと出てくる |
| R | 刺身のような日本語も通じちゃうときはあるんですね |
| D2 | ありました、あの中国人は刺身は食べませんよね、普通は生ものは、けど日本人はよく食べるってこと知ってるもんですから、その売りに来た中国人が「ヤオ刺身プーヤオ」って言うんです |
| R | そっか、物が無いから単語も日本語、外来語として日本語から入って来たんですね |
| D2 | あの中国人は生ものは食べないです、食べるのはトマトだけだって、あとは必ず熱を通しますよね |

ここで出てくる間違つた中国語とは「ヤオチーズンプーヤオ」である。もちろん、これは日本語母語話者が記憶をたどつたために間違えてしまったという可能性も考えら

れるが、そうとも言い切れない側面もあるだろう。まずは、なぜ非文であるかを解説した後、その側面について言及したい。

「ヤオチーズンプーヤオ」は D2 によれば、「卵いりますか？」という意味である。漢字にすれば“要鸡蛋不要”であろう。ここでの間違いは発音である。前述した通り、発音の間違いでも意味、言いたいことを推測できるものもある。しかしこの「チーズン」では意味の推測まではできず、「いりませんか？」と言っていることだけしかわからないという。したがって、聞いても意味が理解できない間違っただ中国語ということになる。

では、なぜこれを単純な日本語母語話者の記憶違いであると言い切れないかについてであるが、D2 の中国語習得環境が理由の一つとして挙げられる。D2 は学校で中国語を習う前から幼稚園で中国語を話している。つまり、自然習得の中国語である。自然習得ということは正しいか正しくないかの判断は学校に入るまではなされないということである。中国人の物売りの人が言っていたことを聞いて真似をしていたが、彼の発音は間違っていたのである。しかし、それを直す者は周りにはいなかった。実際彼も『「ヤオチーズンプーヤオ」って言ってたようですね』と言っている。つまり誰かから聞いて覚えているのである。彼の周りの者が「ヤオチーズンプーヤオ」を使っており、彼もそれを使っていた可能性がある。このように、たとえ中国語母語話者が中国語を間違えていたという、にわかに信じられないことでも記憶の間違いではなく、彼だけでない周りの人も使用していた可能性を考えれば、それに合わせて物売りも「チーズン」と言っていたことも考えられる。

他にも物売りは正しく発音していたが、D2 が第二言語学習者であるので、うまく発音ができなかったことも考えられる。“鸡蛋”のピンインは“Jīdàn”である。また、「チーズン」の IPA は[tʃiːzʊn]である。比べればわかるように、“dà”と[zʊ]には子音と母音が全く異なっている。だが、彼が第二言語学習者であることを考えれば、この一音を間違えていた可能性もあるだろう。

この事例では「チーズン」の問題以外にも興味深いことが述べられている。それは日本語の借用である。中国の食文化にはない、「生魚の切り身」は日本語から「刺身」という語を借用していたのである。物売りが日本人は生魚を食べるということを知っていたということ、それが「刺身」という名前であるということを知っていたことは興味深い。「卵」と言わずに「チーズン」と言っていた物売りが、日本の食文化を知り、「刺身」を売っていたのである。言語環境の章で述べた通り、市場などで日本語が使われていた

ことを述べたが、単純に日本語を知っただけでなく、日本の文化を理解し、外来語のような形でも日本語を使用していたことが明らかとなった。

7.2. 日本語

ここでは旧満洲国にいた人々がどのような日本語を使っていたかについて、聞き取り調査で言及された部分を取り上げる。

7.2.1. 日本人が使用した日本語

まずは、A2 が育った安東の日本人の日本語である。

彼は学校で習った日本語と、自分たちが日ごろ話していた日本語が異なっていたことを教えてくれた。

事例 7-3：九州弁と混ざった日本語

| | |
|----|---|
| A2 | 「咲いた咲いた桜が咲いた」で俺なんか習ったんだもん、俺の姉もみんな日本語 |
| R | その教科書見て（自分の日本語が）変な日本語って思ったってこと？おじいちゃんは |
| A2 | それだけじゃ通用せんって、友達としゃべってるときにな |
| R | これは今しゃべってる言葉が内地では違う？ |
| A2 | 違うよ、内地では違うよ、教科書の日本語と自分で日常でしゃべってる日本語、九州弁と混ざった言葉とね、安東では日本人はみんな使ってるわけだから |

※（ ）内は、内容を分かりやすくするために筆者が挿入したもの。

A2 は、学校で習った日本語と友人を含め自分が使っている日本語が違っていたことを意識していた。彼が使用していた日本語は「九州弁と混ざった」ものだったのである。

次の事例で、その「九州弁と混ざった」日本語の具体例を挙げてくれている。

事例 7-4：「九州弁と混ざった」日本語

| | |
|----|--|
| A2 | 東京の標準語と違うんだよ、満洲の標準語っちゅうのは、九州のやつが多いから |
| R | 九州寄りの標準語とか？ |
| A2 | そうそうそう |
| R | なんか具体例ないの？「～しよる」とか「～しとる」とか |
| A2 | しとるとかね、しよるとか、「来よる」とかさ |
| R | は、使ってた？標準語として |
| A2 | そういうのをね、君のいう九州から来た連中の方言をよく知るやつに聞いてみる、満洲で使ってたかもわからない、満洲から引き上げたじいちゃん、ばあちゃんいるだろ、聞いてみる |
| R | 「来よる」は使ってたの |
| A2 | それが多いんだよ、「来よるし」、「来よるな」って |
| R | 「あいつ学校に来よる」、「来よったよ」とか？ |
| A2 | そういうのよく使う、使ってたよ |

彼はやはり、普段使っていた日本語は九州方言寄りのものだという。そこで筆者が具体例を挙げて（「～しよる」、「～しとる」）このような言葉が使用されていなかったかと質問した。そうすると彼は、「来よるし」、「来よるな」を使用していたことを教えてくれた。

当然のことながらこれは日本語の標準語ではない。当時の安東では、少なくとも九州（西日本）方言にみられるアスペクト「ヨル」を使用していたことが明らかとなった。

安東ではアスペクト「ヨル」の使用があったことが明らかとなった。撫順でも、安東と同様に九州から来た人が多かったようである。撫順の日本語も九州寄りだったのだろうか。

事例 7-5 は撫順で話されていた日本語について教えてくれたものである。

事例 7-5：撫順の日本語のアクセント

| | |
|----|--|
| F1 | 親たちは内地から行ってるわけだから、九州の人が多かったんですね、だからアクセントがね |
| F2 | アクセントがね、九州だろうね |
| F1 | 九州のほうはね、今しゃべっててもおわかりだろうと思うけれど、全然アクセントないのね |
| F2 | 合わないっていうかね例えばね、孫に、「このバスは〇〇に行きますか」聞くんだけど、あたしがね、ちょっと変なアクセントで言ったらね、孫に直されるから、だから違うんですよ、きっと |
| F1 | 例えばあの、降る「あめ」舐める「あめ」、その区別がないのあたしはね |
| F2 | 意識してね |
| F1 | アクセントが、果物の「かき」貝の「かき」、全然わからないの |
| R | 向こうでは普通だったんですか？ |
| F1 | それが、うん、それから途中に来るガ行鼻濁音？あれもないんです九州は |

F1 と F2 は自分たちの日本語が九州寄りであったことを話してくれた。それは九州の人が多かったことが理由だと考えている。そして、その時に獲得した日本語はいまでも標準語と異なっているという。その中でアクセントの例を教えてくれた。「例えばあの、降る「あめ」舐める「あめ」、その区別がない」というのである。これはいわゆる無アクセントであり、教えてくれた例の通り標準語とは異なる。

安東の例では文法面での違いがあったことが分かったが、ここではアクセント面での違いがあったことが明らかとなった。

7.2.2. 中国人が使用した日本語

F1 は中国人が使用した日本語の具体例を教えてくれた。中国人の中には日本人が経営するパン屋さんで働いていた者もいたという。働いている最中に、パンを売る中速人が日本語の歌詞の歌とともに、彼女の基にパンを売りに来ていた。事例 7-6 はその時のことについて教えてくれたものである。

事例 7-6：中国人による日本語の使用例

| | |
|----|--|
| F1 | 物売りで中国の人が来るのはね，日本人の経営するパン屋さんに働いていると思うんですけど，パンを売る人がいて，「アンパン，さとパン，生菓子，ようかん♪」って言って中国の人が売りに来てた |
| F2 | さとパンっていうのがパトパンって聞こえる |
| F1 | 冬になると，「栗ぬくい」って言って，あったかい栗，焼き栗，日本語を使ってるつもりだから「栗ぬくい」って掛け声かけて，一定の場所で焼きながら，汚い布団をかぶせて，栗が冷めないように |

このように「アンパン，さとパン，生菓子，ようかん♪」のように，商品名を羅列する歌を歌っていたという。日本人に対して売っていたから日本語の歌なのか，日本人以外も日本語が理解できたから日本語の歌なのかはわからないが，中国人が歌っていたことは間違いがない。

また，中国人が日本語の方言も使用していたこともわかる。「ぬくい」が日本語の方言だからである。『現代日本語方言大辞典』によれば，「ぬくい」は富山県，石川県，滋賀県，大阪府，兵庫県，奈良県，和歌山県，広島県，山口県，徳島県，香川県，愛媛県，高知県で使われる（図 7-1）。

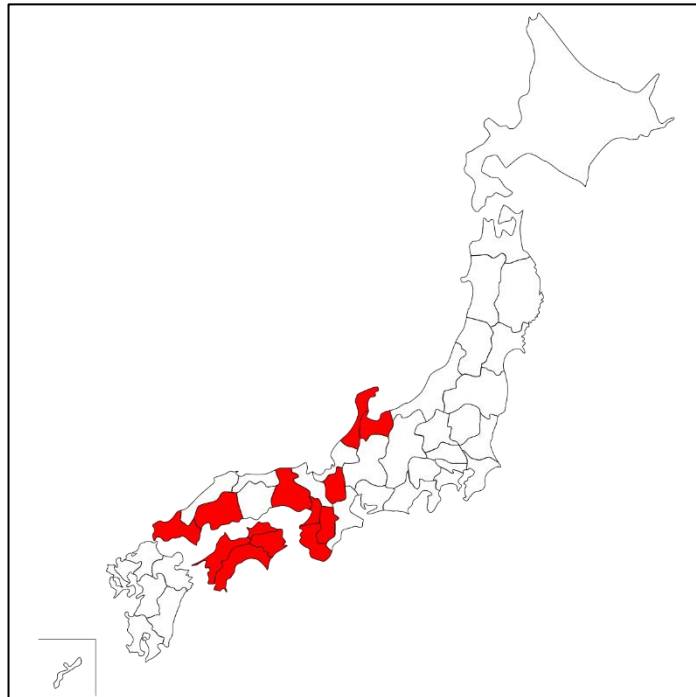


図 7-1 : 「ぬくい」 使用地域

これによれば，中部地方から西で使用されていることがわかる。これまで旧満洲国の日本語は九州方言と混ざっている意識があったことを述べたが，「ぬくい」の使用地域に九州は入っていない。当時の日本語は九州以外の地域の影響も考えられる。

このように，中国人による日本語使用の具体例から，日本語同士の接触についても提示することができた。

7.2.3. 朝鮮人が使用した日本語

言語環境を振り返ってみる。安東では学校に朝鮮民族の学生がいたが，彼らとは日本語を使用していたという。標準語のような日本語だったのだろうか。彼らの日本語について言及したのが事例 7-7 である。

事例 7-7：安東の日本人と同じ日本語を話す朝鮮民族

| | |
|----|--|
| R | ちょっと発音とかが変だから朝鮮の人だっていうのはわかるでしょ？ |
| A2 | すぐわかるわけよ，小学校の時みんな朝鮮語でやってたんだから，日本語と朝鮮語を両方勉強してたんだから，彼らは |
| R | その日本語はちゃんとした日本語？それとも九州よりの日本語？でも違和感を感じなかったってことは九州の，九州よりの日本語だったってこと？ |
| A2 | 彼らは日ごろ使ってた，使ってた日本語は，日本語だと思ってるわけだよ，標準語なんて知らないもん，安東中学に入ってから，日本語っちゅうのはこういうものが日本語なんだって，日常会話は違うから |

朝鮮民族は小学校の時から，日本語の学習をしていたという。しかし彼らが使用したのはいわゆる標準語ではなく，安東にいた日本人と同じような日本語であった。また，A2によれば，彼らも中学校で初めて自らの使う日本語が標準語ではなかったと気づいたのではないかとも言っている。この言語意識に関しては，議論の余地があるが，それでもここからわかることは，日常会話では，母語と第二言語という違いで多少の発音の違いはあれど，日本人と朝鮮民族の日本語は同じであったということである。

7.2.4. 内地から来た日本人が使用した日本語

この事例 7-8 は，大連の小学校にやって来た先生が使用していた日本語について言及したものである。先生が話す日本語は，D2 たちが使っていた日本語異なっていたという話を話してくれている。

事例 7-8：関西から大連へ来た日本人の日本語

| | |
|----|--|
| R | 向こうの日本語は方言っぽかったというのは特になかったんですね？九州方言だとかそういうのは |
| D2 | あの、私は生まれてからうちで日本語でしょ？だからそれが方言であるかどうかっていうのは、わからなかったですね。ですけども、日本に帰ってきてというか、途中で、関西から来ている先生がいらっしゃってね、その言葉が、我々が使っている日本語とだいぶ違うな、アクセントが違うなと思いましたね |

これまで、安東と撫順では九州寄りの日本語が使われていたという証言があった。このことから、大連でも同様であったかを質問した。その結果、九州方言であったかはわからなかったというコメントが得られた。ただし、関西から来た先生の日本語が使用しているものと違ったという証言を得ることができた。

ここで重要なのは内地から来た人が関西の方言を使っていたことではない。D2 が使っていた日本語とは同じではないことが重要なのである。「我々が使っている日本語とだいぶ違うな、アクセントが違うなと思いました」と話している。そう、違ったのである。これまで大連の日本人が使用していた日本語に関する言及は管見の限り見当たらないが、この証言により、彼らが使用していた日本語は関西のアクセント（京阪式アクセント）が使用されなかったことが明らかとなった。

7.2.5. ソ連兵が使用した日本語

次の事例 7-9 は、第 6 章言語ドメインで述べた事例（事例 6-16）である。言語環境では、敗戦後の立場逆転後にも、他民族による日本語の使用があったことを指摘した。ここでは、具体的な日本語の使用について見ていきたい。

事例 7-9：敗戦後のソ連兵による日本語

| | |
|------|--|
| 会報 1 | <p>前のように両手を上げて迎えていると、ソ連兵は、手を下ろせ、という、拳銃を手にししながら、ジロジロと私達を見ながら、その間を縫って歩く。</p> <p>一番最後にいた電報局の森さんの奥さんの前で立ち止まると、奥さんの鼻の下へ拳銃をピタリとつきつけた。そして拳銃を持たない方の指で、○印を作って見せ、</p> <p>「奥さん、これありますか、これありますか」と流暢な日本語でいう。森さんの奥さんは青い顔で「ありません」といつている。</p> <p>「ピストルの冷たい感触が身にしむようで、おまけに、銃口を動かすものだから、その気持ちの悪いこと、命が縮むようだった」というのが後での奥さんの述懐であった。</p> <p>『ありなれ』 41 号， pp.41， 上段 17 行目－中段 6 行目</p> |
|------|--|

この事例で使われているソ連兵の日本語は「奥さん、これありますか、これありますか」というものである。この事例だけでは多くのことを言い切ることができない。考えられることは下記の通りである。

- ソ連兵は「物を奪うために必要な日本語」は覚えていた
 - 相手を特定するための「奥さん」や要求を示す「これありますか」は話せた
 - ジェスチャーを用いているように、具体的な物の名前まではわからなかった
- これらのことがここから考えられるだろう。しかし、どれも推測の域は出ない。だが、やはり重要なのは、どの程度習得していたかはさておき、少なくとも「奥さん」と「これありますか」という日本語はソ連兵が話せたということだろう。

7.3. その他の言語

聞き取り調査や NHK アーカイブスのデータの中には、中国語と日本語以外の言語についての貴重なデータもある。聞き取り調査では英語、ドイツ語さらにはロシア語についての言及があった。NHK アーカイブスでは一例しか見られなかったが、「混合型」の使用もあった。

7.3.1. フランス人が使用した英語

フランス人がいたことは、言語環境の章でも述べたとおりである。彼女たちとは日本語は使用されなかったが、具体地期にはどのような言語が用いられていたかわからない。しかし、一緒に遊んでいたということは何らかの会話があったことは間違いない。その一端がこの事例の「1, 2, 3」である。

事例 7-10：遊びに行った近所の教会

| | |
|----|---|
| F2 | そこの教会のひとはあのヨーロッパっていうか、ヨーロッパ系の、シスターだったね |
| F1 | シスターだったね、みんなカトリック教会は |
| S | どこから来てるの |
| F1 | フランスからも、アメリカからもいたと思うけども、フランスの人はずっと残っていたけど、アメリカ系の人はすぐに消えた |
| S | フランスの人は昭和 20 年の 5 月までいたんですよ、日本とフランスが戦争したのは 20 年の 5 月になってからなんですよ |
| F1 | へえ |
| F2 | へえだって |
| F1 | あたしなんか遊びに行って、ピンポンしたりしてた、シスターのもとへ、その時にその、何対何ってこう言うじゃん、それがあたしなんかワン、トゥー、スリーと思っているのが、トゥリーって聞こえるのよ、トゥリーって発音違うなあと思って、その人がフランス人だったんじゃないかなって思うのよ |
| S | フランス人は抑留されてない |
| F1 | あのね、シスターの格好して、ここにロザリオっていうのかな、なんかもうじゃらじゃらぶら下げてね、真っ黒いスカートで、あのうちの前通って、住まいのほうと、教会とは、50 メートルくらいかね、小学校のすぐ横、あとで松井さんの家になって、あそこが薄暗い感じのおうちだったのよ、シスターたちが寝泊まりする、あの人たちとは日本語で話してないような気がする |

ここの事例は、「ワン，トゥー，スリー/トゥリー」というごく限られた英語使用についての言及である。だが，大げさに言えば，F1 とフランス人の間ではリンガフランカ英語が使用されていたのである。また，アメリカ人もいたことから，彼女たちに対するフォーリナートークがあったという見方もできる。例えば，フランス人に対する英語の使い方と，日本人に対する日本語の使い方，ゆっくり話したか否か，繰り返し，あいづちなどである。

このように，撫順の教会における英語使用は，旧満洲国の言語研究，リンガフランカ，フォーリナートークといった観点からの新たな研究の可能性が見えてくる。

7.3.2. 日本人が使用したドイツ語

ここでは事例 6-13 で取り上げたものをもう一度見てみる。

音楽の授業ではドイツ語が使用されていた。しかし，言及されたドイツ語は「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」のみであった。

事例 7-11：ドイツ語の音階使用

| | |
|----|--|
| F1 | 「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」だったのよね |
| S | ドイツ語 |
| F1 | そう，ふっと出るね，何十年も言ってないのに |
| R | ドイツ語，ドイツ語も向こうで使ってたんですか？ |
| F1 | それを使ってたときもある，音楽の先生によって，ぶってる先生が |
| R | 日本人の方なんですか？ぶってる先生 |
| S | 俺は偉いんだぞ，ドイツ語知ってるって |
| F1 | いや，音楽の先生なんて，ほら，出た，師範学校の音楽の先生じゃダメで，本当の |
| R | 本場で習ってきた |
| F1 | 今でいう音大，女学校の先生になんかなると音大出の人が音楽専門の先生だったから |

『「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」だったのよね』という発言は、音楽に関する話をしているときに不意に思い出して教えてくれたものである。

使用者は学校の先生（日本人）である。あくまでドイツ語の授業ではないため、使用されたドイツ語は限られたものだったと推測できる。そのことが示唆されるのは事例 7-12 である。

事例 7-12：音で覚えたドイツ語

| | |
|----|---------------------------------------|
| F1 | 「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」 |
| S | 「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」？ |
| F1 | わからないよ、ただの自分の覚えだから、ドイツ語で覚えてるわけじゃないからね |
| S | カタカナで？ |
| F1 | 音で |

前述した通り「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」は“C D E F G A H C”のことであり、ドイツ語母語話者によれば、日本語の「ドレミ」に当たる正しいものである。

「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」はあくまで音で覚えたという。やはりドイツ語を学んで使用したというよりも、音階のみ音で覚えたというほうが建設的な考えだろう。つまり、能動的なドイツ語使用ではなく、受動的なものだったのである。

7.3.3. 日本人が使用したロシア語

日本人が使用したロシア語についてもこれまでの研究では、ほとんど言及されていない。なぜなら旧満洲国にいた日本人にとって、ソ連の進軍は思い出したくない出来事であり、それに関して研究者が尋ねることは非常に難しい問題だったからである。今回の聞き取り調査では、多くの具体例を聞くことができた。その全てを記述する。

事例 7-13：ロシア語の言語使用

| | |
|----|--|
| F1 | 「マダム出せ」っていうのはダワイだったかな，何だったっけ？ |
| F2 | 知らない |
| S | ダヴァイですかね |
| F1 | ダヴァイ，時計とかね，それは終戦後ですから，ズラウスト，ズラウストとかね |
| F2 | ほっとする |
| F1 | なんだったけそれから |
| S | ズラウストはどうぞですね |
| F1 | うんそれでスパシーボ |
| S | それはありがとうだね，ズラウストはこんにちはだったかな |
| F1 | それからネット，ネット |
| F2 | ネット，オチンハラショ |
| F1 | ハラショ，ハラショ，ロシア語全部，ロシア語のつもり，つもり |
| F2 | オーチンハラショって言ったよね |
| F1 | ね，オーチンハラショ，非常にたいへん，ベリーナイス |
| F2 | そういえばそんなん覚えてる，ちょっと覚えてるね私も |
| F1 | 敗戦の副産物だね，そっちのほうも |
| R | ロシアの言葉も |
| F1 | ロシアへ行ったときあたし，なんか少年が |
| F2 | ネハラショねそして |
| F1 | ネハラショ |
| F2 | ネハラショ，だめって |
| F1 | ネハラショ，ネットとかさ，言ったもんね， |
| S | 物売り相手にやってみましたよ |
| F1 | そしたらお母さんロシア語わかるじゃないって言われて，思わずその場で言ったんだから，しつこくたばこ売りの少年が |
| S | ロシアが解体した直後ですね旅行でモスクワちょっと寄ったときに |

F1 と F2 がここで教えてくれたロシア語は 7 語である。F1 が「うん、それでスパシーボ」と言っているが、これは肯定の「うん」ではなく、ただのあいづちであった。

表 7-6 はこれらをまとめたものである。日本語訳はロシア語の辞書を参考にしたものである。

表 7-6 : F1 と F2 が使用したロシア語

| 聞き取った読み方 | ロシア語 | F1 と F2 が 言及した意味 | 意味 |
|-----------|---------------|---------------------|---------------|
| ダワイ, ダヴァイ | давай | 出せ | どうぞ/いいですよ |
| ズラウスト | здравствуйте | | こんにちは |
| スパシーボ | спасибо | | ありがとう |
| ネット | Нет | | いいえ/ ありません |
| ハラショ | хороший | | 良い |
| オーチンハラショ | Очень хороший | 非常に良い/ ベリーナイス | 非常に良い |
| ネハラショ | не хороший | だめ | 良くない |

F1 と F2 が考える意味は言及が少ないが、言及しているものは全てあっている。つまり、適当にまねして言っていたのではなく、意味を理解したうえで話していたのである。敗戦後、日本人はソ連兵に襲われることがあった。特に女性は、ソ連兵に会わないようにするために、家から出ないものまでいた。そんな中、F1 と F2 がロシア語を知っているというのは、期待以上の結果である。もちろん、知っているロシア語の傾向を見ても、ロシア語が堪能であったわけではないだろう。しかし、事例 7-13 で実際に「思わずその場で」使用ができたことは注目に値する。ソ連兵が言っていたことを聞いているだけでは、身に付かない。さらに、いつかは明言していなかったが、ロシア（ソ連）崩壊の 1991 年以降の出来事である。したがって、戦後 46 年以上が経ってからである。それでも「思わずその場で」使用ができたことは驚くべきことである。

この事例を通じて、日本人しかも、日本人女性がロシア語を話せた人がいたというこ

とが明らかとなった。

7.3.4. 28 年ぶりに帰国した日本人が使用した「混合型」

終戦後、多数の残留孤児、残留婦人が旧満洲国に取り残されてしまったことは周知の事実である。彼らは家族と離れてしまったことが定義になっている。だが、家族が離れ離れになることはなかったが、一家で引き揚げることができなかった者たちもいた。ここではそのような家族を「残留家族」と呼ぶ。そんな彼らにスポットライトを当てたドキュメンタリー番組が NHK アーカイブスに保存されていた。

次の事例は、昭和 17 年に旧満洲国へ渡った家族が、昭和 45 年（1970 年）に 2 家族 10 人として 28 年ぶりに日本へ帰って来た時のものである（1970/11/21 に放送されたもの）。

長野県のある村へ帰って来た彼らのために、村民から歓迎会が開かれた。その歓迎の場で赤ちゃんを抱いている女性(NHK3)と、その隣で一緒にあやす女性(NHK2)の会話が次の事例 7-14a である。歓迎会の場ではあるが、会話をしていたのは、帰国してきた家族のうちの二人でなされていたようである。また、NHK アーカイブスの中では、会話がなされたほんの数秒間のみが映され、直後に場面が切り替わっていた。番組は、彼女たちではなく、彼女の母親を中心に扱っていること、帰国を歓迎する村民の様子を注目して映し出していることから、NHK2 と NHK3 の会話が見つけられたのはこのみである。

事例の会話は、NHK2 が NHK3 に赤ちゃんに何か飲ませることができるかを尋ねているものである。

この事例の発話は筆者が聞き取り、文字起こした。文字起こし内のカタカナは中国語と思われる部分である。また、訳は筆者と中国語母語話者の二人によるものである。

事例 7-14a : 「残留家族」による「混合型」使用

| 話者 | 発話 | 筆者と中国語母語話者による訳 |
|------|-------------------------|----------------------|
| NHK2 | ショマショマなんか飲むヤンでホ イブホイ | なんか飲ませることができます か？ |
| NHK3 | ホイ | 出来ますよ |
| NHK2 | ホイ | 出来ますか |

赤ちゃんを抱いている NHK3 に対し、NHK2 が話しかけている。NHK2 が使用した言語は日本語と中国語の二つであることがわかる。実際に映像の中で使用された言葉を見ていこう。

まずは日本語の部分である。日本語は「なんか飲む」があるが、「なんか」に関しては「何か」が撥音便化したものだろう。また、次の「飲む」も特別な意味ではなく、「飲む」という意味と考えて差支えがないだろう

次に中国語の部分を見ていく。第一声の「ショマショマ」が中国語に当たるだろう。中国語母語話者によれば、「ショマ」とは“什么(Shénme)”であるという。これは多義語であり、「何か」や「どんな」、「何も」「なんでも」などの意味を持つ。直後に日本語で「なんか」と言っていることから考えると、「ショマショマ」は多くの意味の中で「なんか」の意味が適当であり、その直後に日本語でも「なんか」と繰り返したとするのが自然だろう。この事例では「ショマショマ」と「ショマ」を繰り返した形で使われているが、中国語母語話者によれば、このような繰り返しでの使用はしないという。

わかりやすくするために、発話の順番を変えて「ホイ」を先に説明する。NHK2 と NHK3 が言った「ホイ」は“会(Huì)”で、意味は「出来る」である。これは状況可能の「できる」である。また発話順に戻って、「ホイブホイ」は“会不会(Huì bù huì)”であり、意味は「できますか？」である。これは状況可能を尋ねる疑問文となる。赤ちゃんを抱いている NHK3 に対して、NHK2 が「赤ちゃんを抱いているという状況」で何かをすることができかねるかを尋ねる疑問だろう。

中国語の部分を表 7-7 にまとめた。

表 7-7：中国語部分の解説

| 聞き取り | 漢字 | ピンイン | 意味 |
|-------|-----|------------|----------------------|
| ショマ | 什么 | Shénme | 何か/どんな/何も/なんでも など |
| ヤン | 让 | Ràng | ～させる |
| ホイブホイ | 会不会 | Huì bù huì | できますか？ |
| ホイ | 会 | Huì | できる（状況可能） |

ここまで述べてきた日本語と中国語だが、中国語母語話者の助けがなければ、このような言語使用例が提示できなかつただろう。というのも、筆者は中国語がほとんどわからない。中国語母語話者と相談しなければ「音」としてでしか文字に起こせない。さらに、日本語とするか中国語とするかで迷った部分もあり、指導教官に相談した部分もあった。そこで、念のために、このような文字起こしとなった過程を記述しておこうと思う。

①ショマショマ

「ショマショマ」はこの文字を見ただけでは初め中国語母語話者はわからなかった。そこで、筆者と彼女はインターネットで検索してみた。そうすると旧満洲国時代に「ショマショマ」を使っていたとするブログがいくつか出てきた。そこにはこう記されていた。

ショマショマとは、韓国語、もしくは中国語であって、私の両親が隠語としてよく使っていた言葉です。父が満鉄の中央試験所と言うところで、頁油岩（いわゆるオイルシェール）を研究していた頃、母は、中国語を、現地の人＝教師＝から習っていたので、二人は、よく中国語を使って、他人には、分からないように意見を交換していたものです。使用人の動きが緩慢で、あまり働かない人だと、「マンマンデーだね」とか。……ショマショマとは、雑多な諸事と言う意味です。マンマンデーとは、ゆっくりだねと言う意味です

『銀座のうぐいすから』『啞然！ ICU 本館とは、旧中島飛行機の研究所だった（ヴ

オリーズ，一万田尚登，宮崎駿，秋篠宮）」：
〈<http://blog.goo.ne.jp/amesyun-goo/e/1d49f11554f399b5b950d4529fb494ee>〉（最終閲覧日
2017年12月11日）

上記のものや、『ショマ，ショマメーヨー』で何もなかった」や「ショマショマ・メーファーズである」のようなブログが出てきた（『瑞穂の国から出ておいで』）。これらがきっかけとなって、「ショマ」は“什么(Shénme)”とするに至った。

②「飲むヤン」

これは当初，筆者は日本語の「飲むやん」だと考えていた。そのため「飲むやん」と表記して中国語母語話者と考えていた。だが，「やん」の意味が分からなかった。そこで方言の可能性を考え、『方言文法全国地図』にあたった。しかし，NHK2，NHK3の親の地元長野，旧満洲国に多くいた九州を中心に見ても適当なものが見当たらない。また，否定の「やん」の可能性も考えたが，否定の「やん」の登場は比較的新しく，帰国した1970年では，その意味で使われた可能性は限りなくないに等しい。というわけで，これを分解して考えることにした。状況に鑑みても，「飲む」は「飲む」でよさそうである。「ヤン」を中国語として考えた。状況や意味から，「なんか」「飲む」「ヤン」「できますか？」で考えられたのは，「なんか飲ませることができますか？」であった。つまり使役である。使役は中国語では“让(ràng)”と“给(gěi)”がある。発音を聞くと“让(ràng)”は筆者が聞き取った「ヤン」と類似していた。

このような経緯から，「ヤン」は状況，意味と音から考え，日本語の方言ではなく，中国語の“让(ràng)”とするに至った。

③「ホイブホイ」「ホイ」

「ホイブホイ」はNHK2の発話の中で最もカタカナで表記しやすく，また中国語であると理解しやすい部分であった。そのおかげで，「ショマショマ」や「飲むヤン」よりも先に中国語の訳を考えていた。カタカナで表記しやすかったとはいえ，中国語がほとんど分からない筆者が書き起こしたものである。そのため，中国語母語話者が見ても意味が分からなかった。そこで，日本語の意味から中国語を考えてもらうことにした。その時に考えた日本語の訳は「なんか飲ませてもいいですか？」である。NHK3が抱い

ている赤ちゃんにミルクなどを飲ませたかったと考えた。そうするとこの部分は中国語で“好不好(hǎo bù hǎo)”ではないかとするコメントをもらうことができた。そうすると会話はこのようになる。

事例 7-14b : 「ホイ」を“好(hǎo)”と考えた場合

| 話者 | 発話 | 筆者と中国語母語話者による訳 |
|------|---------------------|----------------|
| NHK3 | ショマショマなんか飲むやんでホイブホイ | なんか飲ませてもいいですか？ |
| NHK2 | ホイ | いいですよ |
| NHK3 | ホイ | どうぞ |

なるほど、こちらでも意味が通るようである。しかし、ここで問題となるのが「ヤン」である。ここでは強引に「飲むやん」とし、訳は「飲ませて」としている。しかし、これでは②の通り「やん」の正体がわからない。そこで、もう一度“好不好(hǎo bù hǎo)”から離れて考えることにした。状況はこうである。赤ちゃんを抱えている女性とその隣にいる女性。赤ちゃんを抱えている女性は両手がふさがっている。だからこそ、「(代わりに) 飲ませてあげようか」という申し出だと考えた。熟議の結果、「その両手がふさがっている状況で何か飲ませることができますか」と考えることができるということに行きついた。状況可能である。そうすると「ホイ」は“会(huì)”, 「ホイブホイ」は“会不会(huì bù huì)”となり, “好不好(hǎo bù hǎo)”よりも格段に発音が類似していた。

このように状況と訳から考え「ホイ」は“会(huì)”, 「ホイブホイ」は“会不会(huì bù huì)”とするに至った。

ただし、NHK2 の「ホイ」は訳を事例 7-14a では「出来ますか」としているが、これは定かではない。なぜなら、中国語では NHK3 の「ホイ」と言った直後に繰り返すように「ホイ」とは使わないからである。音声からは落胆や驚きなど感情が分からず、これ以上の推測ができなかった。

このような経過を経て、明らかに一つの言語によって成り立っている文ではないと結論付けた。これは中国語と日本語を混ぜた言語使用なのである。これは第 5 章の文字資

料の分析でみられた「混合型」の例と似ている。文字資料はあくまで仮想の世界の旧満洲国であった。しかし、旧満洲国に残留していた者からこうした表現を、自然談話の中から実際に聞き取れたということに大きな意味がある。これは文字資料でみられる言語使用の信憑性が高まったという話では全くない。この「混合型」を使用したということに大きな意味がある。もちろん、彼女たちの帰国は 1970 年であり、終戦から 25 年経過してからである。そのため旧満洲国が存在していた当時の言語であるとは言い難い。しかし、この「混合型」の使用例は、旧満洲国の言語接触と連続体をなしていることは揺るがぬ事実である。彼らが話すこの接触言語をピジン、クレオール、混合言語などどのように分類するか、他の使用例は見られないかなど、大いに研究の余地があろう。このように、本項では旧満洲国の言語に関する研究に対して新たなデータを提示することもできた。

7.4. 言語使用のまとめ

言語使用について地域ごとにまとめてみる。

①安東

中国語学習歴のある A2 の中国語使用例は 28 例を教えてくれた。そのうちの 25 例が正しい中国語であり、3 例だけ非文であった。

日本人の日本語使用については、「九州弁と混ざった日本語」が使用されていた。具体的には「来よる」「来よった」の使用が確認できた。

朝鮮人の中学同級生も、日本語を使用していた。彼らが話した日本語もまた、A2 と変わらない日本語であったという。つまり、朝鮮人の日本語も「九州弁と混ざった日本語」であった。

終戦間際にやって来たソ連兵が、終戦直後に日本語を使用していたことが明らかとなった。ただし、「これありますか、これありますか」といった簡単な使用例しか本調査では見つけることができなかった。そのため、ソ連兵の日本語能力についてまでは明らかになっていない。

②撫順

中国語の授業の最初に中国語による号令がかけられていたが、正しい中国語になっているものの、号令としては使わないという母語話者のコメントがあった（“站起来”）。

日本人の日本語は、安東同様に「九州弁と混ざった日本語」が使用されていた。引揚げ後に感じたのは、特にアクセント面での違いが大きかったようである。

中国人の日本語使用については、中国人店員による日本語の歌と「ぬくい」という西日本の方言があったことが確認できた。これにより、撫順における日本語の接触があったことが明らかとなった。

F1 はフランス人シスターと交流があったが、そのシスターが使っていたと言及されたのは英語であった。日本語では話した記憶を持っていないという。

学校の音楽の授業内で、先生がドイツ語の音階を使っていたことを確認することができた。

③大連

D2 が言及した中国語使用例のうち、正しい中国語が 18 例、ローカルエラーの中国語が 7 例、グローバルエラーの中国語が実質 3 例であった。

中国人による中国語使用の言及例の中に、間違った中国語が存在していた。

内地からやって来た日本人が大阪方言を使用していた。そのおかげで、転校生と自身の日本語が違っていたことを自覚したことが明らかとなった。

このように地域によって言語使用例が異なっていた。同じ「九州弁と混ざった日本語」を言及していても、A2 は「来よる」「来よった」を具体例として挙げているのに対し、F1 と F2 はアクセントが違ったことを述べている。中国語の使用例の例示の数も異なれば、学校で耳にした言語も異なっていた。旧満洲国の地理的には隣であっても異なっているのである。したがって、旧満洲国の言語についての研究においては、地域ごとに特徴を確認していく必要があることが明らかとなった。

最後に、NHK アーカイブスにて、さらに地域の特定ができなかったが、残留孤児の家族による「混合型」の使用が確認された。これは今後の接触言語研究のために新たなデータを提示することができたといえるだろう。

8. 言語意識

本章では、聞き取り調査を実施したインフォーマントやNHK アーカイブスに出演していた者が、各民族の話すそれぞれの言語に対して、どのような意識を抱いていたかを分析する。

分析には、どのような枠組みで、どのような立場からの語りかを探るフレーミングとフッティング理論を用いる。

また、「各民族」と銘打っているが、本章では、育った言語環境が異なることで言語意識も異なることが容易に考えられる。そのため、聞き取り調査を実施したインフォーマントたちのような旧満洲国にいた「日本人」と、内地から転校生としてインフォーマントたちよりも後から来た「日本人」を別の「民族」として扱う。

8.1. 各民族が話す日本語に対する意識

本節では日本語に注目し、それぞれの民族が話す日本語に対してインフォーマントたちはどのような意識を持っていたかを明らかにしていく。

8.1.1. 旧満洲国の日本人が話す日本語に対する意識

旧満洲国の日本人とは、インフォーマント自身であったり、彼らの両親であったり、学校にいた友人たちのことである。彼らが話す日本語に対して、インフォーマントたちはどのような意識を持っていたのだろうか。

安東の日本語に関する事例では、2つのことを取り上げたい。1つは戦時中の、これまで指摘してきた「九州弁と混ざった」日本語へのA2の意識。もう1つは、終戦直後の回想の中で、ソ連兵に日本語を使用したことに対する考察である。

先に戦時中の事例から見ていく。安東では、「九州弁と混ざった日本語」が使用されていたことは、これまでに述べた。A2は、「九州弁と混ざった日本語」に対する意識も言及している。先にその言及されている事例8-1を見てみよう。

事例 8-1：「九州弁と混ざった日本語」に対する意識

| | |
|----|---|
| A2 | 「咲いた咲いた桜が咲いた」で俺なんか習ったんだもん、俺の姉もみんな日本語 |
| R | その教科書見て変な日本語って思ったってこと？おじいちゃんは |
| A2 | それだけじゃ通用せんって、友達としゃべってるときにな |
| R | これは今しゃべってる言葉が内地では違う |
| A2 | 違うよ、内地では違うよ、教科書の日本語と自分で日常でしゃべってる日本語九州弁と混ざった、言葉とね、安東では日本人はみんな使ってるわけだから |
| R | じいちゃんは絶対区別できないもんね、内地に行っていないから |
| A2 | 行っていないもん |
| R | それが正しい日本語だった |
| A2 | 東京弁なんて全然知らんもん、これが日本語だと思ってるから |
| R | じゃあもっと九州弁しゃべってよ、いま全然普通の日本語だもんね |
| A2 | そうだよ、それこそ安東中学のクラス会じゃあ、日本語、中学校でみんなやった日本語出てくるよ |

※（ ）内は筆者による注釈

この事例では、学校の教育を経て構築された言語意識に関するものである。国語（日本語）の授業では、「咲いた咲いた桜が咲いた」を習ったという。これは、A2 が日ごろ使っていた日本語とは「違う」と言っている。「九州弁と混ざった日本語」の使用があったことは明らかにしているが、彼にとってはその日本語ではなく、当時習った日本語が特別な意味を持っていることがうかがえる。彼は旧満洲国で教育を受けた者としてのフッティングから、「これ」すなわち「九州弁と混ざった日本語」を日本語だと思っていたと言っている。このことから、彼にとっての基本となる日本語、いわゆる母語（あるいは母方言）はその「九州弁と混ざった日本語」だという意識があることが分かる。また、教科書の日本語は「東京弁」であり、他所の方言だったのである。そして、その他所の方言であった「東京弁」はクラス会で集まった時には話される。その他所の方言を通じて、当時を懐かしむ気持ちや、旧満洲国で教育を受けた者としてのフッティング

を共有しているのだろう。このように学校で習った日本語が、彼にとって重要な道具となっているのである。

彼の言語意識には、「九州弁と混ざった日本語」よりも「学校で習った日本語」を特別な意味を持たせているということが明らかとなった。

次の事例は、A1 と A2 の父親が日本語で苦労したというフレームが語られている。A1 と A2 の父親は千葉県で生まれ育ち、その後アメリカへ渡り、日本に帰国後、旧満洲国へ行ったという当時にしてはかなり異色な経歴の持ち主である。様々な場所へ行っていたことが原因で日本語に苦労したのである。

事例 8-2 : A2 の父親が苦労した日本語

| | |
|----|---|
| A2 | 自分が東京の中学で習った標準語の日本語勉強して、アメリカに 20 年いたから、標準語が分からない、使わないんだから、日本人同士は使うよ、だから、うちのおじいちゃんは満洲の日本語、東京の日本語、木更津の日本語、アメリカの日本語、英語の教師をやっていたからこれが相当苦労したんだよ、まともな日本語じゃないとまずいから、クラスへ行って日本語しゃべるでしょ、そのときは変な日本語できないから |
| R | 確かに、教えるのに |
| A2 | 教えるのに、「来よった」「行きよった」なんて言えないもん、安東の高等女学校でやったときもだいぶ苦労したらしいんだよ、先生その日本語おかしいよって言われるから |
| R | 木更津の言葉なのにな？ |
| A2 | そう |
| R | その日本語おかしいよ、とかいわれるの？ |
| A2 | 言われると困るもん、昔の高等女学校の生徒が聞き耳立ててるんだから、英語だけでなく日本語でしゃべらんといかんでしょ、そら君の言う言葉って言うのは難しいんだよ、それでね、自分が生まれ育った言葉と生活するのに必要な言葉と、協和語の日本語といろんな日本語があるわけよ |

彼の父親は高等女学校の英語の非常勤講師であった。したがって、授業の際には「変な日本語」を話さないようにしなければならなかったという。A2 の言う「変な日本語」とは標準語ではないもの。つまり、「旧満洲国の日本語」、「木更津の日本語」、「アメリカの日本語」である。ここで言及している「来よった」「行きよった」は九州弁と混ざった「旧満洲国の日本語」だろう。彼の父親が赴任していたのは女学校で、多くの学生は安東から来ていたはずである。したがって、彼女たちもこの「旧満洲国の日本語」を話していたはずである。それにもかかわらず、教師として正しい日本語を使おうとしていたと A2 は考えている。ここからわかる A2 の言語意識は、教師は正しい日本語を話さなければならないと思っていたということである。実際、彼の父親も苦勞しているかもしれないが、本人からの聞き取り調査が行なえないのでわからない。しかし、確かに言えることは、A2 が教師は変な日本語を使ってはならないと考えていたということである。

また、「自分が生まれ育った言葉と生活するのに必要な言葉と、協和語の日本語といろんな日本語があるわけよ」という発言も興味深い。「自分が生まれ育った言葉」とは千葉県の言葉だということは疑いようがないが、「生活するのに必要な言葉」、「協和語の日本語」の指す言葉とは何なのだろうか。「生活するのに必要な言葉」は二つのことが考えられる。一つ目は、生活するためにお金を稼がなければならず、その稼ぐための仕事の時に使った言葉。二つ目は、街中や近所で周りの人が使っている言葉で、それになじむために使う必要があった言葉である。どちらにせよ、「必要」であったという意識が非常に興味深い。自然と使えるようにならなかったからこそ、そのような言語意識を持ったのだろう。

では、「協和語の日本語」が意味するものは何なのだろうか。彼は筆者から聞くまでは「協和語」という言葉を知らなかったという。もちろん、筆者の説明が十分でなかったり、誤って伝わっていたりする可能性もあるが、彼の中には「協和語の日本語」というものが存在していたのである。その日本語が指すのが「九州弁と混ざった日本語」なのか、はたまた別のものなのか大いに研究の余地があろう。いつ誰がどのようにどのような日本語を使っていたのかということを今後の課題として設けておきたい。

次の事例は会報『ありなれ』に見られた終戦直後の言語意識である。この事例を前で述べたときには、ソ連兵の日本語について注目していた。ここでは、ソ連兵ではなく旧

満洲国にいた日本人が話した日本語についての意識を取り上げる。

終戦直前（1945 年 8 月 9 日）から終戦後にかけて、旧満洲国には北からソ連兵が侵攻してきた。ソ連兵は、日本人住民から物や金を奪うことがよくあった。これはその時の回想録である。

事例 8-3：敗戦後のソ連兵による日本語

| | |
|------|---|
| 会報 1 | <p>前のように両手を上げて迎えていると、ソ連兵は、手を下ろせ、という、拳銃を手にしながら、ジロジロと私達を見ながら、その間を縫って歩く。</p> <p>一番最後にいた電報局の森さんの奥さんの前で立ち止まると、奥さんの鼻の下へ拳銃をピタリとつきつけた。そして拳銃を持たない方の指で、○印を作って見せ、</p> <p>「奥さん、これありますか、これありますか」と流暢な日本語でいう。森さんの奥さんは青い顔で「ありません」といつている。</p> <p>「ピストルの冷たい感触が身にしむようで、おまけに、銃口を動かすものだから、その気持ちの悪いこと、命が縮むようだった」というのが後での奥さんの述懐であった。</p> <p>『ありなれ』 41 号, pp.41, 上段 17 行目－中段 6 行目</p> |
|------|---|

ソ連兵が何かを奪おうとしているが、両手を上げて迎えているように、ここに出てくる日本人たちは全く抵抗しようとしていない。そして、ソ連兵が女性に対して拳銃をピタリとつきつけられても抵抗していない。終戦直後というのは、日本人が最も下の立場になっていた時であり、ソ連兵ましてや拳銃を持った相手には逆らえなかったのだろう。しかし、だからこそこでの「ありません」という日本語は興味深い。いつ殺されてもおかしくない、いわば絶体絶命の状況で、日本語をしているのである。これは、ソ連兵の質問に対して日本語で答えても通じるという意識が彼女の中にあつたことになる。もちろん、日本語で聞かれたからとっさに日本語で答えてしまった、彼女がその他の言語を話せなかったなども考えられる。だが、否定を表わすのであれば首を横に振るのでもいいだろう。それでも、彼女は日本語を使ったのである。彼女の意識の中では、「ありません」という日本語が全く通じないとは考えていなかったと考えられる。それは先に

も挙げたが、様々な要因が考えられるが、最も重要なのはその人とは初めて会ったソ連兵に対して日本語が通じるという考えを持っていたということである。さらに、この執筆者も「ありません」という言葉に対してのコメントはせず、『『ピストルの冷たい感触が身にしむようで、おまけに、銃口を動かすものだから、その気持ちの悪いこと、命が縮むようだった』というのが後での奥さんの述懐であった』と書いているように、伝えたかったのは述懐で、その日本語使用ではなかった。裏を返せば、日本語使用には特筆するほどのことではなかったのである。やはり、彼女にとっても、日本語が通じるという意識があったことがうかがえる。

このような意識の形成は旧満洲国の言語環境も少なからず影響しているだろう。旧満洲国では多くのドメインで日本語が使われていた。したがって、多民族が共生していても日本語使用が優勢だったのが普通であった。そのような環境を経験しているからこそ、日本語が出てしまったり、その日本語使用に違和感を覚えなかったりしたのである。つまり、この違和感を覚えていないという語りは旧満洲国を経験したフッティングからなされているということがわかる。そのフッティングによって、ソ連兵に対する日本語使用への違和感のなさという意識を垣間見ることができた。

戦時中には学生からみると、学校教師が正しい日本語を使おうとしていたということでは安東の事例で述べた。では、教師側はどのような意識で教育を行っていたのだろうか。事例 8-4 は旧満洲国で養護教諭を経験した F1 の話である。ここでは、正しいアクセントを覚えようとしていた様子を語っている。

事例 8-4：正しいアクセントを覚えようとした様子

| | |
|----|--|
| S | それなら日本から来た国語の先生が怒ったときなかったですか？「そんなこともできんのかお前らは」って |
| F1 | いや，そんな，怒らないけど，怒らないけど，あたしは教師用書を一生懸命見て，そのときはあー違うんだと思って，もう覚えてないけど |
| S | 教えるときに |
| F1 | うん教えるときに教師用書にはちゃんとそれを書いてあるわけ |
| R | アクセントが |
| F1 | うんアクセントが |
| S | ってことは日本でも田舎の先生は困ったんじゃないかな，田舎でまったくそれが反対だと |
| F1 | あの戦時中出たあれだと思う，その教師用書ね |

撫順でも、言語使用で述べたように「九州弁と混ざった日本語」を使っていた。彼女が「九州弁と混ざった日本語」は特にアクセントが異なっていたと述べている。A1 と A2 の父親と同様に、彼女もまた、「教師用書を一生懸命見て」正しいアクセントを覚えようとしていたのである。つまり、彼女のフレームも教師は正しい日本語を使わなければいけないというものであったことがうかがえる。

8.1.2. 内地の日本人が話す日本語に対する意識

第 6 章の言語環境、第 7 章の言語使用でも述べてきたが、彼らが話していた日本語は、内地の日本語とは異なっていた。では、旧満洲国にいた日本人には、内地の日本人の日本語がどのように映っていたのだろうか。聞き取り調査の中で言及してくれた大連と撫順の例を取り上げる。

幼稚園生であった D2 は、パッと中国語が出てくることもあったという話を教えてくれた。そんな D2 の中国語と日本語に対する興味深い言語意識があった。

まずは、事例 8-5 である。D2 が旧満洲国から帰国し、大阪に戻って来た時の話ことを教えてくれた。内地の学校で先生が話す日本語に対する意識が見られる。

事例 8-5：内地の先生が使う日本語に対する意識

| | |
|----|--|
| D2 | 先生の大阪弁がわからなくて私は困りましたね、「これ日本語か？」と思いましたね、アクセントが違うんですもん |
|----|--|

D2 は大阪へ帰国している。したがって、彼が帰国後に通った学校では、大阪方言を話す先生がいた。その先生が話す大阪方言に対して D2 は、「これ日本語か？」と思ったという。旧満洲国で話していた日本語とアクセントが全然違ったからそのように思ったのである。ここでは彼が知っている日本語のアクセントではなければ、日本語として認められなかったというフレームからの語りだが、次の事例では語彙面にも言及している。

事例 8-6：内地の友達が使う日本語に対する意識

| | |
|----|--|
| D2 | 向こうで育った人は、外地標準語なんですよ。だから東京弁に近いんです。だから大阪に帰ってきて、「それあかんやんか」と言われたときはね、何のことかと、「あかん」って「やかん」のことかと。「不好(プーハオ)」って言われたほうがよっぽどわかる。 |
|----|--|

ここで見られるのは彼が話す日本語は「東京弁に近い」ものだとするフレームである。そしてそのフレームから、彼にとっての大阪方言と中国語の相対的な位置関係が見えてくる。彼が育った場所の言語環境は、日本語が優勢ながらも中国語が出てきてしまうような環境であった。それによって、友人から言われた「それあかんやんか」という言葉は「何のことかと」と考えるのである。ここからわかるのは、彼は日本語の変種よりも中国語のほうが身近なものだととらえているということである。彼は生まれから 12 年ほど中国語を自然習得だったり、学校で学んだりして関わってきた。一方、筆者のように内地で育った者でもおよそ 10 年、英語を学んできた。しかし、英語と日本語の方言どちらが身近に感じるかと言われれば、ほとんどの人が方言だと答えるだろう。特にその方言が大阪のものであった場合には、その結果はより明白だろう。それにもかかわらず、彼が大阪方言の「それあかんやんか」に対して、『「不好(プーハオ)」』って言われたほうがよっぽどわかる」という意識を持っているというのは、これも旧満洲国を経験し

たことによる言語意識の構築と言える。

内地の人が話す日本語は「何のことか」わからないものであったという言語意識から、彼が考える日本語、中国語、大阪方言に対する相対的な位置関係が特殊なものであるということが明らかとなった。

撫順の学校には転校生がやってくることもあった。F1 や F2 の学校には東京からやって来た人、大阪からやって来た人がいたようである。そんな彼らが国語の時間に教科書を読むことがあったが、その時の感想が出身地によって異なっていた。それを教えてくれたのが事例 8-7 である。

事例 8-7：転校生の出身地によって変わる日本語への意識

| | |
|----|--|
| S | 「咲いた咲いたさくらが咲いた」も「咲いた咲いたさくらが咲いた」って言うところもきっとどこかにあってさ、それじゃだめですっていう |
| F1 | でも我々直したことないね、直されたことはないね、先生に |
| F2 | 大阪のほうから転校してくるとちょっとクスクスと笑ったりしてたからね |
| F1 | でも、それにも書いてあったけど、東京のほうから転校してきた人だと、府立のなんとかってそのころ権威があったんですよ、府立大何女とか、そこから来た人っていうのは、国語の読み方が全然違うわけ |
| R | 全然違うんですね |
| F1 | すごくきれいに聞こえるわけ、わあ優等生が来たと思って |

ここでは撫順出身者としてのフッティングから語っている。撫順出身者である F1、F2 と転校生という対比構造になっている。そして対比させているのが日本語についてである。

大阪から来た転校生が教科書を読むと、「ちょっとクスクスと笑ったりしてた」と言っているように、「おかしさ」を感じている。それに対して、大阪から来た転校生が教科書を読むと、「すごくきれいに聞こえる」さらには「わあ優等生が来た」とまで言っている。この違いは何なのだろうか。我々にとってもそうだが、彼女にとっても国語の時間に習っていた日本語が、規範的な日本語だというフレームで捉えていたのだろう。

だから、東京から来た転校生が話す東京方言、つまり規範的な日本語に近い日本語だったために、「すごくきれいに聞こえ」と感じたのだろう。そして、大阪から来た転校生が話す大阪方言は、規範的なものではなかったから「ちょっとクスクスと笑ったりした」ように、「おかしさ」を感じてたのだろう。

彼女たちは国語の時間に習う日本語、極端に言えば目標言語の日本語を話せる東京の日本人に対してはプラスに捉え、そうではなかった場合はマイナスの評価をしていたという意識が明らかとなった。

8.1.3. 朝鮮人が話す日本語に対する意識

朝鮮人が話す日本語に対して、インフォーマントたちはどのような意識を持っていたのだろうか。ここでは A1 と X1 の例を取り上げる。

A1 は牧師の娘であったため、毎週日曜日には礼拝に参加していた。その礼拝には朝鮮人も来ており、日ごろから朝鮮人との交流があった女性である。

彼女は、彼女が考える当時の朝鮮人にとっての日本語の意味を教えてくれた。

事例 8-8：働くための日本語

| | |
|----|--|
| A1 | 朝鮮の人ね、あの時日本が統治してましたからね、みんな日本語はもう、日本語ができなかったら働けませんでした |
|----|--|

A1 は朝鮮の人は「日本語ができなかったら働けませんでした」と考えていたようである。つまり彼女は、朝鮮人にとって日本語は働くために必須なものとしてフレーミングしていたのである。働くということは生活していくうえで、ひいては生きていくうえで欠かせないことである。彼女のフレームを言い換えれば生きていくためには日本語ができなければならなかったということになる。それだけ、朝鮮の人にとっては日本語が重要なものになっていたととらえている A1 のフレームが明らかとなった。

次は新京の事例である。X1 は朝鮮人と会話した時のことを教えてくれた。その時の朝鮮人の日本語の発音が違っていたことを言及している。

事例 8-9：語頭の「バ」が言えない朝鮮人

| | |
|----|---------------------------------|
| X1 | こういう言葉があるんだよ「朝鮮朝鮮パカにするな」「パカにすな」 |
| R | 「パカ」なんですね |
| X1 | 「バ」が発音できないんだよ、昔の韓国人は |

事例前の筆者との会話で X1 は、朝鮮民族の人が当時「朝鮮」「朝鮮」と言われることで馬鹿にされているように感じていたとようだと教えてくれた。その流れでの事例 8-9 である。

X1 は当時の朝鮮人（韓国人）は、『バ』が発音できないんだよ』と言っているように、「バ」が言えず「パ」になっていたことを述べている。彼はこれによって朝鮮民族の日本語は間違った発音をしていたというフレームを持っていることがわかる。

またこの事例では「昔の」という言葉も、彼が経験した言語環境を見るうえでいいヒントになる。彼が指す「昔」とは体験談を語っているように旧満洲国だろう。旧満洲国には朝鮮民族の人もいたが引揚げ後の内地では、朝鮮民族の人と交流する機会も減ってしまい、そのために今ではなく「昔の」という表現を使用していることも推測できる。朝鮮民族の人が語頭の「バ」が「パ」になってしまうのは、母語干渉によるもので「今」も「昔」も変わらないからである。旧満洲国という多民族社会を経験していても、内地で能動的に継続させることはしなかったことが示唆される。

8.1.4. 中国人が話す日本語に対する意識

日本人以外が使った日本語としてまずは朝鮮民族が話す日本語に対する言語意識を述べた。そこで明らかとなったのは、働くために必要であったと見られていたこと、間違った日本語を使っていたということである。では、中国人が使っていた日本語に対してはどのような意識が見られるのだろうか。

8.1.4.1. 安東

中国人の日本語を使用していたことに対して、A1 の意識が表れているのが次の事例である。

街中で北京官話を使用したかという質問に、A1 は使わなかったということを教えてくれた。この北京官話の不使用については言語ドメインの章ですでに述べている。では、ここで見られる言語意識とはどういうものか、事例を見ていこう。

事例 8-10：中国人が覚えてくれた日本語

| | |
|----|---|
| R | 北京官話を街中で使うことはあったんですか？ |
| A1 | 日本語がなんでも通じるから、 |
| R | じゃあほとんど使わない |
| R1 | 使わなくても済んだわけ |
| R | 結局じゃあ勉強したものの |
| R1 | そうそう勉強したものの、使う、使う必要なかったね、それだけ日本語覚えてくれたわけね |

A1 は北京官話を使用したかに対して、「使わなくても済んだ」と言っている。これは、本当なら日本人は北京官話を使うはずなのに使わなかったというフレームだろう。だとすると、なぜ使わなかったのか。それは、「覚えてくれた」からである。本来ならば、日本人が北京官話を使わなければならないのに、その代わりに中国人が日本語を「覚えてくれた」。だから「使わなくても済んだ」という発言に至ったのだろう。

A1 は中国人が日本語を覚えてくれたおかげで、日本人が北京官話を話さなくても済んだと考えていることが分かった。つまり、中国人の日本語使用に対しては、感謝をしているような意識を持っていることが明らかとなった。

8.1.4.2. 撫順

中国人が話す日本語に対する意識を垣間見ることができたのが事例 8-11 である。歌をうたいながらパンを売りに来た中国人や、日本語で声をかけながら栗を売っていた中国人がいたという。彼らの使った日本語に対する意識が見られる。

事例 8-11：日本語の語彙に対する意識

| | |
|----|---|
| F1 | 中国の人は使ってもらうために入り込む人とお商売の人、物売りとか、物売りで中国の人が来るのはね、日本人の経営するパン屋さんに働いていると思うんですけど、パンを売る人がいて、「アンパン、さとパン、生菓子、ようかん♪」って言って中国の人が売るに来てた、 |
| F2 | さとパンっていうのがパトパンって聞こえる |
| F1 | 冬になると、「栗ぬくい」って言って、あったかい栗、焼き栗、日本語を使ってるつもりだから「栗ぬくい」って掛け声かけて、一定の場所で焼きながら、汚い布団をかぶせて、栗が冷めないように |

F1 がうたった「アンパン、さとパン、生菓子、ようかん♪」に対して、F2 は「さとパンっていうのがパトパンって聞こえる」と言っている。F2 は、さとパンがパトパンに聞こえただけで子音の間違ひはあったものの、日本語として間違っではないと考えていたことがうかがえる。

そして F1 は、『栗ぬくい』って言って、あったかい栗、焼き栗、日本語を使ってるつもりだから」と言っている。この「日本語を使ってるつもり」というのは注目すべきだろう。「栗」は「栗」で問題はない。しかし、「ぬくい」は彼女にとって「日本語使ってるつもり」の言葉だったのである。直後に「あったかい栗、焼き栗」と補足説明しているように「ぬくい」は説明が必要な日本語のつもりの言葉だと考えていることが分かる。だが、「ぬくい」は日本語の方言であり、れっきとした日本語である。「ぬくい」は富山県、石川県、滋賀県、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県で使われる（図 8-1）。

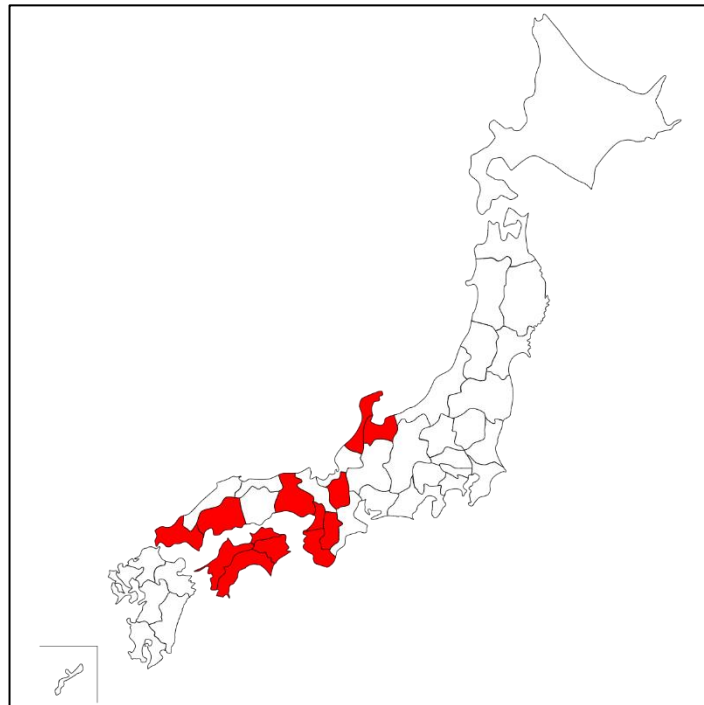


図 8-1 : 「ぬくい」 使用地域

F1 は自身の日本語を「九州弁と混ざった日本語」という意識があった。しかし、中国人の言語使用を見るとその他の地域からの影響も十分に考えられる。だが、自分の周りが実際に九州方言の影響しか受けていないような環境だったとすると、確かに「ぬくい」は日本語のようではあるけれど、日本語のつもりで言っているものと聞こえるかもしれない。この推測から考えると、彼女は自身の持つ語彙でなかった場合、言い換えれば中国人が知らない語彙を使っていた場合、正しくないものとする意識を持っていた可能性が考えられる。また、学校では正しい日本語を使おうとしていたことも鑑みると、彼女は彼女の中の「正しい日本語」への規範意識が強かったことが示唆される。

8.2. 各民族が話す中国語に対する意識

本節では中国語に注目し、それぞれの民族が中国語に対してどのような意識を持っていたかを明らかにしていく。だが、日本以外の他民族が話す中国語については言及があった個所もあるが、言語意識までは読みとることができなかった。そこで、旧満洲国の日本人と内地の日本人の中国語を言及していく。

8.2.1. 旧満洲国の日本人が話す中国語に対する意識

旧満洲国の日本人にとって中国語はどのようなものとしてとらえられていたのだろうか。安東の例を2つと大連の例を取り上げていく。

8.2.1.1. 安東

まずはA2の事例である。ここでは「カンカン」という言葉から中国語に対する意識を読み取っていく。

「カンカン」は終戦という彼らにとって最も大きな出来事によって二つの意味で使われることとなった。これは立場の逆転に伴う意識の逆転によって生まれたのである。

事例 8-12 : 「カンカン」という語が二つの意味があったとするフレーム

| | |
|----|--|
| R | 現地の人，中国の人「カンカンよろしいあるか」 |
| A2 | これいいよ |
| R | 言ってた？ |
| A2 | うん言ってたよ |
| R | 言ってた |
| A2 | 「カンカン」うん，「見ろ」っちゅうやつだよ「カンカン」って，ほらみんな業者が来るだろ |
| R | うん |
| A2 | な？これなんか売り歩くときみんな「カンカン，カンカン」言ってたよ，「見てください」っていうわけだよ，「ご覧ください」っちゅうやつだよ |

A2は「カンカン」という言葉の意味を「見ろ」（命令）と「見てください」，「ご覧ください」（謙譲）と説明している。「カンカン」で命令と謙譲を表していたと考えているのである。なぜこのような対峙するような意味となっているのだろうか。彼の言葉の中にその答えのヒントがある。『「見ろ」っちゅうやつだよ』『カンカン』って，ほらみんな業者が来るだろ』，「売り歩くときみんな「カンカン，カンカン」言ってたよ」，「見てく

ださい」っていうわけだよ」と言っている。戦争が終わるまでは、訪問販売の中国人が家に来て中国語で会話をしていたことを言語ドメインの章で述べた。その時に「カンカン」という言葉も使われ、彼が考えた意味は「見ろ」だったのだろう。訪問販売員のことを彼は押し売りと評することもある。つまり、強引だったのだ。だから訪問販売員の「カンカン」は「見ろ」という意味だと考えたのだろう。しかし、戦争が終わると、彼は自宅の家財道具を売ってお金を稼がなければならなくなった。皮肉なことに、買ってもらう相手はそれまで訪問販売員していた中国人である。そんな時に A2 は「カンカン」という言葉を使っていたのである。買ってもらわなければならない立場になった時、同じ「カンカン」という言葉でも彼が意図していたのは「見てください」、「ご覧ください」（謙譲）だったのだろう。つまり、彼自身の経験から「カンカン」という言葉に対する意識が全く逆転したのである。

次の A3 の事例は中国語自体に対する意識である。彼女は中国語を難しいものと考えていたことを教えてくれた。

事例 8-13：中国語を難しいものとするフレーム

| | |
|----|--|
| R | 日本語の授業みたいのはあったんですか？いわゆる国語の授業みたいのは |
| A3 | あるある |
| R | それはどうでしたか？ |
| A3 | そのときはすんなり受け入れてたよ、中国語の授業のほうが難しかったよ、やっぱり |
| R | 難しかったですか |
| A3 | うん、外国語だもん、こっちにしてみればね |
| R | 中国語は勉強したかったですか？ |
| A3 | あんまりねえ、必要がないもん、本を読むわけじゃないし |

彼女は中国語の授業に対して難しかったとするフレームを持っている。その理由は外国語だからと述べている。言語ドメインを見てみると、旧満洲国では日本語だけでも生

きていくことが可能そうである。彼女は生活のために中国語を覚えなければならなかったとは全く考えていなかったのである。つまり、彼女にとっての中国語は CSL(Chinese as a Second Language)ではなく、CFL(Chinese as a Foreign Language)であった。さらに彼女は「必要がないもん、本を読むわけじゃないし」とも述べている。中国語が必要になるのは「本を読むとき」という意識があることがうかがえる。彼女にとって中国語は CFL であり本を読むためのものだったということが明らかとなった。

8.2.1.2. 大連

次の事例は言語ドメインの章でも言及したものだが、ここでは中国語をどのようにして学んだかという意識について述べていく。言語ドメインで明らかにしたように彼は幼稚園でパッと出てきた中国語を使うことがあった。そのため、中国語は幼稚園の言語環境によって覚えたものだと思われるかもしれないが、そうではなかったという。

事例 8-14：中国語を日本人の大人から学んだというフレーム

| | |
|----|--|
| D2 | あの、学校に中国人がおりましたんでね、あの、学校が日本人学校ですけど、中国人それから今でいう朝鮮人韓国人ですか、いましたから |
| R | みなさん一緒に同じ学校だったんですか？ |
| D2 | 同じクラス、それからあの、幼稚園入ってて幼稚園にも中国人の友達がいましてよ、その連中が、我々呼びかけるときはパッと日本語出てこない、中国語でやるんですよ、「小孩来来」って言うんですよ、だから我々もね、ついうっかりっていうか、あの日本人がだいたいそうでしたけど、「お金がない」なんて言うときは「錢没有」って言うんですよ、で、向こうはね、わからんでもないらしいですよ、ね、「没有錢」って言わないと通じないんですよ |
| R | 語順が日本語の語順になっている |
| D2 | はい大概そういうように日本人は言うわけですよ、大人につられて「没有錢」って言わないで「錢没有」「錢没有」って、それが不思議っていうか、それでも通じるから不思議ですよ |

D2 は非文の中国語を使っていたということを知っていた。当時からその意識があっ

たかはわからないが、その非文の中国語は日本人の「大人につられて」言っていたという。幼稚園に中国人の友達がいたにもかかわらず、日本人の大人から中国語を学んでいたのである。なぜ母語話者が周りにいるのに非母語話者から学んでいたかという理由はいくつも考えられる。中国人と接するよりも日本人の大人のほうが接する時間が長かった、自宅でも中国語をよく使っており両親が言っていた中国語に影響を受けたなど推測すればきりが無い。しかし、彼がどうして日本人の大人から学んだという意識があるかについては、考えられる理由は少ない。なぜなら、その彼が使ったと言及したものは間違った中国語だったからである。母語話者であれば、語順の間違いをほとんどしないはずである。このような語順の間違いは第二外国語学習者だからこそのもので、だからそうするのは日本人だと考えているのだろう。言い換えれば、彼は間違った中国語を話すのは日本人であるというフレームを持っているのである。ただし、日本人が間違った中国語を話すのではなく、間違った中国語を話すのが日本人ということである。このように、間違った中国語に対する言語意識が明らかとなった。

8.2.2. 内地の日本人が話す中国語に対する意識

内地の日本人が話す中国語について言及してくれたのは、D2のみであった。事例 8-15 はそのことを教えてくれた部分である。

彼の学校には大阪から来た人がいた。その転校生は中国語に困っていたという。

事例 8-15：旧満洲国の人と内地の人の中国語に対する意識の違い

| | |
|----|--|
| R | 内地から来た人はいなかったんですか？ |
| D2 | おりましたおりました，その人たちが一番困ったのは，授業に支那語，中国語があるのがね，まったくわからんって言ってました，「こんなに簡単なことどうしてわからんのだ」って言ってました |

内地から来た転校生は授業に中国語があったことに困っていたというフレームを持っている。もちろん、それは当然のことかもしれない。なぜなら、大連では内地の言語環境よりもはるかに身近に中国語があり、それを転校してきて初めて覚えなければならなかったからである。旧満洲国の日本人は中国語に慣れており大きな差がある。それだ

けにやはり中国語の授業は困るものだっただろう。

ここでの発言で述べたかったことはもう一つある。D2 が言った「こんなに簡単なこと
とどうしてわからんのだ」についてである。中国語は幼稚園の時から話しているように
身近に中国語あった。だからこそ彼にとって中国語は「簡単なこと」であった。このよ
うに、旧満洲国の日本人と内地の日本人との間で、中国語に対する意識が全く異なって
いることが明らかとなった。

8.3. 各民族が話す他言語に対する意識

本節では日本語と中国語以外の言語に注目し、それぞれの民族が日中以外の言語に対
してどのような意識を持っていたかを明らかにしていく。

8.3.1. 旧満洲国の日本人が話す英語に対する意識

あえて「話す」としてゐるが、その話すことが叶わなかった者が会報の中にいた。次の
事例 8-16 と事例 8-17 がその話すことが叶わなかったことに対してどのように思ったか
ということが書かれている。この 2 つは同じ筆者である。

事例 8-16：英語の授業をうけたかったとするフレーム

| | |
|------|--|
| 会報 2 | 靴は牛革がなくなり豚皮でつくられた。豚皮は表にブツブツと毛穴が あり、牛革より硬くて足に馴染まず、あこがれていた女学生の服装と のあまりの差に悲しかった。授業も、英語は敵国語だからと、一年生 の一学期でなくなってしまった。頭の柔らかいうちに英語を習えなか ったので、今でも横文字アレルギーだ。 『ありなれ』 58 号, pp.78, 中段 78 行目ー下段 5 行目 |
|------|--|

事例 8-17：英語の授業をうけれずがっかりしたとするフレーム

| | |
|------|--|
| 会報 2 | 楽しみにしていた女学校生活は入学したらセーラー服廃止になり、英 語の授業はなくなりがっかりした。 『ありなれ』 60 号, pp.8, 下段 3 行目ー5 行目 |
|------|--|

事例 8-16 ではあこがれていた女学校の生活が送れなかったということが書かれており、そのあこがれの中に英語の授業も入っていたことがわかる。そして事例 8-17 では、あこがれが叶わずがっかりしたと書いてある。戦争が激しくなるにつれ、敵性語を使っではいけなくなった。そのため、学校では英語の授業を取りやめることになったのである。そのせいで彼女は英語の授業を受けることができず、がっかりしていたのである。

彼女があこがれ、がっかりしたということは、彼女は英語を学びたかったということである。つまり彼女の英語に関する意識の中に「敵性語だから学んではいけない」といったフレームは持っていなかったのである。当時の社会的状況を考えれば、「学んではいけない」という考えになってもおかしくはない。しかし、彼女は学びたいと考えていたというのだ。彼女の意識の中では英語に対してプラスの評価をしていたということ、そういう人が当時いたということが明らかとなった。

8.3.2. フランス人が話す英語に対する意識

次の事例も言語ドメイン、言語使用でも述べたものである。教会にいたシスターと遊んでいた時に使われた英語に対する意識をみていく。

事例 8-19：フランス人が話す「1, 2, 3」の発音が違ったとするフレーム

| | |
|----|--|
| F2 | そこの教会のひとはあのヨーロッパっていうか、ヨーロッパ系の、シスターだったね |
| F1 | シスターだったね、みんなカトリック教会は |
| S | どこから来てるの |
| F1 | フランスからも、アメリカからもいたと思うけども、フランスの人はずっと残っていたけど、アメリカ系の人はすぐに消えた |
| S | フランスの人は昭和 20 年の 5 月までいたんですよ |
| F1 | ああ、ああ |
| S | 日本とフランスが戦争したのは 20 年の 5 月になってからなんですよ |
| F1 | へえ |
| F2 | へえだって |
| F1 | あたしなんか遊びに行って、ピンポンしたりしてた、シスターのもとへ、その時にその、何対何ってこう言うじゃん、それがあたしなんかワン、トゥー、スリーと思っているのが、トゥリーって聞こえるのよ、トゥリーって発音違うなあと思って、その人がフランス人だったんじゃないかなって思うのよ |

F1 は「1, 2, 3」は「ワン、トゥー、スリーと思ってい」たと言い、一方フランス人シスターの「3」は「トゥリーって聞こえ」たという。彼女は転校生の日本人の日本語を、目標言語に近い場合は「きれい」に聞こえたというフレームを持っている。そして、彼女は受験クラスに入り英語も学習していた（6.5.2 を参照されたい）。つまり、ここで彼女が言わんとしていることは、フランス人シスターの「3」が「トゥリーって聞こえ」たということではなく、発音がきれいに聞こえたということではないだろうか。彼女は目標言語を話す人に対しプラスの評価をするフレームを持つ傾向にあった。そしてフランス人の母語が英語ではないとしても、ヨーロッパの人が話す英語に対してプラスの評価を持っていたことは十分に考えられる。社会的状況に関係なく、彼女もまた、英語に対してプラスの評価をしていたということが示唆される。

8.3.3. 旧満洲国の日本人が話すドイツ語に対する意識

ドイツ語の使用については、言語ドメイン、言語使用でも述べたが、ここでも同じ事例を言語意識面から探っていく。

事例 8-18：ぶってる先生が使うドイツ語

| | |
|----|--|
| F1 | 「ツェーデーエーエフゲーアーハーツェー」だったのよね |
| S | ドイツ語 |
| F1 | そう、ふっと出るね、何十年も言ってないのに |
| R | ドイツ語、ドイツ語も向こうで使ってたんですか？ |
| F1 | それを使ってたときもある、音楽の先生によって、ぶってる先生が |
| R | 日本人の方なんですか？ぶってる先生 |
| S | 俺は偉いんだぞ、ドイツ語知ってるって |
| F1 | いや、音楽の先生なんて、ほら、出た、師範学校の音楽の先生じゃダメで、 本当の |
| R | 本場で習ってきた |
| F1 | 今でいう音大、女学校の先生になんかなると音大出の人が音楽専門の先生 だったから |

音楽の授業でドイツ語を使った先生に対して彼女は「ぶってる先生」と言っている。「ぶってる先生」ということは、決していい評価ではないことが分かる。では、何に対してよくない評価をしているのだろうか。それはドイツ語に対してではなく、知識の自慢に対してであろう。彼女は女学校にいた先生が「師範学校の音楽の先生じゃダメで」、「音大出の人が音楽専門の先生」だったという。その先生が勉強してきたということを、ドイツ語を通じて自慢してきたのである。そのことに対してマイナスの評価を下していたのである。つまり、彼女にとってドイツ語は、「ぶってる先生」が知識自慢のために使ったものだととらえていることが分かる。

8.3.4. ソ連兵が話すロシア語に対する意識

ソ連兵が話すロシア語に対する言語意識はどのようなものだったのだろうか。次の事例では、家の中から聞いたソ連兵が話すロシア語について述べられてものである。

事例 8-19：ソ連兵が話すロシア語がすごいとするフレーム

| | |
|----|--|
| F2 | ロシア人の兵隊歌う、合唱しながらね、うまいんだから、うまいんだよね |
| F1 | 防空カーテン閉めてもうちょっと落ち着いたとき、お風呂に入ったら、うちの前を、列をなして、軍曹みたいな下士官が一人ついて、ワンツースリーじゃないけど、「なんとかかんとか」っていうと、一斉に四部合唱歌うわけ、 |
| F2 | なんとかスリーっていったような気がするのよね、なんとかスリー |
| F1 | 一、二、三か知らんけどね、そしたら四部合唱でね、無伴奏なのに、ロシア人ってすごいなと思ったね、「えっこんなの聞いてて、もしもうちに入ってきたら大変だ」と思って、慌ててお風呂出た覚えある |

F1 と F2 は自宅からソ連兵のロシア語を聞いていた。なぜなら、ソ連兵は当時お金や物を奪ったり、住民を襲ったりと日本人にとってはとても安心して一緒にいられるという関係性ではなかったからである。では、そんな彼らが話すロシア語についてどのような意識を持っていたかという点、意外にも「合唱がうまい」や「無伴奏なのに、ロシア人ってすごい」といったかなりプラスにとらえていたことが分かる。ソ連兵自身には「『えっこんなの聞いてて、もしもうちに入ってきたら大変だ』と思って、慌ててお風呂出た」と言っているように襲われる危険性も考えている。しかし、殊ロシア語に関してはプラスの評価を下している。F1 は日本語や中国語、英語、ドイツ語それ自体にはマイナスの評価はしていない。つまり、その多言語環境に適合し、様々な言語と向き合ってきているのである。

この事例を通じて、F1 のように、多言語環境を享受していた人もいたということが明らかとなった。

8.4. 言語意識のまとめ

本章では言語ごとに、それぞれの民族が話していることに対する意識を探って来た。ここで一度、それを地域ごとに確認したい。

①安東

日常的に使う日本語と学校で習った日本語と異なっていたために、同窓会では学校で習った日本語が話されることもあるという。これは当時を懐かしむ気持ちや旧満洲国で教育を受けた者としてのフッティングを共有していると考えられる。そのことから、彼にとって学校で習った日本語が、重要な道具となっていることが明らかとなった。

「自分が生まれ育った言葉」「生活するのに必要な言葉」「協和語の日本語」といった日本語の中でも複数あったとする意識を持つ者がいることがわかった。

他民族に対して日本語使用が当たり前であった安東で、旧満洲国へ入って来たばかりのソ連兵に対しても日本語が通じるという意識を持つ者がいた。

朝鮮民族にとって日本語は、働くために必須なものとして考えていた。

A1 は中国人が日本語を覚えてくれたおかげで、日本人が北京官話を話さなくても済んだという意識を持っていることが明らかとなった。

終戦を迎え日本人の地位が逆転したことにより、言語意識が逆転した例が明らかとなった。

中国語が必要になるのは「本を読むとき」という意識があることが明らかとなった。

英語に対してプラスの評価をしていた人が、当時いたことが明らかとなった。

②撫順

F1 は、教師ならば正しい日本語を使わなければならないという意識があった。

彼女たちは国語の時間に習う日本語を話せる東京方言話者に対しては肯定的に捉え、そうではなかった場合は否定的な評価をしていたという意識が明らかとなった。

彼女は自身が知る語彙でなかった場合、正しくない日本語とする意識を持っていたことが示唆された。

社会的状況に関係なく、彼女もまた、英語に対して肯定的な評価をしていたということが示唆される。その一方で、彼女にとってドイツ語は、「ぶってる先生」が知識自慢

のために使ったものだととらえている。

F1 は日本語や中国語、英語、ドイツ語、ロシア語それ自体にはマイナスの評価はしていない。つまり、その多言語環境に適合し、様々な言語と向き合ってきているのである。F1 のように、多言語環境を享受していた人もいたということが明らかとなった。

③大連

大連で育った彼は、日本語は日本語でも大阪方言が分からなかった。さらに、大阪方言よりも中国語のほうが分かりやすいとする意識さえも持っていた。つまり、中国語のほうが身近な存在として考えていたということが明らかになった。

彼は間違った中国語を話すのは日本人であるというフレームを持っていることが明らかとなった。

旧満洲国の日本人と内地の日本人との間で、中国語に対する意識が全く異なっていることが明らかとなった。

このように、言語意識の面でも地域による差があることがわかった。

9. 言語とアイデンティティ

本章では、データの中にみられた言語とアイデンティティについて述べていく。

彼らにとって旧満洲国という言語環境で育ったことがどのような影響を与えていたのだろうか。まさに言語に関連するもの、彼らの話す言葉、例えば移動動詞を「来る」を使うか「行く」を使うかなどから、彼らのアイデンティティや引揚げ（帰国）後にどのような影響を与えていたかを明らかにしていく。

9.1. 安東におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ

A1 の事例から取り上げていく。旧満洲国の安東では、多くのドメインで日本語が使用されていた。それゆえに、自身が属するのがどの民族であったかが言語によって判別しにくそうである。しかし、A1 は日本語で話せば民族がわかると言っている。つまり会話によって日本語母語話者としての自分を確認することができたことがうかがえる。では、日本語だけが、自身のアイデンティティを確かめる術だったのだろうか。彼女は当時の生活を振り返り、別の観点からも確認できていたことを教えてくれた（事例 9-1）。

事例 9-1：日本語と仕事によるアイデンティティの確認

| | |
|----|---|
| R | 買い出しに行った（先で）、満人の人が、たとえば韓国の人とかもいたみたいですけど |
| A1 | 韓国もいましたけどね |
| R | そういう方々も、日本語ですか？ |
| A1 | そうです、そうです、日本人に対しては全部日本語 |
| R | 日本人ってわかるんですか見たら |
| A1 | わかるんですよ、すぐわかります |
| R | 服装とか？顔？ |
| A1 | 服装なんかは全部変わらないですけど、お話が日本語でやりますからもうすぐにね、支那語使いません、日本語で全部 |
| R | 日本語で |
| A1 | それだけね結局あの日本人がその時代は日本人がレベルはちょっと上で、満人のほうがみんな下仕事は全部してたんですよ、道路掃除とかね |

※（ ）内は、内容を分かりやすくするために筆者が挿入したもの。

A1 は他民族と話すときは全部日本語であると言っているが、その話し方には違いがあったという。日本語を母語とする彼女自身はその違いを敏感に感じることができ、自身が「日本人である」ということを確認することができただろう。しかしながら、確認方法は言語以外にもあったことが考えられる。それは仕事である。彼女は、「満人のほうがみんな下仕事は全部してたんですよ、道路掃除とかね」と言っている。言い換えれば、日本人は道路掃除のような下仕事をしなかったのである。この下仕事をしなかったことによって、彼女は日本人のレベル（地位）が上であるというフレームを持つようになった。そして、当然のことながら彼女自身もその下仕事の経験はない。そうして、下仕事をしない日本人としてのアイデンティティを構築していったのだろう。このことの裏付けと、その「日本人」というアイデンティティが単なる「日本人」ではなかったということが次の事例で語られている（事例 9-2）。

事例 9-2：掃除する日本人に対する驚いたというフレーム

| | |
|----|--|
| A1 | 日本に帰ってきてね, 日本の人が掃除したり, トイレの掃除なんかしたり, 駅で働いてるの見たら, へえーって, そんなのみんな満人がやってるからね, 日本人ってこんなことまでしなきゃいけないのかなって思いましたよ |
|----|--|

まずは、移動動詞に注目してみよう。最初に「日本に帰ってきてね」という言葉を使っている。つまり、本来いるべき場所は旧満洲国ではなく、内地であったという意識が読み取れる。したがって、ここでのフッティングは「日本人」ということになるだろう。だが、前述したように、単なる「日本人」ではない。その直後の発言からそれがうかがえる。「日本の人が掃除したり, トイレの掃除なんかしたり, 駅で働いてるの見たら, へえーって」という感想を述べている。つまり、彼女が知らない日本人がそこにいたのである。彼女の知る日本人とは、下仕事をしない日本人であった。それが引揚げ後に下仕事をする日本人を見て驚いている。つまり、彼女の思う日本人とは乖離しており、内地でしか育ったことがない日本人とは、別の日本人としてのフッティングからの発言なのである。しかしそれでも、彼女は日本に帰って来たからにはその日本人に順応していこうという姿勢が読み取れる。「日本人ってこんなことまでしなきゃいけないのかなって思いましたよ」ということは、「日本人」ならばそのような仕事もしていく必要があると考えたのだろう。

ここまでの彼女のフッティングからみれば、この事例でのアイデンティティは「旧満洲国出身の日本人」ということになるだろう。そして、引揚げ後の生活では、「旧満洲国出身の日本人」というアイデンティティを持続けるのではなく、内地の日本人へ順応していこうという姿勢が見られた。その結果次のような発言もするようになっている。

事例 9-3：日本に「来ていた」牧師

| | |
|----|--|
| A1 | 年にいっぺん 10 月に、日本で牧師の会がありましたから。1 年にいっぺんは日本に来ていましたね、それは日本にいる牧師が全部集まって |
| R | 戦時中ってことですね？ |
| A1 | 戦時中もずっと |
| R | 戦時中に日本に帰れる人がいたってことですね |
| A1 | それをね、楽しみにしていましたよ。うちのパパは |

この発言が想定している時期は、旧満洲国にいたときである。それにもかかわらず、彼女は「来ていました」という言葉を使っている。「行っていました」ではなく、「来ていました」なのである。もし、「行っていました」ならば、旧満洲国にいる私からのフッティングと言えるが、「来ていました」は内地にいる私からのフッティングである。したがって、ここでのフッティングは「旧満洲国の日本人」ではなくなっているのだ。このように、引揚げ後からの生活によって、「旧満洲国出身の日本人」ではなく「内地にいる日本人」としての語りができるようになっていく。彼女のアイデンティティも同様で、旧満洲国にいたときには、地位が高く日本語を母語とする集団という意味での「日本人」というアイデンティティを持っていたが、引揚げ後にはその「日本人」から「内地の日本人」に順応し、「旧満洲国を経験したことがある日本人」というアイデンティティを持っているということが明らかとなった。

しかし、会報『ありなれ』の中に現れたアイデンティティは「内地の日本人」に順応した彼女とは真逆のものであった。

次の事例 9-4 は、35 年ぶりに安東に訪れた男性の記録である。彼は日本での生活に対して、特別な感情を抱いていることを述べている。

事例 9-4：“日本に來ている” 気持ち

| | |
|------|--|
| 会報 3 | <p>終始至るところで“同郷の友人”として温かい心で迎えてくれたことは感激であった。</p> <p>(中略)</p> <p>中国探訪で痛感したことは三十数年も生活したのに中国語もろくに話せないということである。植民地の中の日本人町でだけ生きてきたためであろうか。中国で生活したというだけで、中国人の本当の生活も心も、何も知らなかったことを改めて思い知らされ、複雑な心境である。</p> <p>戦後 50 年、日本での生活の方が、遥かに長くなったというのに、いまだに“日本に來ている” 気持ちが抜けない。</p> <p>『ありなれ』45 号，pp.7，下段 3 行目－20 行目</p> |
|------|--|

彼は「終始至るところで“同郷の友人”として温かい心で迎えてくれたことは感激であった」と述べ、そのように接してもらったことをうれしく思っている。そして、「戦後 50 年、日本での生活の方が、遥かに長くなったというのに、いまだに“日本に來ている” 気持ちが抜けない」とも言っている。換言すれば、彼にとって日本は外国なのである。つまり、自分がいるべき場所ではないという気持ちがある。この記述だけでは順応しようとしていたのかまではわからない。だが、明らかに順応できなかった様子が見ええる。

このように

安東の事例では、「内地の日本人」へ順応していこうとし順応できたものがある一方で、順応できなかった者もいることが明らかとなった。

9.2. 撫順におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ

A1 の事例では彼女の語りを通じて、言語や仕事によって自身をどのように捉えているかを明らかにした。撫順の事例では F1 と F2 の語りを通じて、各民族に対してどのように考えているか、そして彼女の帰属意識がどのようになっているかを明らかにする。

事例 9-5 では、撫順にいたときに見た光景と帰国後に見た光景が同じであったが、そ

れを見て驚いた様子を語っている。

事例 9-5：日本人はお行儀がよいとするフレーム

| | |
|----|--|
| F2 | マクワウリなんて、なんて言って売って来たんだろうね |
| R | 枕？ |
| F2 | マクワ |
| R | マクワ |
| F2 | 黄色いウリ，メロンのこんな，メロン系の |
| F1 | 甘い，あのウリってね，九州にはあったね，撫順は特別美味しかったんだって |
| F2 | あ，そうだったんだ |
| F1 | これぐらいのウリでね，果物系の方，野菜系のほうは奈良漬けなんかにするでしょ， |
| F2 | ウリだね，ウリ |
| F1 | あれも加工で買ってたからね，うちは |
| F2 | あのねふつうは切って皮剥くでしょ日本人，（そこで）売ってるおじさんがねパッと膝のところにその丸いのポンと当てて，半分にパッと割って，パッパって地面に振りつけると種がきれいに取れてて，パクっと食べる，それがおいしそうに見えたわけ |
| R | 豪快ですね |
| F1 | でもあんなのはシナ人しかないって思いこんでたら，引揚げてきて，長崎の島原鉄道に乗ったら，日本人がそれやってたの見て，「えっこの人日本人！？」って，それから，内地に帰ってきてびっくりしたのは，ステテコ，九州なんかはあったかいから，ズボンじゃなくてステテコはいたまま自転車こいで，「あら，あの人日本人？」って |
| R | 服装はなんか違ったんですかね？ |
| F1 | そんなあのなんていうかね，お行儀の悪い人は日本人ではないって思い込んでたからね |

※（ ）内は筆者が挿入

この事例では彼女たちが、日本人とはかくあるはずだと考えていたというフレームが見えてくる。その例がマクワウリ、服装である。マクワウリの話では、「パッと膝のところにその丸いのポンと当てて、半分にパッと割って、パッパって地面に振りつけると種がきれいに取れてて、パクっと食べる」という食べ方の話をしている。直後に筆者が言っているように豪快な食べ方である。F1 にとってそのような食べ方は、「シナ人しかしないって思いこんでた」というのである。そして、「日本人がそれやってたの見て、『えっこの人日本人！？』」と思ったという。このように、彼女は引揚げて来るまでは豪快な食べ方を日本人はしないと思っていたことが分かる。さAらに、服装についても、「ステテコ、九州なんかはあったかいから、ズボンじゃなくてステテコはいたまま自転車こいで、『あら、あの人日本人？』」という感想を持っている。つまり、ステテコのまま自転車をこぐようなことを日本人はしないと思っていたのである。このように彼女自身が属する日本人についてのフレームが、内地の日本人に当てはめられなかったのである。言い換えれば、引揚げまでの彼女は「お行儀が良い人」が日本人であったというフレームを持っていたのである。しかし、引揚げ後にはすべての「日本人」がそうではなかったという事実を知り、驚いているが、彼女のフレームもまた「内地の日本人」へと順応しているのである。それが分かるのは、事例内で2回も出てくる「思いこんでた」である。た形（過去形）を使っているように、テンスは過去である。ということはすでにその考えは過去のものであるということがわかる。したがって、この点においては彼女のアイデンティティも「内地の日本人」へ順応しているのである。

このように、引揚げ後に見た内地の光景の語りから、彼女のアイデンティティの変容が明らかとなった

9.3. 大連におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ

本節では大連の二人のインフォーマント、D1 と D2 を取り上げる。D1 は両親から言われ続けてきた言葉を、旧満洲国での終戦を契機に、自身の教訓としていることを教えてくれた。また、D2 は、旧満洲国で育ったことにより、自身の感覚が日本と中国の両方を持ち合わせたものだと考えていることを教えてくれた。

まずは D1 の事例から見ていこう。事例 9-6, 9-7 は父と母からそれぞれ同じ言葉を言

われていたということを語っている。そして、事例 9-8 には終戦後に中国人から助けられていたということを教えてくれた。

事例 9-6：父から言われたかわいがるということ

| | |
|----|---|
| D1 | とにかく父が自分より目下の人がいたらかわいがること、大事にすること、まずこれが第一条件、そうやって教わった |
|----|---|

事例 9-7：母から言われたかわいがるということ

| | |
|----|--------------------------------|
| D1 | うちの母は言ってた、かわいがっとけば必ず倍になって返ってくる |
|----|--------------------------------|

事例 9-8：終戦後に助けてくれた中国人

| | |
|----|---|
| D1 | 終戦まではお給料もらうわけ、お給料もらったら必ず土地を買ってたわけ、その土地で、お芋とかリンゴの木とか植えてたね、植えてもらうわけ、ある程度できたところを中国人にあげてたね、かわいがってた人ね、だから終戦後うちはなんにも怖いことなかった、その人が全部抑えてたから、だから父が言うには、「やられたからやり返されてるんだからね、」って、「だから人は大事にしなきゃいけない、」っていうことはそこで重々教えられた、[中略]だから、それは教訓になりましたね |
|----|---|

彼女は父親からも母親からも、「人をかわいがること」ということを言われ続けてきた。それは人を見下すのではなく、困っている人がいたら助けるということで、特に戦時中に立場が低かった中国人にはいろいろな形でしっかりと感謝を伝えていたという。だがやがて、終戦によって立場が弱くなると日本人は襲われる人も多くいる中、彼女の家庭は襲われることはなかった。それどころか「抑えて（守って）」くれたのである。そのおかげで彼女は怖い思いもしたかった。

彼女は親から常々言われていた「人を見下してはいけない、かわいがること、」という意味を戦後の経験から、身をもって理解することができた。この言葉が彼女の自己形成に大きな影響を与えているのである。

日本人にとっていわば革命を起こされたような立場の逆転という事態を経験したこ

とで、その後の人生に大きな影響を与えられた人がいたということが明らかとなった。

次は同じ大連の D2 の事例である。彼は、旧満洲国という環境で育ったことで日本・中国双方の感覚を持ち合わせた自己形成が行なえたということを教えてくれた（事例 9-9）。

事例 9-9：大陸系の日本人としてのフッティング

| | |
|----|--|
| D2 | 韓国へ 2 年間日本語教えに行っててね、下宿してたんです、その時日本語の、教科書の問題がトラブルがあって、そしたら周りの下宿生の、韓国人 5、6 人いて日本人私だけで、そしたらみんなが言うのには「あなたは本当に日本人ですか」って言われてね、なんか、「感覚が中国人みたいだ」って、やっぱりそうかなーと気がします |
| R | やっぱり大陸の人になってますね、大陸系の日本人 |
| D2 | 大陸系でしょうね、だから日本人から見たら「お前ちょっと抜けてるぞ」って、おかげ様で学会できますから、そういうことで、本当に、あんまり両方から文句は言われないうです |

D2 は下宿先の韓国人から「あなたは本当に日本人ですか」、「感覚が中国人みたいだ」と言われたことがあるということを教えてくれた。これに対して「やっぱり大陸の人になってますね、大陸系の日本人」と言うと、「大陸系でしょうね」と受容している。そして、「日本人から見たら『お前ちょっと抜けてるぞ』」というのである。周りの人から言われた言葉通り、彼は日中両方の感覚を持ち合わせていることを自覚している。そして、「おかげ様で学会できますから、そういうことで、本当に、あんまり両方から文句は言われないうです」と自身の経験からも、それを裏付けている。

このように旧満洲国という言語環境は、言語に関する影響だけでなく自己形成という面においても影響を与えているということが分かった。

9.4. 大連、奉天におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ

次の事例は大連、奉天を経験した NHK1 の事例である。彼は引揚げ後に山口県へ行っている。その場所にいた何年間かを彼は本当に大変な思いをしたと回想しているのが

事例 9-10 である。厄介者扱いされ大変だったというが、その厄介者扱いされた理由として言葉を挙げている。

事例 9-10：言葉が違うという理由で厄介者扱いにされたというフレーム

| | |
|------|--|
| NHK1 | 山口県の田舎で過ごした何年か、何年間かは本当に大変でした、皆さんもそうでしょうけども、引揚者っていうだけで、田舎ではちょっとこう何て言うかな厄介者扱いにされる、学校に行ってもいじめられる、だいたい言葉が違いますからね、山口弁が使えないから、ほとんどなんか言う「生意気だ」と言われ、「あいつなんか格好つけた言葉を使いやがる」って、で頑張っている成績取ると、殴られるんですね、「お前がいい成績取るなんて間違ってる」っていうんで、悔しくて悔しくて、早くこんな田舎から飛び出してやるんだっていうふうに、思い続けていたような時代でした |
|------|--|

彼は山口弁が使えないから厄介者扱いされたというフレームを持っている。言葉が違うことで、何か言っても『『生意気だ』と言われ、『あいつなんか格好つけた言葉を使いやがる』って』言われた過去を語っている。ここからわかるように、彼にとって言葉というのは、同じ言葉を話せば仲間であり、違う言葉を話せば仲間でないにとらえている様子がうかがえる。一方、山口の人にとっても山口弁が仲間の証であり、それを話さなければ厄介者としいじめることもあった。彼らからみると引揚者である NHK1 の言葉が「格好つけた言葉」に聞こえたとは彼は考えている。

このように旧満洲国の言葉が直接的に彼にとって、マイナスとなっていた。しかし、当時を振り返ってみればこの経験こそが自分にとって貴重なものであったと考えている。この語りは次のように続く（事例 9-11）。

事例 9-11：つらい経験こそが彼にとって貴重なものとなったというフレーム

| | |
|------|--|
| NHK1 | <p>結局は僕にとってそれはとても貴重な時代だったなと思うんですよ、あの時代があったから、あのつらい時代があったから、それが僕のその、映画人になってからの仕事に大きく影響しているはずで、それは決して、悪い意味での影響じゃないだろうと、例えば僕が『○○（映画タイトル）』っていう映画をたくさん作りましたが、そういう「○○（映画の主人公）」っていう人間に対する見方が僕に刺さったのはきっと、敗戦後の内地でのつらいつらい日々を過ごしたからじゃないかと、そういう中でいろんな人たちに巡り合って、満洲では決して会えなかったタイプの、例えば炭鉱に働きに行く炭坑労働者、それから在日朝鮮人の土方の親方とか、そういう人たちと触れ合うことの中で、こう人間と人間との新しいつながり方というか、人情みたいなものを気が付くことができたっていうかな、その体験は僕にとって非常に貴重だったな、今思い返したりしてるわけです</p> |
|------|--|

彼は「結局は僕にとってそれはとても貴重な時代」であり、「あの時代があったから、あのつらい時代があったから、それが僕のその、映画人になってからの仕事に大きく影響している」と語っている。彼にとって言葉の違いが原因で悩まされた時代は、当時はマイナスでも振り返れば非常に貴重な経験として位置付けている。

このように、旧満洲国の言語環境から内地の言語環境へと移り、言葉によってつらい経験をしたが、振り返ってみれば彼にとって貴重な経験となっており、彼自身に大きな影響を与えていることが明らかとなった。

9.5. 方正県におけるインフォーマントの言語とアイデンティティ

これまで見てきた例は全て、終戦後数年以内に引揚げができた者たちである。それに対して、残留孤児となってしまった者たちのアイデンティティとはどのようなものなのだろうか。NHK アーカイブスに見られた残留孤児たちのアイデンティティを見ていきたい。

ここで取り上げる NHK4 と NHK5 は残留孤児となってしまった姉妹である。ただし、姉妹ではあるが終戦と同時にそれぞれ別の中国人家庭に引き取られたり、親の再婚について行ったりと直接会う機会は少なかった。別の家庭に行ったことが影響しているのか、それぞれのアイデンティティは異なっていた。

次の事例 9-12 は道端で町人と NHK4 が中国語で会話しているところである。そして、事例 9-13 は自身のことについてのインタビューを受けている独白のような場面である。これらを前提に、実際に事例を見てみよう。

事例 9-12：方正県出身者としてのフッティング

| | |
|------|---------------------|
| 町人 | あなた中国語うまいね、日本人でしょう？ |
| NHK4 | 中国で育ったの |
| 町人 | 日本人でしょう？ |
| NHK4 | 私も元は方正県出身です |
| 町人 | 中国人？日本人？ |
| NHK4 | 私は故郷を見に戻ってきたのです |

※会話は全て中国語でなされていたが、画面に出ている字幕を書き取っている

事例 9-13：中国は他人のうちにいる感覚とするフレーム

| | |
|------|--|
| NHK5 | 中国で生活するということは、小さいころからずっと他人のうちにいるような感じでした。自分の国ではないという感覚でした。ずっと頭を下げて頭を挙げられないっていう感じです。日本へ帰れば、頭を挙げてもいいと思ったんですよ。ですから、どうしても帰ってきたかったです。 |
|------|--|

※会話は全て中国語でなされていたが、画面に出ている字幕を書き取っている

事例 9-12 では、NHK4 が中国人の町人が何度も彼女に「日本人でしょう」と聞いている。それに問いに対して NHK4 は全く答えようとしない。「中国で育ったの」や「私も元は方正県出身です」、「私は故郷を見に戻ってきたのです」のようにはぐらかすような答え方をしたのである。ここでのフッティングは「はい、日本人です」や「いいえ、

日本人ではありません」のような答え方をしないことから考えると「方正県出身者」であって、「方正県出身者の日本人」や「方正県出身者の中国人」ではないことがわかる。彼女にとってこの問いは、自身のアイデンティティと密接にかかわっており非常に答えにくいものだったのだろう。ここでは、むしろ「答えられない」というのが答えだったのかもしれない。

一方、妹の NHK5 はインタビューの中で次のようなことを言っている。「中国で生活するということは、小さいころからずっと他人のうちにいるような感じでした。自分の国ではないという感覚でした。」というのだ。言い換えれば、彼女にとって中国という場所は、自身が本来いるべき場所ではないと感じていた。つまり、彼女の帰属意識は内地の日本人にあったと暗に示しているのである。

NHK アーカイブスの姉妹の例を取り上げた。この2つの例で、アイデンティティをはっきり言わない者、一方で内地の日本人と暗示する者がいたことが明らかとなった。姉妹であっても環境の違いでアイデンティティに差が出ることがあることが分かった。

9.6. 言語とアイデンティティのまとめ

以下で、本章のまとめをしていく。

①安東

A1 は下仕事をしない日本人としてのアイデンティティを構築していった。また、内地の日本人が下仕事をしているのを見て、「日本人ってこんなことまでしなきゃいけないのかなって思」ったということは、「旧満洲国出身の日本人」ということになるだろう。そして、引揚げ後の生活では「旧満洲国出身の日本人」というアイデンティティを持ち続けるのではなく、「内地の日本人」へ順応していこうという姿勢が見られた。

その一方で、会報3は自分がいるべき場所ではない、“日本に來ている”という気持ちを持ち続ける者もいた。

安東の事例では、「内地の日本人」へ順応していこうとし順応できたものがある一方で、順応できなかった者もいることが明らかとなった。

②撫順

引揚げまでの彼女は「お行儀が良い人」が日本人であった。しかし、引揚げ後には、すべての「日本人」がそうではなかったという事実を知り、驚いてはいるが、彼女もまた A1 のように「内地の日本人」へと順応している。

③大連

D1 は日本人にとっていわば革命を起こされたような立場の逆転という事態を経験したことで、その後の人生に大きな影響を与えられている。

また、D2 は大連で育ったことで、日中両方の感覚を持ち合わせた自己形成をしている。

このように大連という言語環境は、言語に関する影響だけでなく自己形成という面においても影響を与えているということが分かった。

④大連・奉天

旧満洲国の言語環境から内地の言語環境へと移り、言葉によってつらい経験をしたが、振り返ってみれば彼にとって貴重な経験となっていた。やはり、旧満洲国からの引揚げが、彼自身に大きな影響を与えていることが明らかとなった。

⑤方正県

残留孤児の NHK4 がアイデンティティを答えられない様子が見られたのに対して、妹の NHK5 は「中国で生活するということは、小さいころからずっと他人のうちにいるような感じでした。自分の国ではないという感覚でした」と言っている。つまり、彼女の帰属意識は内地の日本人にあったと暗に示している。このように、残留孤児の姉妹であっても環境の違いでアイデンティティに差が出るということが分かった。

第三部 結論

10. 本研究のまとめ

10.1. 各論のまとめ

第2部各論を章ごとに確認していこう。

第6章言語ドメインでは、市場では他民族も日本人相手には日本語を用いて会話がなされていた。市場ではなく、街中でも中国料理店でも同様に日本語だったことが明らかとなった。しかし、ロシア人のチョコレートのお店とパン屋では安東では指さしでのコミュニケーションだったのに対して、大連ではロシア語だったということが分かった。

自宅では中国人使用人に中国語を使う家庭もあれば、日本語を使う家庭もあった。使用人がいなかった家庭でも、自宅に訪問販売員が来た場合は、中国語を使っていたという。

安東の学校では、朝鮮民族がいても日本語での会話がなされていた。そして、撫順の学校では、英語の授業もあったが、戦争激化とともに次第に英語の授業は自習の時間となった。また、音楽の時間ではドイツ語の音階が用いられていた。

大連の幼稚園では、日本語が出てこないときに中国語がパッと出てくることもあったという。学校・幼稚園をまとめると、安東、撫順では友達同士の会話では日本語の使用が中心だったのに対して、大連では中国語が使われることもあったことが明らかとなった。

終戦によって日本人の立場が逆転したが、ソ連軍による日本語使用が見られた。つまり、立場の逆転はあっても言語の逆転までは起こっていなかったことがうかがえた。

上記のように、少なからず中国語に触れる機会があった者たちとは反対に、全ドメインで中国語を知らないという者がいた。

本章を通じて、旧満洲国を一つ枠組みで捉えずに、個別の事象をより詳細に見ていくことが重要であることが示唆された。。

第7章言語使用では以下のことが明らかとなった。

①安東

日本人の日本語使用については、「九州弁と混ざった日本語」が使用されていた。朝鮮人の中学同級生も、日本語を使用していたが、彼らの日本語もまた、A2 と変わらない「九州弁と混ざった日本語」であった。

A2 が言及した中国語はおよそ 9 割が正しい中国語であった。

終戦直後に、ソ連兵が「これありますか、これありますか」といった簡単な日本語を使用していた。

②撫順

中国語の授業の最初に中国語による号令がかけられていたが、正しい中国語になっているものの、号令としては不適切なものもあった。

日本人の日本語は、安東同様に「九州弁と混ざった日本語」が使用されていた。

中国人店員による日本語の歌と「ぬくい」という西日本の方言使用があったことを確認できた。

フランス人シスターとは日本語では話した記憶がなく英語が使用された。

音楽の授業のドイツ語が正しい音階を使っていたことを確認することができた。

③大連

D2 が言及した中国語使用例のうち、正しい中国語が 18 例、ローカルエラーの中国語が 7 例、グローバルエラーの中国語が実質 3 例であった。

中国人による中国語使用の言及例の中に、間違った中国語が存在していた。

内地からやって来た日本人が大阪方言を使用していた。そのおかげで、転校生と自身の日本語が違っていたことを自覚したことが明らかとなった。

三つの地域の各言語の使用例を確認してきた。安東と撫順で同じ「九州弁と混ざった日本語」を言及していても、具体例を挙げると差異があった。また、中国語の使用例の例示の数も異なれば、学校で耳にした言語も異なっていた。

第 6 章に続き、旧満洲国の言語研究においては、地域あるいは人ごとに特徴を確認していく必要があることが明らかとなった。

最後に、NHK アーカイブスにて、さらに地域の特定ができなかったが、残留孤児の家族による「混合型」の使用が確認された。これは今後の接触言語研究のために新たな

データを提示することができたといえるだろう。

第8章では言語意識を分析した。以下がその結果である。

①安東

学校で習った日本語に、特別な意味を持たせている者がいることが明らかとなった。

日本語は複数の日本語があったとする意識を持つ者がいることがわかった。それは「自分が生まれ育った言葉」「生活するのに必要な言葉」「協和語の日本語」であった。

旧満洲国へ入って来たばかりのソ連兵に対し、日本人が日本語を用いたという回想があった。したがって、彼らに日本語が通じるという意識を持つ者がいた。

日本人から見ると、朝鮮民族の人は働くために日本語が必須であると考えていた。

終戦を迎え日本人の地位が逆転したことにより、言語意識が逆転した例が確認できた。

日本人の中に中国語は「本を読むとき」に使うものだとする意識がある者がいた。

②撫順

F1は、教師ならば正しい日本語を使わなければならないという意識があった。

東京方言話者に対しては肯定的に捉え、そうではなかった場合には否定的な評価をしていた。その基準は国語の時間に習う日本語を話せるかどうかであったという意識が明らかとなった。

社会的状況に関係なく、F1もまた、英語に対して肯定的な評価をしている一方で、ドイツ語は、「ぶってる先生」が知識自慢のために使ったものだとしてとらえている。

F1は多言語に対して否定的な評価はしていない。つまり、その多言語環境に適合し、様々な言語と向き合っていたといえるだろう。このように、多言語環境を享受していた人もいたということが明らかとなった。

③大連

大連で育った彼は、日本語は日本語でも大阪方言が分からなかった。さらに、大阪方言よりも中国語のほうが分かりやすいとする意識さえも持っていた。つまり、中国語のほうが身近な存在として考えていたということが明らかになった。

彼は間違った中国語を話すのは日本人であるというフレームを持っていることが確認できた。

旧満洲国の日本人と内地の日本人との間で、中国語に対する意識が全く異なっていることが明らかとなった。

第9章言語とアイデンティティでは以下のことが明らかとなった。

①安東

A1 は下仕事をしない日本人見て、自身のアイデンティティを構築していた。それによって、内地の日本人が下仕事をしているのを見て、「日本人ってこんなことまでしなきゃいけないのかなって思」ったという。つまり、ここで初めて「旧満洲国出身の日本人」というアイデンティティが形成されただろう。しかし、引揚げ後の生活では「旧満洲国出身の日本人」というアイデンティティを持ち続けるのではなく、「内地の日本人」へ順応していこうという姿勢が見られた。

A1 のような人がいる一方で、“日本に来ている”という気持ちを持ち続ける者もいた。つまり、順応できなかったのである。

安東の事例では、「内地の日本人」へ順応していこうとし順応できたものがある一方で、順応できなかった者もいることが明らかとなった。

②撫順

引揚げまでの彼女は日本人を「お行儀が良い人」というフレームでとらえていた。しかし、引揚げ後に見た「日本人」がそうではなかったことに驚いてはいるが、彼女もまたそれを受け入れた。その結果「内地の日本人」へと順応することができている。

③大連

D1 は立場の逆転を経験したことで、その後の人生に大きな影響を与えられている。また、D2 も大連で育ったことで、日中両方の感覚を持ち合わせた自己形成をしている。このように大連という言語環境を経験したことで、言語に関する影響だけでなく自己形成という面においても影響を与えているということが明らかとなった。

④大連・奉天

内地の引揚げ先で、言葉によってつらい経験をしたが、その経験が彼自身に大きな影

響を与えていることが明らかとなった。

⑤方正県

残留孤児の NHK4 がアイデンティティを答えなかったのに対して、妹の NHK5 は「他人のうちにいるような感じ」「自分の国ではないという感覚」だと言っている。このように、残留孤児の姉妹であっても環境の違いでアイデンティティに差が出ることもあることが分かった。

この各章のまとめに従って地域の特徴をみていきたい。まずはまとめの結果を表に示す。対象は各章で必ず出てくる安東（表 10-1）、撫順（表 10-2）、大連（表 10-3）である。

表 10-1：安東の特徴

| 観点 | 結果 | 特徴 |
|-------------|-------------------|-----------------|
| 言語ドメイン | 市場：日本語 | 日本語が圧倒的 |
| | 街中：日本語 | |
| | 中国料理店：日本語 | |
| | 学校：日本語 | |
| | 終戦後：日本語 | |
| | 訪問販売：中国語 | |
| | ロシア人のパン屋：指さし | |
| 言語使用 | 日本人：「九州弁と混ざった日本語」 | 間違ったと言い切れない言語使用 |
| | 朝鮮人：「九州弁と混ざった日本語」 | |
| | ソ連兵：簡単な日本語 | |
| | 日本人：9割正しい中国語 | |
| 言語意識 | 習った日本語が特別な意味 | 国語教育を経た特有の日本語意識 |
| | 複数の日本語があった | |
| | 朝鮮人は働くために日本語が必須 | 言語使用の目的意識が明確 |
| | 本を読むための中国語 | |
| | 地位の逆転と言語意識の逆転 | 終戦後の日本語意識（不）変化 |
| | ソ連兵にも日本語が通じる | |
| 言語とアイデンティティ | 中国人と比較し「日本人」 | 「内地の日本人」への移行 |
| | 引揚げ後に「旧満洲国出身の日本人」 | |
| | 「内地の日本人」へ順応成功 | |
| | 「内地の日本人」へ順応不成功 | 未移行 |

表 10-2：撫順の特徴

| 観点 | 結果 | 特徴 |
|-------------|-------------------------------|---------------|
| 言語ドメイン | 学校：日本語 | 多言語の学校 |
| | 学校：英語（選択制） | |
| | 学校：中国語（選択制） | |
| | 学校：ドイツ語（音楽） | |
| 言語使用 | 日本人：中国語の号令 | 日中相互で言語使用 |
| | 日本人：「九州弁と混ざった日本語」 | |
| | 中国人店員：日本語の歌 | |
| | 中国人店員：日本語の方言 | |
| | フランス人シスター：英語 | 多言語を耳にする |
| | 日本人：正しいドイツ語 | |
| 言語意識 | 教師：正しい日本語を使うべき | 日本語の規範意識 |
| | 東京方言話者：肯定的 | 目標言語話者への肯定的評価 |
| | 大阪方言話者：否定的 | |
| | 英語：肯定的 | |
| | ドイツ語：否定的（教師） | |
| 言語とアイデンティティ | 行儀が良い人が日本人 | 「日本人」のフレームの変化 |
| | （引揚げ後） 行儀がよくない 「内地の日本人」 | |
| | 「内地の日本人」へと順応 | |
| | | |

事例 10-3：大連の特徴

| 観点 | 結果 | 特徴 |
|-----------------|--------------------------|------------------------|
| 言語ドメイン | 自宅：中国人使用人に中国語 | 家庭ごとに異なる言語 |
| | 自宅：中国人使用人に日本語 | |
| | 幼稚園：日本語＞中国語 | 不意に中国語使用 |
| 言語使用 | 日本人：正しい中国語(18 例) | 日本人の中国語は 89.3%通じた |
| | 日本人：ローカルエラー(7 例) | |
| | 日本人：グローバルエラー (3 例) | |
| | 中国人：非文の中国語使用例 | 日本語への意識 |
| | 日本人：日本語が大阪方言で はなかった | |
| 言語意識 | 大阪方言より中国語が分か りやすい | 中国語が当たり前のもの |
| | 中国語のほうが生身近な存在 | |
| | 内地の日本人：中国語に困る | |
| 言語とアイデ ンティティ | 終戦のときの経験に大きな影 響を与えられた | 言語環境の経験が 自己形成に大きな影響 |
| | 日中両方の感覚を持ち合わせ た自己形成 | |

特徴だけを比べていけば、地域差は一目瞭然だろう。安東ではほとんどの場所で日本語であったのに対し、撫順では多言語が聞こえてくるような環境、大連では、中国語が使用されることがしばしばあったようである。撫順では学校のカリキュラムだけが取り上げられ、多言語と指摘しているように見えるかもしれない。たしかに、カリキュラムなら安東も英語・中国語の授業があったことが確認されている。だが、重要なのは、半構造化インタビューの中で、F1 と F2 が多言語に関する言及が多かったということである。言い換えればそれは、撫順が多言語であったということを強く「意識」していたことを示しているのである。同様に、安東では日本語で多くの場合通じたという「意識」

が強いことを示し、大連では日本語も使ったが中国語も使ったという「意識」が強いことを示している。彼らが経験した各地に対する「意識」差があることが重要なのである。

このように本研究では、地域の特徴のまとめから各地がどのような言語環境であったか、どのような意識を持っていたかが明らかとなった。

以下は半構造化インタビューから感じたところの筆者のインフォーマントの特徴である（表 10-4）。

表 10-4：インフォーマントの特徴

| | |
|----|---|
| A1 | 日本語をよく使っていた。そして、日本語と仕事によって日本人であるというアイデンティティを確立していった。 |
| A2 | 規範意識が強いと思われる。授業で習った日本語を通じて、使っている日本語だけでは通用しないと思っていた。さらに先生ならば正しい日本語を使うべきだと考えている。中国語使用例を見てもほとんどが正しいもので、文字資料の中国語が間違っているとそれを正しく訂正もしていた。 |
| F1 | 多言語環境を享受していたことが特徴的である。さまざまな言語に触れていただけではなく、具体例までも覚えていることから、関心の高さがうかがえる。授業でもなかったロシア語を覚えていた。だが、当時のソ連兵は危ないものとして見られていたし、彼女もそう考えていた。それにもかかわらず、言語には関心を抱いていたことがわかる。 |
| F2 | F1 とほとんど同様であるが、言語よりも多民族社会への興味が強かったように感じられた。事例こそ取り上げていないが中国人の纏足に興味を持っていたり、食べ物に興味を持っていたり、ソ連兵の歌にも興味があったようである。 |
| D1 | 両親からの教えを教訓としていた。彼女はそれにまつわるエピソードをたくさん教えてくれた。自身もそうだし、兄弟もその教えを守っていたという。だからこそ今でもうまくいっている様子であった。 |
| D2 | 他のインフォーマントに比べて、中国語をよく使っていたことが特徴的である。また、それに伴って学校の友人や遊びといった中国人との接触が非常に多かった。それが結果的に、日本と中国の両方の感覚を持ち合わせた自己形成につながっているようであった。 |

姉妹である F1 と F2 が似ているが、あとはいわば「四者四様」といえるだろう。旧満洲国に対してどのように考えているか、旧満洲国を経験した結果どのような考えを持つようになったか、旧満洲国について何を伝えたいのか、個人によって異なることが明らかとなった。

本研究での結果からもっとも言いたいことは次の通りである。

従来の社会言語学的研究では旧満洲国は一つの大きな枠組みで研究がされてきた。つまり、インタビューをしても出身地による言語環境の差などが考慮されなかったのである。しかし、地域によって差があり、その大きな枠組みだけではとらえきれない次元にある。

旧満洲国はわずか 14 年で崩壊している。そのために、言語の規範意識が成立しなかった。また、旧満洲国に移住してきた日本の開拓団の人数も場所によって異なれば、大連のように日露戦争から租借地となっている場所もある。それにより、地域差が生まれ、言語環境もそれぞれ異なる。したがって、旧満洲国の殊社会言語学的研究を行う場合、そのことを念頭に置くことが最も重要である。

10.2. 今後の課題

これまで、旧満洲国に関する言語学的な研究においては、それを一つとして広くとらえられてきたことを指摘した。今後は、各地域・インフォーマントごとに分析を進め、研究を深化させていく必要がある。そして各地域分析後、旧満洲国の全体像を把握していきたい。

参考文献

- 飯倉江里衣・尹国花・大野絢也・菅野智博・瀬尾光平・森巧・湯川真樹江(2016)「故立岡皓男氏所蔵資料目録」『満洲の記憶』3,pp.19-30.
- 大野絢也・尹国花・湯川真樹江・飯倉江里衣(2015)「『大連会会報』記事目録」『満洲の記憶』2,pp.14-101.
- 大久保明男(2017)「中国語新聞や文芸雑誌より見る満洲の言語風景」7月22日,第8回アジア・太平洋の日本語と日本語教育を考える会—旧満洲国の言語と文化.
- 川上尚恵(2010)「北京近代科学図書館編纂日本語教科書分析からみた占領初期の中国華北地方における日本語教育の一側面—『初級日文模範教科書』から『日本語入門編』へ」『日本語教育』146号, pp.144-158.
- 簡月真, 真田信治(2011)「台湾の宜蘭クレオールにおける否定辞—『ナイ』と『ン』の変容をめぐる」『言語研究』140, pp.73-87.
- 干逢春(2001)「『満洲国』の蒙古族に対する日本語教育に関する考察」広島大学大学院教育学研究科紀要 第3部 第50号 pp.197-204.
- 金水敏(2014)『コレモ日本語アルカ—異人のことばが生まれるとき』岩波書店.
- 甲賀綾子(1952)『遍歴』私家版.
- 甲賀綾子(1968)「共に歩んだ五十二年」『甲賀綏一記念集』甲賀道生編 pp.28-37.
- 甲賀真広(2017a)「フレーミングとフッティング理論から言語と自己形成の関連性を探る—旧満洲国の日本人住民のアイデンティティ—」『第39回社会言語科学会研究大会 予稿集』 pp.70-73.
- 甲賀真広(2017b)「旧満洲国在住者の言語接触史—文字資料とオーラルヒストリーのインターフェースを目指して—」『日本語研究』 pp.105-120.
- 甲賀真広(2017c)「フレーミングとフッティングを応用した旧満洲国における言語環境研究」, 第7回アジア・太平洋の日本語と日本語教育を考える会—言語研究におけるフレーミングとフッティング.
- 甲賀真広(2017d)「旧満洲国に育った日本人の聞き取り調査から見た言語意識—言語教育に着目して」, 第8回アジア・太平洋の日本語と日本語教育を考える会—旧満洲国の言語と文化.

- 甲賀真広(2017e)「回想録の社会言語学的研究—引揚者たちの会報『ありなれ』を資料として」『第 36 回韓国日本語学会 予稿集』 pp.201-206.
- 小谷野邦子(2011)「『満洲』における教員養成」『茨城キリスト教大学紀要』 45 号,pp.245-259.
- 斉紅深(2004)『「満州」オーラルヒストリー—〈奴隷化教育〉に抗して—』竹中憲一訳, 皓星社.
- 酒井順一郎(2017)「戦場における日本語教育と文化交流—八路軍を中心に」12 月 17 日, 日中戦争勃発 80 周年シンポジウム—日本語教育史から見た日中戦争(1937-1945).
- 桜井隆(2015)『戦時下のピジン中国語—「協和語」「兵隊支那語」など—』三元社
- 真田信治(2005)「旧満州に残存する日本語—ある朝鮮女性の談話—」佐藤喜代治博士追悼論集刊行会編『日本語学の蓄積と展望』 pp.60-83.
- 周一川・賈曦(2013)「『満州国』留学生予備校第 3 期卒業生をめぐって」『』 pp.69-79.神奈川大学.
- 祝利(2014)「『満洲国』における『民族協和』下の人材養成と日本語教育」九州大学博士論文.
- 祝利(2016)「『満洲国』建国大学における人材に必要な能力に関する考察—教授科目から—」『第 11 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』 全 4 頁.
- 祝利(2017)「『満洲国』における日本語教員の養成」12 月 17 日, 日中戦争勃発 80 周年シンポジウム—日本語教育史から見た日中戦争(1937-1945).
- 杉森知也(2015)「『満洲国』における中等教員養成—日本人教員の再教育と養成の開始に着目して—」『研究紀要』 90,pp.79-93,日本大学文理学部人文科学研究所.
- 杉森知也(2017)「『満洲国』における中等教員需給政策—恒久的中等教員養成機関の設置と展開に着目して—」『研究紀要』 pp.20-29.
- 石剛(2003)『植民地支配と日本語—台湾, 満洲国大陸占領地における言語政策』三元社.
- 関智英(2017)「華中占領地と日本語—『大陸新報』を手掛かりに」12 月 17 日, 日中戦争勃発 80 周年シンポジウム—日本語教育史から見た日中戦争(1937-1945).
- 田中寛(2017)「中国占領地における日本語普及の「〈偽〉百花繚乱」—朝日新聞外地版(北支・中支)にみる日本語工作の実態」12 月 17 日, 日中戦争勃発 80 周年シンポジウム—日本語教育史から見た日中戦争(1937-1945).

- 張守祥(2011)『『満洲国』における言語接触—新資料に見られる言語接触の実態—』『人文』10: 51-68.
- 張守祥(2012)「満洲国地域における言語接触」—写真資料からみる日本語普及史—」首都大学東京博士論文.
- 張守祥(2017)「日本統治時代の中国大陸における『協和語』とその記憶—複数の資料からの新たな発見」7月22日, 第8回アジア・太平洋の日本語と日本語教育を考える会—旧満洲国の言語と文化.
- 娜荷芽(2013)「満洲国における対モンゴル人初等教育政策の成立と展開」『中国研究月報』67(11),pp.15-29.
- 中島和男(2016)「協和語の成立について」8月5日東アジア日本語教育・日本文化研究学会にて口頭発表.
- 中村重穂(2006)「宣撫班本部編『日本語會話讀本』の文献学的考察・その2—南満洲教育会編纂教科書との比較を通して—」『北海道留学センター紀要』10 pp.34-57.
- 日置麗香(2015)「戦前期の青年団『塩根川向上会』の記録にみる『満州』および『満州移民』」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第43号,pp.133-150.
- 平山輝男編(1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院.
- 藤原作弥(1984)『満州, 少国民の戦記』新潮社.
- 松重充浩(2013)「『ありなれ』(第1～56号) 総目次」『近現代東北アジア地域史研究会』第25号 pp.79-100.
- 松丸真大(2009)「中国東北部における残留日本語の実態—丁寧形式をめぐって—」『社会言語科学』第11巻 第2号 pp.102-105.
- 松丸真大(2017)「旧満洲国の日本語話者が使用する丁寧形式の特徴」7月22日, 第8回アジア・太平洋の日本語と日本語教育を考える会—旧満洲国の言語と文化.
- 「満洲の記憶」研究会編集委員会(2015)「大連神社記念資料館所蔵文献目録」『満洲の記憶』1,pp.12-25.
- 三谷裕美(1996)「『満洲国』における『国語政策』-『新学制』にみる『国家』と『国語』像-」『東京女子大学紀要論集』46(2) pp.99-115.
- 宮脇弘幸(2017)「政治とことば—旧日本植民地・占領地に発現した文化・心理・言語現象」12月17日, 日中戦争勃発80周年シンポジウム—日本語教育史から見た日中戦争(1937-1945).

- 宮脇弘幸(2017)「満洲の教育」『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』第 26 号, pp.13-18.
- 劉建輝(2017)「隠蔽と顕現—従軍画家が描いたもう一つの日中戦争」12 月 17 日, 日中戦争勃発 80 周年シンポジウム—日本語教育史から見た日中戦争(1937-1945).
- ロング・ダニエル, 新井正人(2012)『マリアナ諸島に残存する日本語—その中間言語的特徴(海外の日本語シリーズ)』明治書院.
- ロング・ダニエル, 甲賀真広(2017)「接触言語の分類に関する量的研究—起点言語の割合を通して—」『人文学報』 pp.45-54.
- 渡部学 (2015)『日本語のディスコースと意味—概念化とフレームの意味論』くろしお出版.
- Bakker, Peter (1994) *Mixed Languages*. Amsterdam: Institute for Functional Research into Language and Language Use (IFOTT).
- Sebba, Mark (1997) *Contact Languages*. New York: St. Martin's Press.
- Trudgill, Peter (2002) "Dual Source Pidgins and Reverse Creoloids", *Sociolinguistic Variation and Change*. Georgetown University Press.

参考サイト

- 『銀座のうぐいすから』「啞然！ ICU 本館とは、旧中島飛行機の研究所だった（ヴォリーズ, 一万田尚登, 宮崎駿, 秋篠宮）」
 〈<http://blog.goo.ne.jp/amesyun-goo/e/1d49f11554f399b5b950d4529fb494ee>〉最終閲覧日 2018 年 1 月 8 日
- 『瑞穂の国から出ておいで』「ついに赤紙！・・・だけど」
 〈<http://goaheadkk.blog25.fc2.com/blog-entry-122.html>〉最終閲覧日 2018 年 1 月 8 日

既発表論文との関係

第5章は，甲賀真広(2017b)の一部に基づき書き改めたもの。

第6章から第9章は，甲賀(2017a)，甲賀(2017c)，甲賀(2017d)，甲賀(2017e)の一部に基づいて，観点ごとに抽出し，書き改めたもの。

付記

本研究は 2017 年度第三回「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」の成果の一部である。

謝辞

修士論文の執筆にあたり、多くの方に意見やコメント、アドバイスをいただき書き上げることができました。

指導教官のダニエル・ロング先生には、博士前期課程に入る前からご指導を頂き、時には日をまたぐ時があるほども、熱心に指導をしていただきました。また、さまざまな学会や研究会、シンポジウムでの発表、小笠原調査、福岡調査、北海道調査、インドネシア研修、遠隔教育など多くの経験をさせていただきました。たくさんのご助言と励ましのお言葉をくださり、ありがとうございました。

そして、ロングゼミの卒業生である李舜炯さんには、研究に向き合う姿勢など様々なことを教えていただきました。慶北大学校の遠隔教育でも、ボランティアにもかかわらず毎授業の参加がとても心強かったです。私生活でも「東京のお母さん」として多くのことで支えていただきました。

西郡先生には、遠隔教育の機会をいただき、実際に日本語教育を経験させていただきました。また、香港、モンゴルでの発表の機会や韓国へも同行させていただきました。

浅川先生、神田先生、長谷川先生、奥野先生には修士論文の構想発表や中間発表で貴重なご意見をいただき、調査方針や分析方法を再考することができました。劉志偉先生、小口先生、劉永亮先生にはいつも暖かく励ましていただきました。

学会や研究会での発表では、様々なご意見をいただき、自分に不足していた部分を教えていただきました。公私に渡ってご指導を賜りましたすべての先生方に心より御礼申し上げます。

また、本研究の調査のために貴重な時間を割いてくださったみなさまには感謝しかありません。本研究ではみなさまにお話をうかがうことができなければ成り立ちませんでした。特に、祖父である甲賀和彦氏には何度も何度も話を聞き、そのたびに笑顔でいろいろなことを教えてくれたこと、とてもありがたかったです。本調査に協力してくださった皆様に心より感謝申し上げます。

そして、ゼミの先輩である張鋭さんには、中国語母語話者として、様々な判定に協力していただきました。毎回、急に研究室を訪れているにもかかわらず、快く協力してくださいました。

同じ大学院・大学で学ぶ友人，先輩，後輩たちに出会うことができ，研究面，精神面で多くを支えられました。

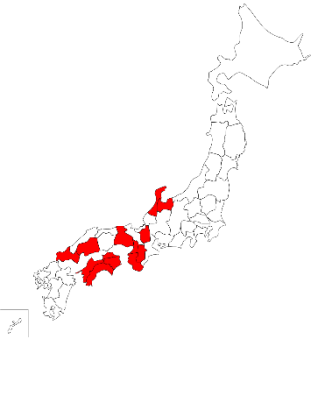
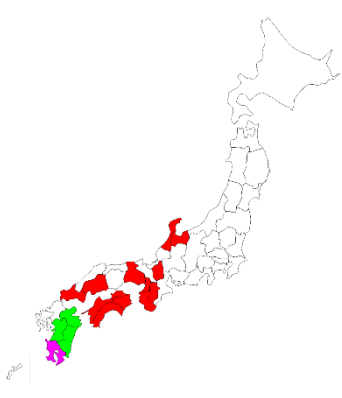
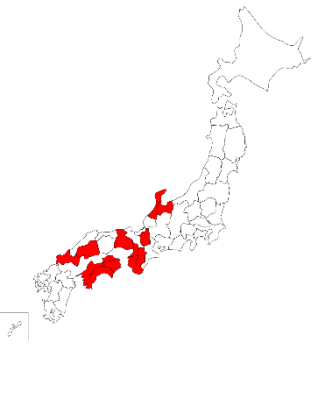
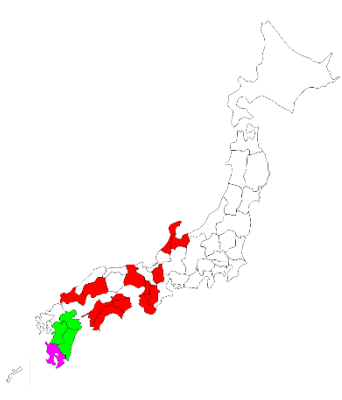
そして最後に，大学院に行くことはないと言っていたにもかかわらず，大学院への進学を許可してくれ，サポートしてくれた家族に深く感謝いたします。

2018 年 1 月 10 日 甲賀 真広

修正対応表

| 番号 | ページ | 行 | 【誤】 | 【正】 |
|----|-----|-------|---|--|
| 1 | ii | 28 | ロシア人のチョコレートのお店とパン屋 | ロシア人のチョコレートの店とパン屋 |
| 2 | 2 | 4-5 | 状況とまさに一致するといえよう。 | 状況と類似しているといえよう。 |
| 3 | 7 | 17 | 美術史の分野では、約 3000 枚の軍事郵便絵葉書から | 美術史の分野では、劉(2017)の約 3000 枚の軍事郵便絵葉書から |
| 4 | 7 | 23 | 他の地域でみられるような | 他の地域（台湾、サイパン、パラオなど）でみられるような |
| 5 | 10 | 12 | (張 2011 p.55) | (張 2011 pp.55) |
| 6 | 10 | 22 | (張 2011 p.55-56) | (張 2011 pp.55-56) |
| 7 | 13 | 17-18 | これまで三度に渡って調査を行なってきたが、A2 は優れた話術と克明な描写で当時の状況について語ってくれた。 | 「削除」 |
| 8 | 17 | 10 | はなしているのは | 話しているのは |
| 9 | 18 | 8-9 | このような貴重な資料を提供くださった甲賀和彦氏に心より御礼申し上げたい。 | 「削除」 |
| 10 | 19 | 18 | (松重 2013, pp79) | (松重 2013 pp.79) |
| 11 | 21 | 7 | いつでもだれでも閲覧できるわけではない。 | いつでもだれでも研究のために閲覧できるわけではない。 |
| 12 | 21 | 9-10 | 実際に閲覧したのは旧満洲国に関するドキュメンタリー番組を中心に閲覧していった。実際に閲覧したものは以下の通 | 実際に閲覧したのは旧満洲国に関するドキュメンタリー番組中心である。それらを以下に示す（表 4-2）。 |

| | | | | |
|----|----|-------|---|---|
| | | | りである（表 4-2）。 | |
| 13 | 32 | 15 | 日本兵 2 | 現地人 1 |
| 14 | 32 | 16 | 日本兵 3 | 日本兵 2 |
| 15 | 32 | 17 | 現地人 | 現地人 2 |
| 16 | 34 | 5 | 活動でも（観る）かんかんしようと思ふ | 活動でもカンカン（観る）しようと思ふ |
| 17 | 41 | 1-2 | A2 は安東出身の女性である。 A2 が訪れた市場では、「日本人に対しては全部日本語」と教えてくれた | A1 は安東出身の女性である。 A1 が訪れた市場では、「日本人に対しては全部日本語」と教えてくれた |
| 18 | 41 | 4-5 | 「お話が日本語でやりますからもうすぐにね」うかがい知ることができる。 | 「お話が日本語でやりますからもうすぐにね」うかがい知ることができる。 |
| 19 | 41 | 20 | 市場や街中では隣のお店や周りの空気から独自性を出す | 市場や街中では隣の店や周りの空気から独自性を出す |
| 20 | 42 | 14-15 | 電話ではなくお店に行った場合のことである。出前ではなく、日本人が直接お店に行くこと | 電話ではなく店に行った場合のことである。出前ではなく、日本人が直接店に行くこと |
| 21 | 42 | 20 | ロシア人のチョコレートのお店とパン屋 | ロシア人のチョコレートの店とパン屋 |
| 22 | 43 | 4 | 事例 6-4：ロシア人のお店について | 事例 6-4：ロシア人の店について |
| 23 | 43 | 7 | 経営するお店 | 経営する店 |
| 24 | 43 | 9-10 | ロシア人のお店 | ロシア人の店 |

| | | | | |
|----|-----|-------|---|--|
| 25 | 74 | 1 |  |  |
| 26 | 74 | 2 | 図 7-1 : 「ぬくい」 使用地域 | 図 7-1 : 「ぬくい」 類の使用地域 |
| 27 | 74 | 5-6 | 「ぬくい」の使用地域に九州は入っていない。 | 「ぬくい」 類の使用地域に九州も入っている。 |
| 28 | 74 | 6 | 当時の日本語は九州以外の地域の影響も考えられる。 | しかし、西日本の広範囲にわたっていることから、当時の日本語は九州以外の影響の可能性も考えられる。 |
| 29 | 75 | 12-13 | D2 たちが使っていた日本語異なっていたということを話してくれている。 | D2 たちが使っていた日本語が異なっていたということを話してくれている。 |
| 30 | 103 | 1 |  |  |
| 31 | 103 | 2 | 図 8-1 : 「ぬくい」 使用地域 | 図 8-1 : 「ぬくい」 類の使用地域 |
| 32 | 129 | 8 | ロシア人のチョコレートのお店とパン屋 | ロシア人のチョコレートの店とパン屋 |

| | | | | |
|----|-----|---|----------------------|---------------------|
| 33 | 129 | 5 | 第 2 部各論を章ごとに確認していこう。 | 第 2 部各論を章ごとに確認していく。 |
|----|-----|---|----------------------|---------------------|